

SB2033・SB2034、SB2035・SB2036 はほぼ同規模建物の建物両端辺を揃えて南北に平行並置し、ほぼ同一地点で複数回の建て替えが行われた大型建物群である。さらに、後述する 34-3 トレンチで検出した南北主軸の建物群とも建物端を揃え、建物配置の計画性を認める。これらの建物群は継続性、規則性、建物規模、出土遺物の様相等傑出した内容を示す。

調査区北側で検出した間仕切り構造の掘立柱建物である。第 30・32 次調査では別々の建物と捉えていたが (30-1Tr・SA2002.31-1Tr・SB2004)、本調査で一種の大型建物であることが判明した。道路状遺構 (SD2126)・SB2029・SK4002・SD2132・SA2002 (掘立柱群) などに後出し、SB2035 に先行する重複関係を有する。SB2035 がほぼ同一地点で再建されるため、未検出柱穴 (消失) も数基あるが、平面プランは梁間 3 間 (約 5.4 m)、桁行 7 間 (約 14.7 m)、周辺の条里地割に合致した方位を呈する東西主軸の建物となる (北 67° 東)。建物両端部から 2 間目に間仕切りを認め、3 × 3 間の中央部の両脇に 2 × 2 間の空間を設ける。柱間は梁間 1.8 m、桁行 2.1 m、建物面積は 79.4 m² を測る。後述する SB2034 とは対の関係にあり、建物両端辺を直線的に揃えるだけではなく、桁行の柱間筋も揃える。さらに、本建物の南辺と SB2034 の北辺間の距離は 5.4 m (18 尺) を測り、高い規格性に基づいた建物配置と評価できる。

掘方は建物主軸やそれに直交する方向に辺をほぼ揃えた隅丸方形を呈する。柱穴深度は 0.5 m 前後の柱穴が多いが、南西隅柱の SP2012 は 0.9 m に達し、隅柱を深く設けた可能性が高い。SP2011 では礎板石風の根石と柱痕が確認でき、その上部に抜き取り痕を認める。掘方底面付近にも柱痕があり、建て替えが想定できる (根石下位の埋土は初期柱痕の裏込めか)。同様に、SP2012 では柱痕は 1 基のみの検出だが、根石の下部にも入念な埋土を認め (9.10 層)、初期柱痕の裏込め土の可能性が高い。SP1025 の 7・8 層は初期裏込め土と考えられ、本建物は建て替えが行われたと判断できる。建て替え後の裏込め埋土は黒褐色・褐色・黄灰色の互層で、黄褐色粘土ブロックを多く含む。柱痕径は初期・建て替え後ともに、径 20 cm 前後を測る。埋土に焼土・炭化物を含む柱穴を認めるが、火災に伴う建て替え等は想定できず、焼土・炭化物を多量に含む SK4002 (8 世紀前葉から中葉) 等の周辺遺構からの混入と理解できる。そうした想定に妥当性があるならば、先行する SB2031 や SB2032 の柱穴埋土に焼土・炭化物の混入は認めず、本建物を造営するに際し、削平・造成を伴う周辺の基礎整備がなされた可能性を想定できるかもしれない。

510 ~ 548 は本次調査で出土した遺物である。比較的多く出土するが、調査当初は建て替えを想定していなかったため、取り上げは混在した状況となる。裏込めの大多数は建て替え時のものと考えられる。帰風時期を考える遺物として、同一個体の可能性が高い土師器碗がある (513.532)。シャープな高台、8 cm 近い高台径等から 9 世紀後葉頃の所産と理解できる。土師器皿 (512) は 9 世紀後葉頃の所産と考えたいが、10 世紀初頭ないし前葉まで下るかもしれない。須恵器皿 (515.528) は 9 世紀中葉から後葉頃に位置付けられる。また、間仕切り柱穴 (SP2014) 出土遺物は 9 世紀中葉頃の須恵器が主体を占め、造営時期を示唆する。また、過年度調査では SB2033 と SB2035 の 2 棟が同地点で建て替えが行われた状況は想定されていないが、第 30 次調査 SP1025 出土遺物 (8-136 ~ 141) は 10 世紀中葉前後に属する遺物が主体となる。間仕切り柱穴の SP1033 出土遺物 (8-151.152) は 8 世紀前半代、SP1045 出土遺物 (8-131 ~ 133) は 9 世紀後葉頃の様相を示す。こうした出土遺物の年代観に遺構の重複関係を考慮すると、9 世紀中葉に埋没する SD2132 に後出した重複関係や間仕切り柱穴出土遺物から、建立は 9 世紀後葉頃と考えたい。廃絶時期は土師器皿 (512) が参考となるが、後出する SB2035 の建立時期から 10 世紀初頭頃と考え、その間に建て替えが行われる。

518 は SP2011 から出土した三彩陶器蓋である。径 22 cm に復元でき、大振りの環 B 形態の蓋である。淡黄白色の精良な胎土で、外面には 3 種の釉薬が掛け分けられ、内面は淡緑色のみとなる。三彩陶器の器種として、環 B の事例は少なく、施設の性格を考える上では注視すべき遺物となる。形態的特徴から 8 世紀後半から 9 世紀初頭の所産と考えられる (註 11)。SP2026 (SB2035 出土の 591) や遺構面掘り下げ中 (442) にも同一個体と考えられる三彩陶器蓋が出土する。前者は SP2011 と重複関係を有し、後者は両柱穴の直上出土となる。なお、三彩陶器蓋は 34-3 トレンチからも出土し (970.1142.1252)、径が合致しないため、セット関係はないが、環 B 形態の三彩も認める (403.954.969)。

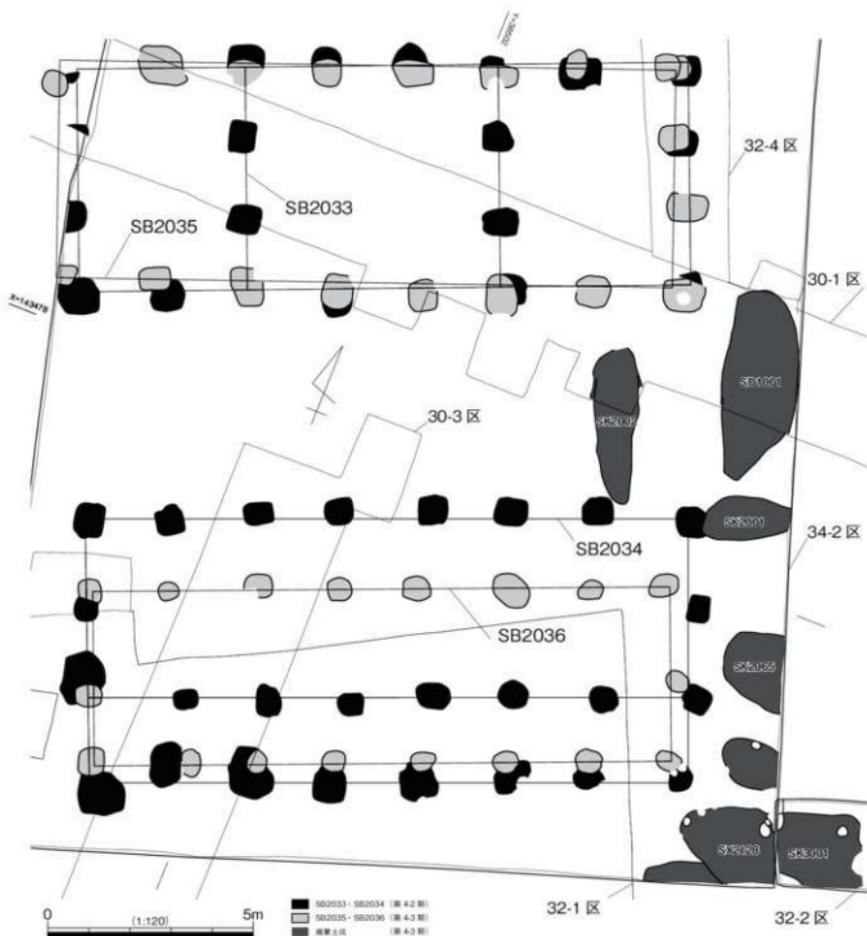
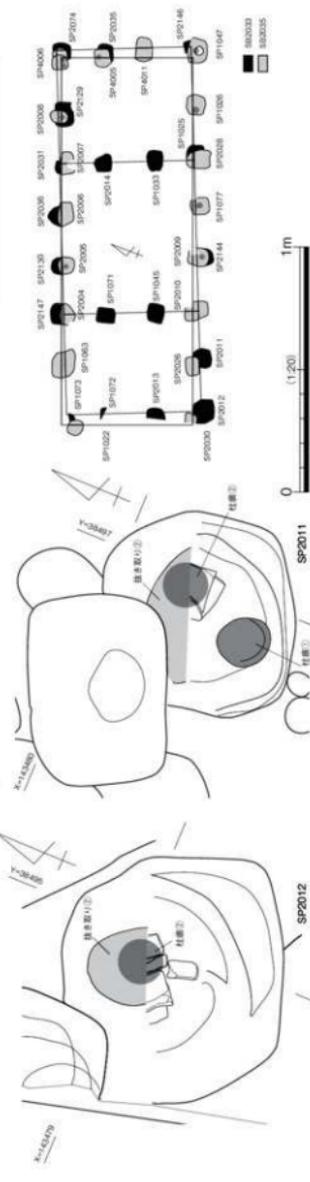
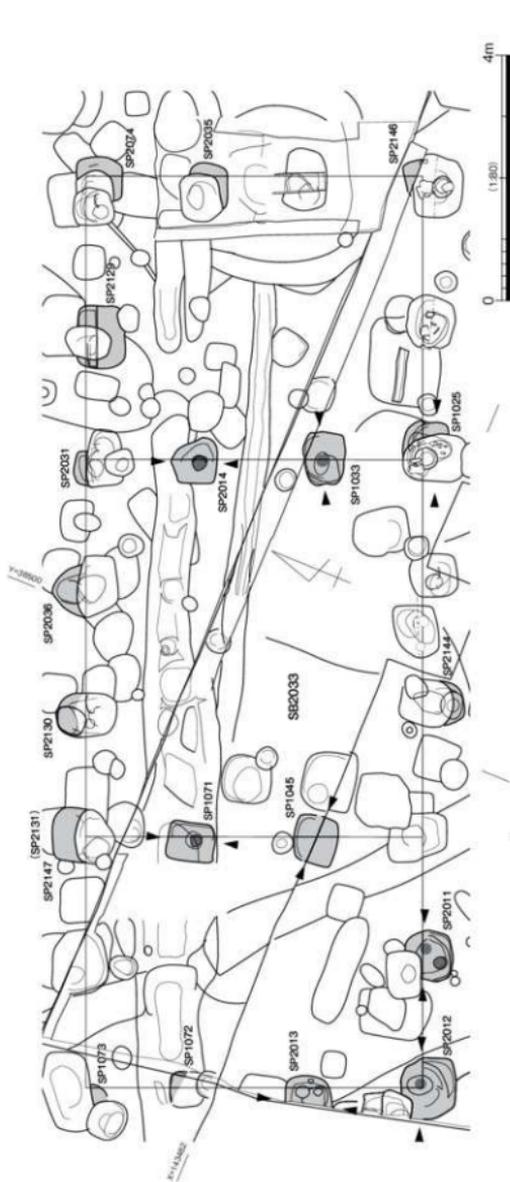


図 300 34-2Tr・SB2033～2036 平面図

SB2034 (図 279.300.304～306)

調査区南側で検出した掘立柱建物である。道路状遺構 (SD2125、SD2126)・SH2003・SB2008・SB2028・SB2031・SB2032 などに後出し、SB2036 に先行する重複関係を有する。第 32 次調査では SA2011、SA2009 として、本建物の南側桁行、廂列を捉えており、第 34 次調査で建物全体像が判明したものである。平面プランは梁間 2 間 (約 4.2 m)、桁行 7 間 (約 14.7 m)、南面廂構造となり、周辺の条里地割に合致した方位を呈する東西主軸建物である (北 68° 東)。身舎面積は 61.7 m²、廂を含めた面積は 92.6 m² を測る大型建物である。柱間は梁間、桁行ともに 2.1 m を測るが、廂はばらつきを認める。SB2033 とは対の関係にあり、建物両端辺を直線的に揃えるだけでなく、桁行の柱間筋も揃え、本建物の北辺と SB2033 の南辺間の距離は 5.4 m (18 尺) を測る。さらに、後述する 34-3Tr・SB2014 の北辺部と本建物の廂ラインは直線上に並び、建物配置の高い規格性が窺える。



SP2012 柱礎之礎石
 SP2011 柱礎之礎石

圖 301 34-2Tr・SB2033 平面圖

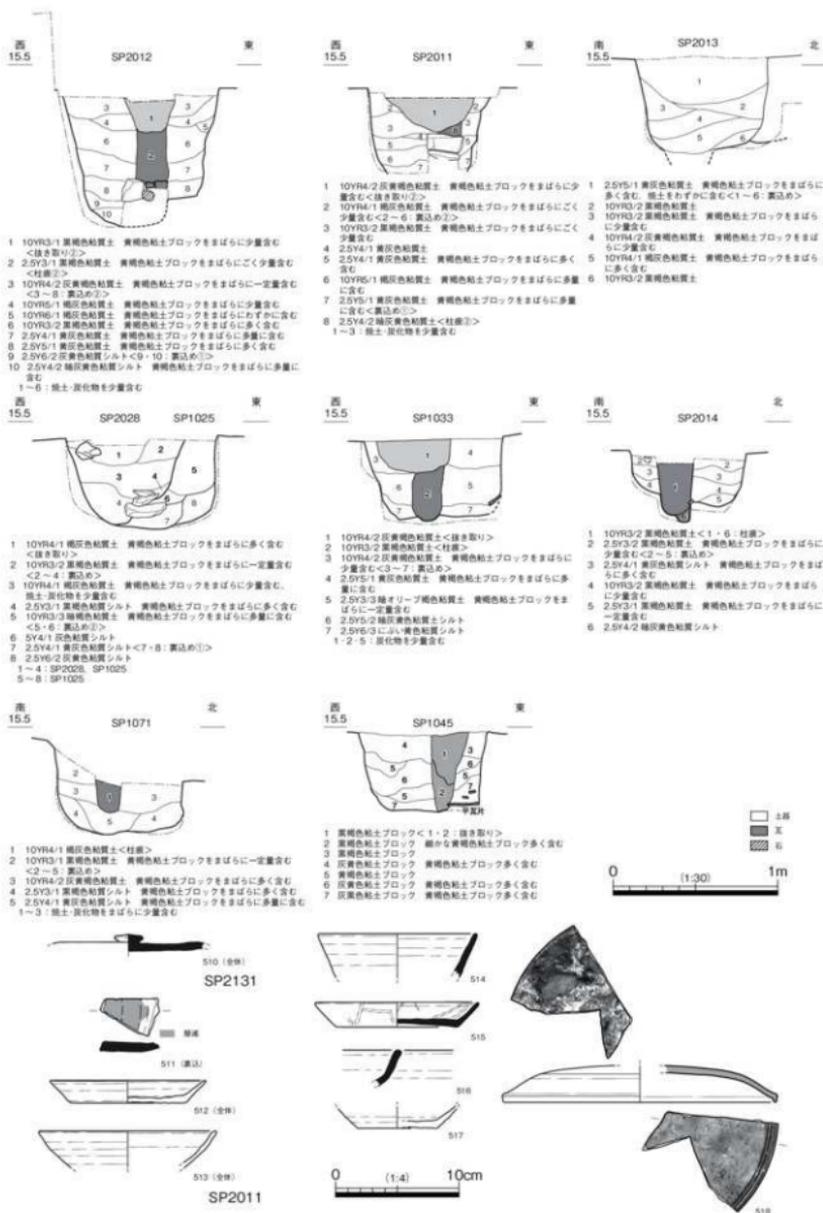


図 302 34-2Tr・SB2033 断面図及び出土遺物 1

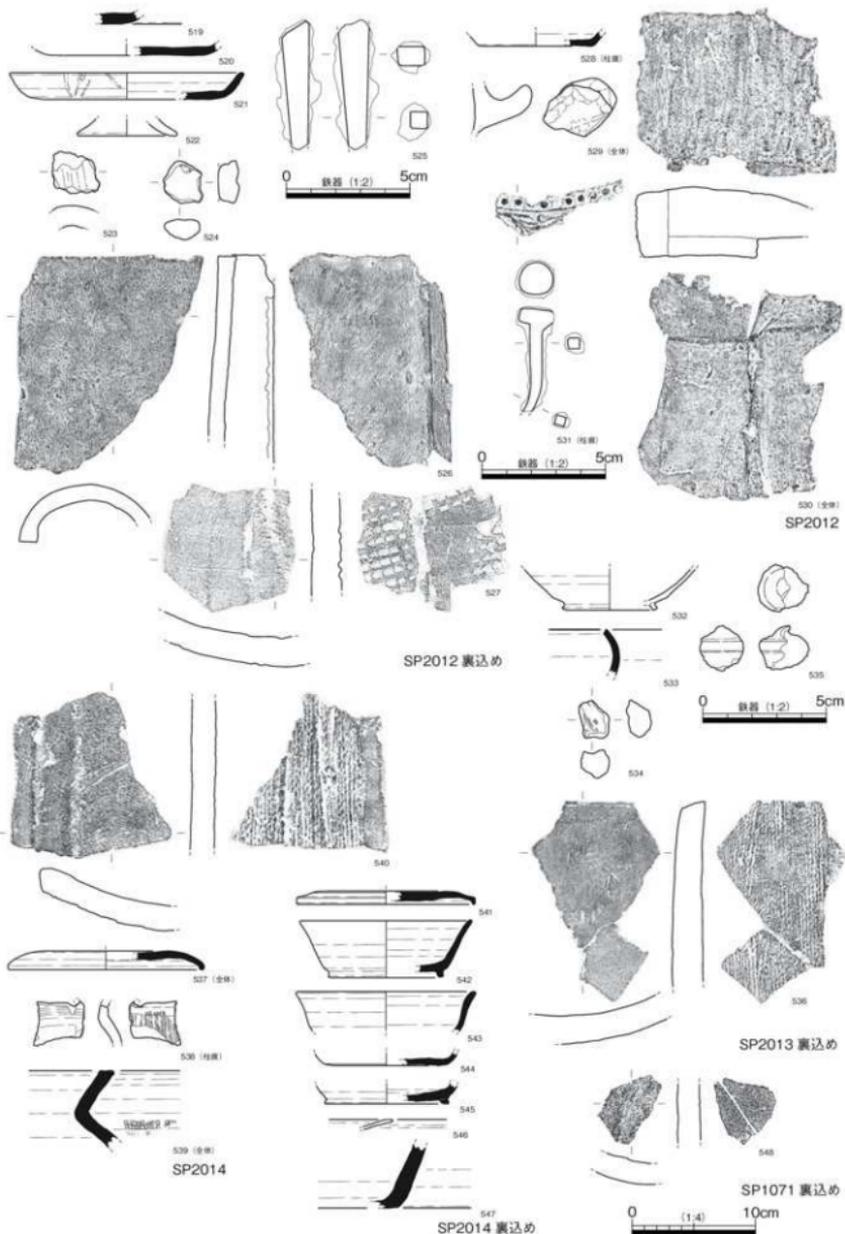


図 303 34-2Tr・SB2033 出土遺物 2

身舎の柱穴掘方は建物主軸やそれに直交する方向に辺をほぼ揃えた隅丸方形を呈するが、やや歪な形状の柱穴も認める。柱穴深度は0.4～0.5mを測り、最も深度の浅いSP1081には礎板石を認める。多くの柱穴で柱痕を検出しており、身舎部分の柱痕筋は比較的通る。柱痕径は最大0.2mを測り、一部は上位に抜き取り痕を認める。廂部分の柱穴は歪な平面形を呈し、柱筋の通りもやや悪く、身舎との柱並びに食い違いを見せる柱穴が多く、土廂的な構造と考えられる。柱穴埋土は身舎・廂柱穴に差異は認めず、黒褐色・灰黄褐色・褐色の互層で、黄褐色粘土ブロックをまばらに多く含み、焼土・炭化物を一定量包含する柱穴が多い。SB2033に酷似した埋土であり、建物建立の同時性が想定できるが、本建物では建て替え痕跡は確認できない。なお、SB2033と同様に、埋土に焼土・炭化物を含む柱穴が一定数あり、先に想定した削平・造成を伴う建物群周辺の基礎整備の可能性を想定しておきたい。

本次調査では掘り下げ調査は最小限に留めたため、出土遺物数は限られるが(549～556)、第30・32次調査では一定量の遺物が出土する(8-402～407、10-101～104、10-110～114)。古相を示す遺物を一定量認めつつ、9世紀後葉、10世紀中葉頃の遺物を認める。9世紀後葉に属する遺物は須恵器皿(10-113)・黒色土器椀(10-110、552)・土師器杯(10-101)がある。須恵器皿(10-113)は底部から口縁部の屈曲が鈍い。黒色土器椀(552)は斜め上方に開く口縁部形態を呈し、胎土は極めて精良で、焼成は堅緻である。黒色土器椀(10-110)は高台径が大きく、胎土はやや粗い。10世紀前葉から中葉に属する遺物は須恵器杯(554)・土師器杯(8-404)がある。

遺構所属時期は、出土遺物の年代観と9世紀中葉には廃絶するSB2031・SB2032に後出した重複関係から9世紀後葉頃の造営と考えたい。廃絶時期は10世紀前葉から中葉に属する遺物が参考となるが、いずれも全体掘り下げ時出土遺物であり、後出するSB2036と重複関係のある柱穴からの出土遺物であるため、混入の可能性を想定した上、遺構重複関係を重視し、後出するSB2036の建立時期が10世紀前葉であることから10世紀初頭頃の廃絶と考えたい。対となるSB2033は建て替えが行われるが、本建物では建て替え痕跡は見出せないが、一体的な建物改修がなされたとするならば、廂の増設がそれに対応するかもしれない。

SB2035 (図 279.300.307～314)

調査区北側で検出した建物である。第30次調査30-1トレンチで南東部の一部、第32次調査32-4トレンチで東辺部が確認されており、本次調査で建物全体を把握した。SB2034とほぼ同一地点で建て替えられ、柱穴位置は大部分の柱穴は先行柱穴と重複する。平面プランは梁間3間(約5.2m)、桁行7間(約15m)となり、周辺の条里地割に合致した方位を呈する東西主軸の建物である(北69°東)。面積は78㎡を測る。柱間は梁間1.5mと2.1mが混在し、桁行はおおむね2.1mを指向する。後述するSB2036とは対の関係にあり、建物両端辺を直線的に揃えるだけでなく、桁行の柱間筋も揃える。さらに、本建物の南辺とSB2036の北辺間の距離は7.2m(24尺)を測り、前代のSB2033・S2034と同様に、高い規格性に基づいた建物配置と評価できる。

掘方平面形は建物主軸やそれに直交する方向に辺をほぼ揃えた隅丸方形が多いが、円形指向や歪な形状の柱穴も認める。柱穴深度は0.2～0.7mと様ではなく、隅柱の柱穴が他に比して深い傾向にある。さらに、東梁間と南桁行が北桁行に比してやや深く、さらに北桁行の柱穴深度は交互に深浅を認める。SP1047・SP2005を典型とするが、柱痕を抜き取った後、抜き取り上部に拳大から2倍程度の礎や瓦を設置しており、掘立柱建物から礎石建物へ建て替えが行われたと考えられる。柱痕は径20cm前後を測るが、隅柱であるSP1047は径30cmに達し、隅柱に太い柱材が用いられた可能性を示唆する。柱痕底には根石を認める柱穴もあり、建物東半に偏在する傾向にある。裏込め埋土は黒褐色・褐色・灰黄色の互層で、黄褐色粘土ブロックを多く含み、単位が細かいことから入念な裏込めがなされたことと評価できる。焼土・炭化物を一定量含むが、先行するSB2033からの建て替え時に埋土を再掘削したことによる再混入と理解したい。抜き取り埋土は各柱穴で色調は一律ではないが(暗灰黄色、黒褐色、褐色)、単層ないし数単位の埋土で構成される。前述したように、上部付近に石材や瓦の充填を認め、柱抜き取り後に礎石建物へ改修した可能性が高い。抜き取り埋土には焼土・炭化物を多く包含しており、建て替えの要因に火災が想定できるかもしれない。

出土遺物は557～653がSB2035出土遺物、654～679は重複関係の認識ができず、SB2033とSB2035の出土遺物を一括して取り上げた遺物である。また、第30次調査8-142～150、第32次調査10-272～279が本建物の柱穴出土遺物である。出土遺物の年代観は古相を示す一群、9世紀後葉頃、10世紀中葉前後、11世紀前葉頃に大別できる。9

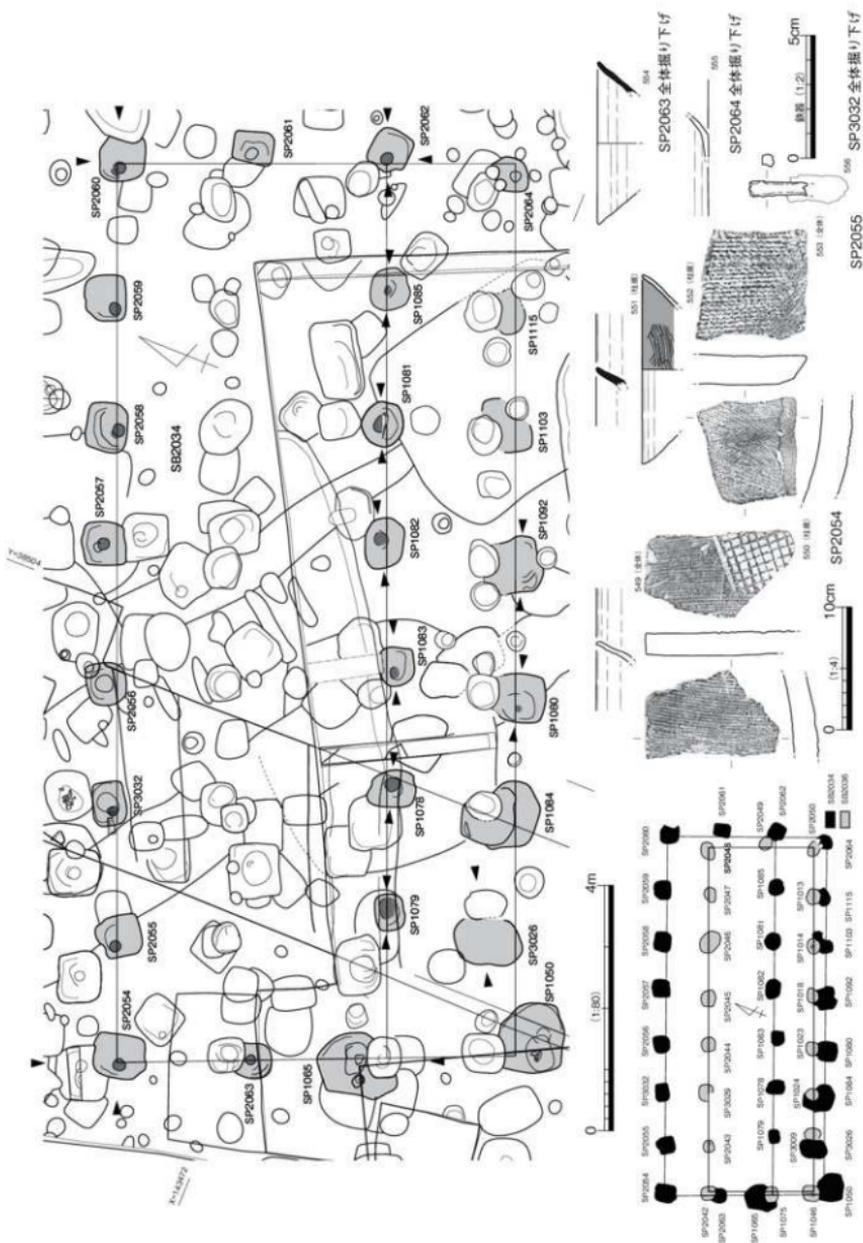


図 304 34-2Tr・SB2034 平面図及び出土遺物

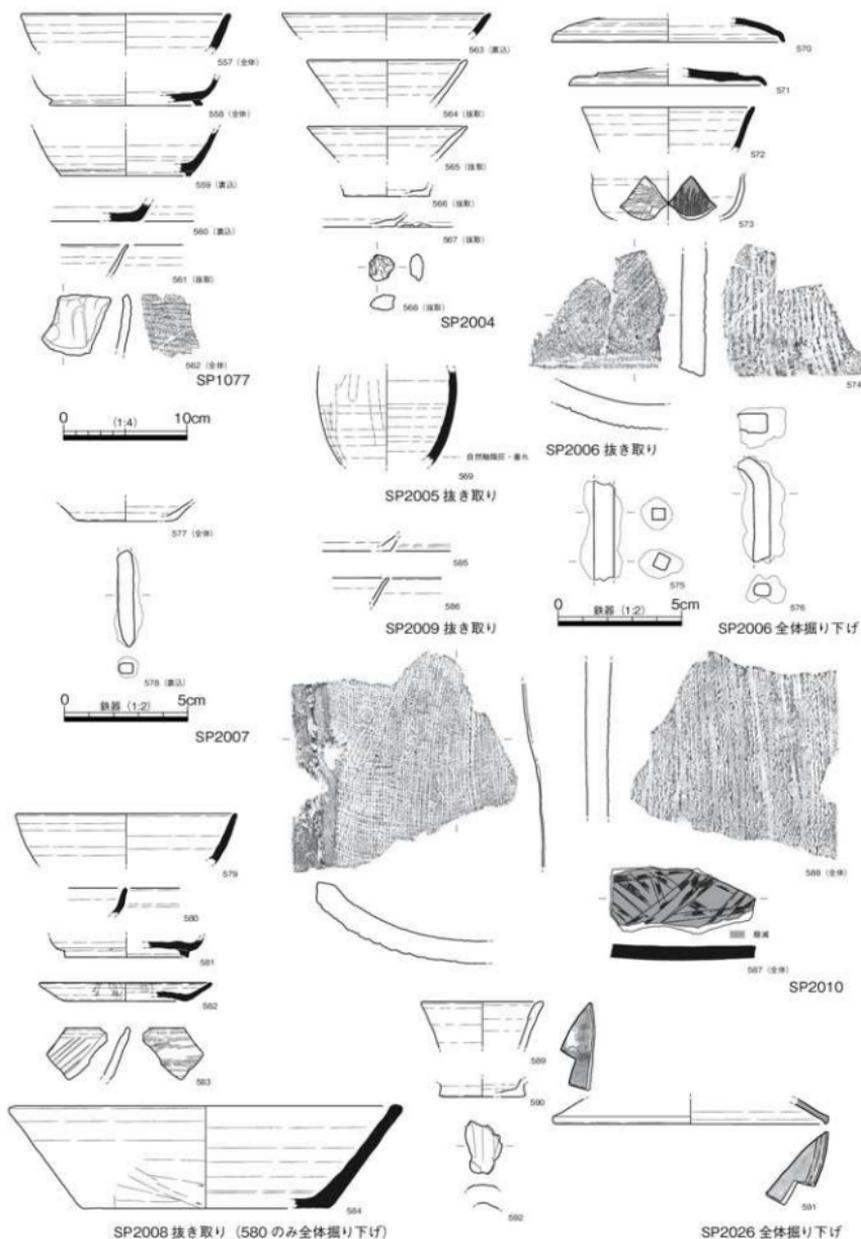


図 311 34-2Tr・SB2035 出土遺物 1

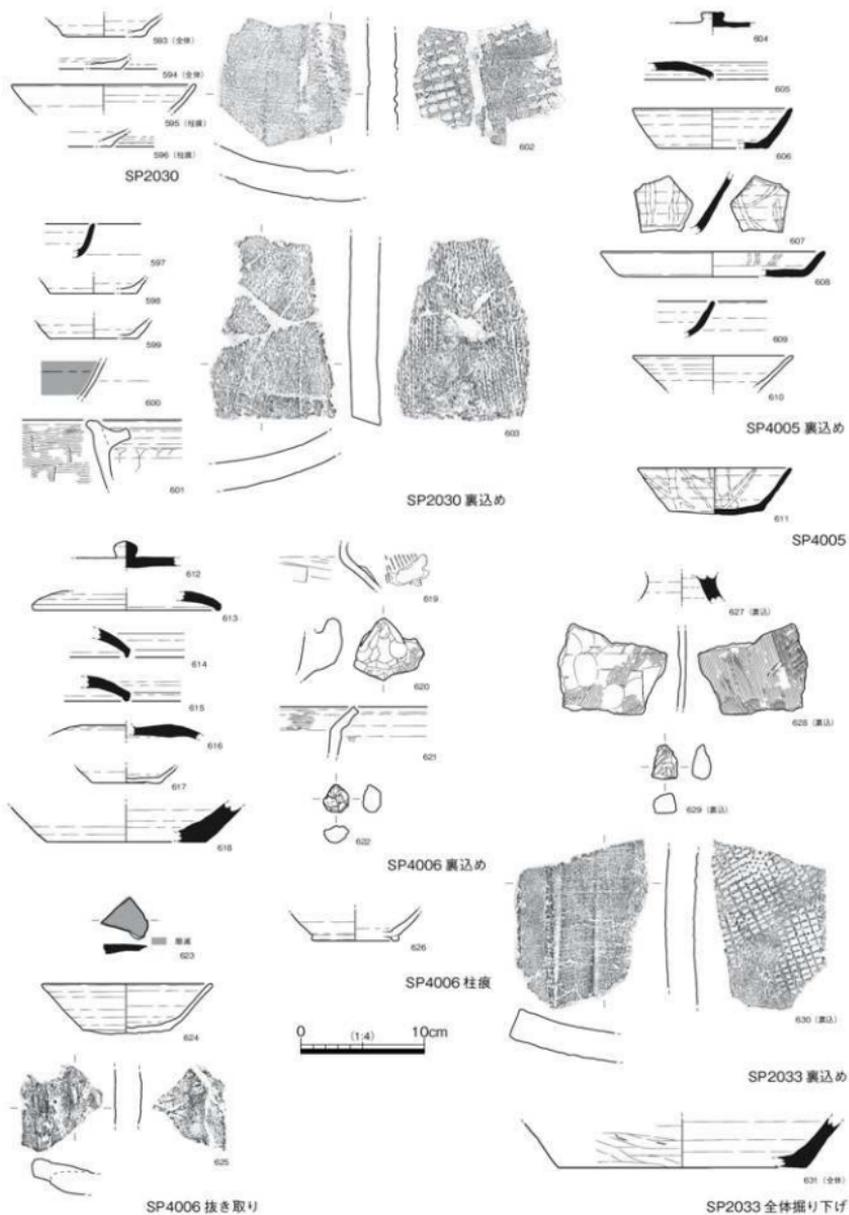


図 312 34-2Tr・SB2035 出土遺物 2

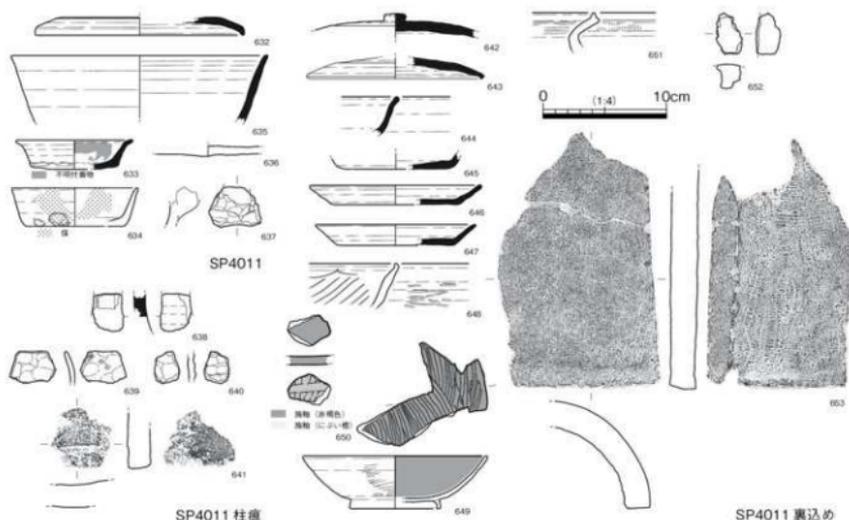
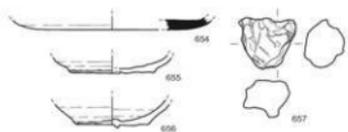


図 313 34-2Tr・SB2035 出土遺物 3

世紀後葉の一群は須恵器杯 (678.8-146)、須恵器皿 (582.646.647)、土師器杯 (564.565)、黒色土器椀 (649.8-147)、須恵器壺 (569)、10 世紀中葉前後は須恵器杯 (611)、土師器杯 (593.610.624.655.656.8-142.8-143)、11 世紀前葉は土師器杯 (634) のほか、土師器台付杯 (8-145)、土師器羽釜 (601) となる。須恵器壺 (569) は猿投窯跡須恵器長頸壺で、外面は褐釉風に発色し、肩部に厚く降灰した自然釉が垂れる。焼土片が一定量出土しており、元来 SK4002 に含有されたものか、建物の壁土等に用いられたものかは判断できない。三彩陶器蓋は 518 と同一個体と考えられる。587・638 は円面碇の可能性が高い。

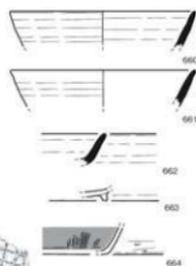
遺構帰属時期については、裏込め出土遺物は 9 世紀後葉から 10 世紀前葉 (~中葉) が多く、抜き取り出土遺物には 10 世紀中葉前後から 11 世紀前葉までの遺物を比較的多く認め、建物の重複関係から 10 世紀前葉の造営を想定し、礎石建物への転換は 10 世紀中葉と考えたい。礎石の下部構造を想定した礎・瓦群は間隙が多く、11 世紀前葉までに属する遺物は機能時と混入と理解すれば、廃絶時期を 11 世紀前葉頃と捉えることもできる。



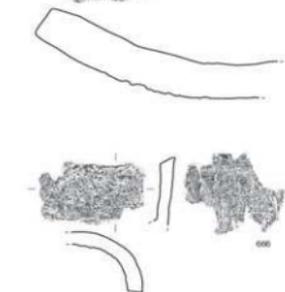
SP2004・SP2147 全体振り下げ



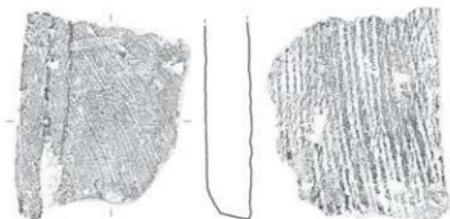
SP2006・SP2036 全体振り下げ



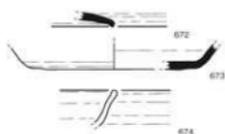
SP2006・SP2036 裏込め



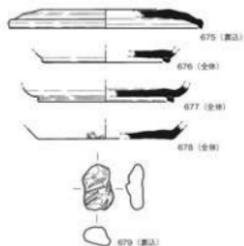
SP2005・SP2130 裏込め



SP2007・SP2031



SP2008・SP2129 裏込め



SP2009・SP2144

図 314 34-2Tr・SB2033.2035 出土遺物

SB2036 (図 279.300.315 ~ 318)

調査区南側で検出した建物である。第 32 次調査 32-1 トレンチで南側桁行を検出し (SA2010)、本調査で建物の全体像を把握した。SB2034 とほぼ同一地点で建て替えられており、北側桁行が竊列に重複する。平面プランは梁間 2 間 (約 4.2 m)、桁行 7 間 (約 14.2 m) となり、周辺の条里地割に合致した方位を呈する東西主軸建物である (北 68° 東)。面積は 59.6 m² を測る。柱間はばらつきがあり、梁間 1.8 m・2.1 m・2.4 m が混在し、桁行はおおむね 2.1 m を指向する。SB2035 とは対の関係にあり、建物両端辺を直線的に揃えるだけではなく、桁行の柱間筋も揃え、さらに、本建物の北辺と SB2035 の南辺間の距離は 7.2 m (24 尺) を測り、高い規格性に基づいた建物配置と評価できる。

掘方平面形は隅丸方形を呈する柱穴は少なく、多くは円形を指向し、柱穴規模も 0.6 m 前後と小さい。本調査での掘り下げは最小限に留めたため、柱穴深度が判明した柱穴は限られるが、柱穴深度は 0.4 ~ 0.7 m と一様ではない。多くの柱穴で抜き取り上面に拳大からその 2 倍程度の石材や瓦を認め、礎石下部への建て替えが想定できる。下位確認を実施した柱穴では径 20 cm 弱の柱痕を認め、SP2044 では根石、SP1014 は瓦を礎板石状に設置する。裏込めは黒 (褐) 色・暗灰黄色・褐色の互層で、黄褐色粘土ブロックの粗密で細分が可能となる。SB2035 に比して盛土単位がやや粗い。抜き取り埋土は各柱穴で色調は一様ではないが (暗灰黄色、黒褐色、褐灰色)、単層埋土で構成される。SB2035 と同様に、掘立柱建物時の裏込めに比して多くの焼土・炭化物を包含することから、建て替えの要因に火災を想定できるかもしれない。

出土遺物は 680 ~ 698 が本調査で出土した SB2036 出土遺物、第 30 次調査 8-397 ~ 401、第 32 次調査 10-105 ~ 109 が本建物の柱穴出土遺物である。出土遺物の年代観は古相を示す一群、9 世紀後葉頃、10 世紀前葉から中葉、10 世紀後葉、11 世紀初頭から前葉頃に大別でき、SB2035 と酷似した様相を示す。9 世紀後葉の一群は須恵器環 (680)、10 世紀前葉から中葉は、土師器環 (684.687 ~ 691)、黒色土器椀 (10-106)、10 世紀後葉は須恵器環 (692)、11 世紀初頭から前葉は土師器環 (8-398、10-108)、台付杯の可能性のある 10-399 が指標となる。

遺構帰属時期については、裏込め出土遺物は 9 世紀前葉から中葉頃の遺物が多く、抜き取り出土遺物には 10 世紀後葉から 11 世紀前葉までの遺物を比較的多く認め、建物の重複関係から建物の造営は 10 世紀前葉頃、礎石建物への転換は 10 世紀後葉頃と考えられ、SB2035 との関係から造営時期は 10 世紀中前葉まで遡る可能性を残す。廃絶時期は抜き取り上面の礫や瓦に混じる遺物に 11 世紀初頭から前葉の遺物を含み、これらの遺物を機能時の混入と理解し、11 世紀前葉頃と捉えておきたい。

小型柱穴群 (建物群) (図 319)

調査区北端部を除くほぼ全面に展開する柱穴群である。柱穴数は 100 基をわずかに上回る数を数える。径 0.3 m 以下の小柱穴で黒色系の埋土を基調とする。東接する 34-3 トレンチでは本調査区より柱穴数・密度が高く、分布の中心となり、周縁に向けて遺構密度が低くなる。建物復元は困難を極め、第 30 次調査 SB2005 でわずかに復元できる程度であるが、柱穴数が多く煩雑な建て替えが看取できる。掘り下げ調査は実施していないが、周辺における調査例や上面の出土遺物から、帰属時期は 11 世紀中葉から 13 世紀頃と考えたい。当該期には讃岐国府跡の西半部で 10 を超える屋敷地が復元されており (佐藤 2016 b)、本調査区はその一屋敷地の一角に位置する。また、32-1 トレンチの南西部に緩やかに屈曲する溝状遺構は 33-2 トレンチに連続しており、小型柱穴群が示す屋敷地的なまとまりの東端部を画する何らかの施設の可能性も想定できる。

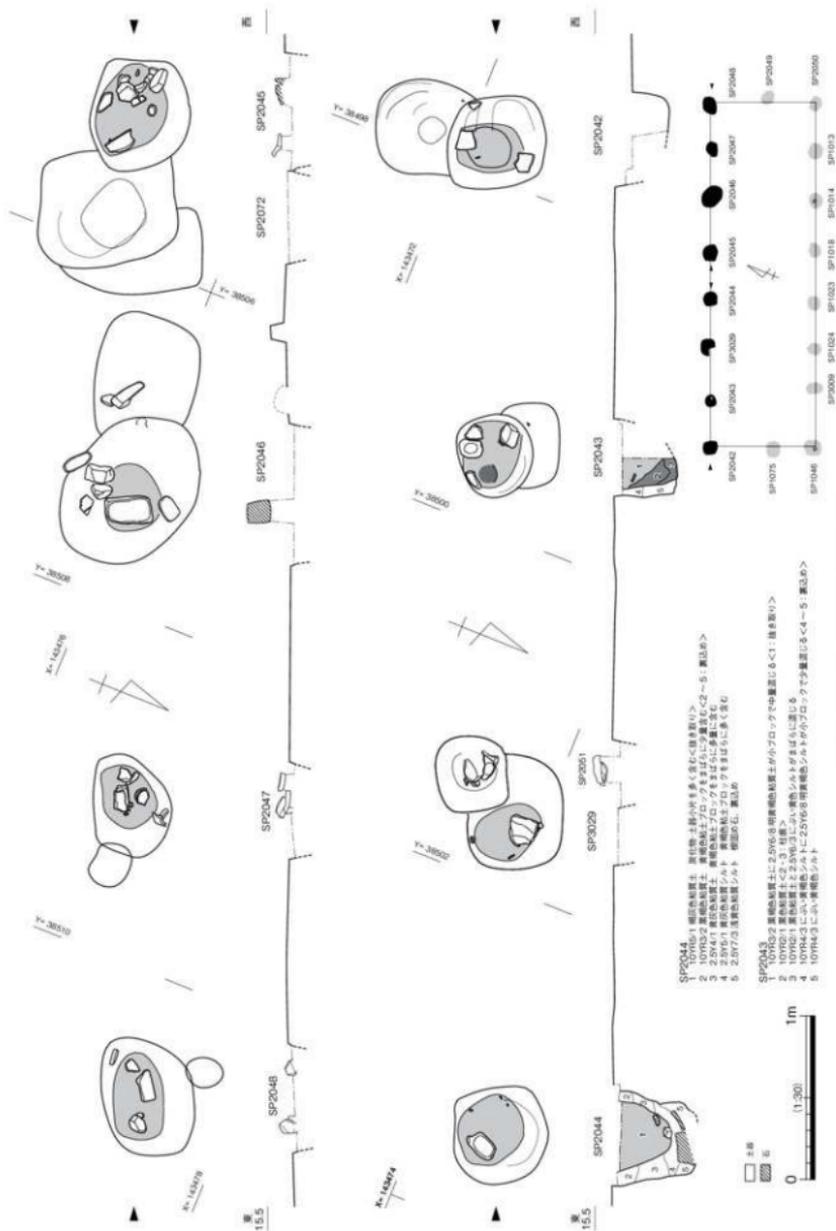


図 316 34-2Tr・SB2036 平面図 1

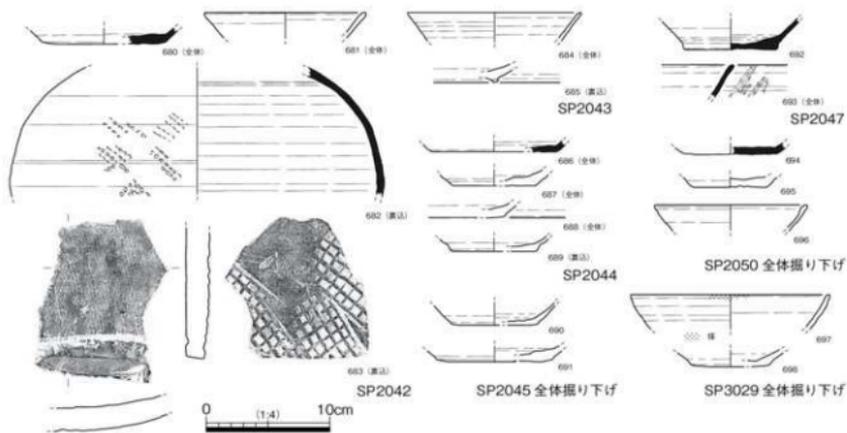


図 318 34-2Tr・SB2036 出土遺物



図 319 34-2Tr 遺構平面図

SH2003 (図 320)

調査区中央部で検出した堅穴建物である。平面形は方形を呈し、南北検出長 4.5 m・東西検出長 4.7 m の略正方形を呈する。北西辺中央やや西寄りに煙道を認め、上面に黄褐色系粘土による造り付けカマドを認める。掘り下げ調査は実施していないが、上面検出時の遺物を図化した (699～704)。須恵器坏身 (700)・坏蓋 (699) の年代観から 7 世紀前葉から中葉 (第 2 四半期頃) の帰属時期が想定できる。周辺には少なくとも 3 基の堅穴建物がある。

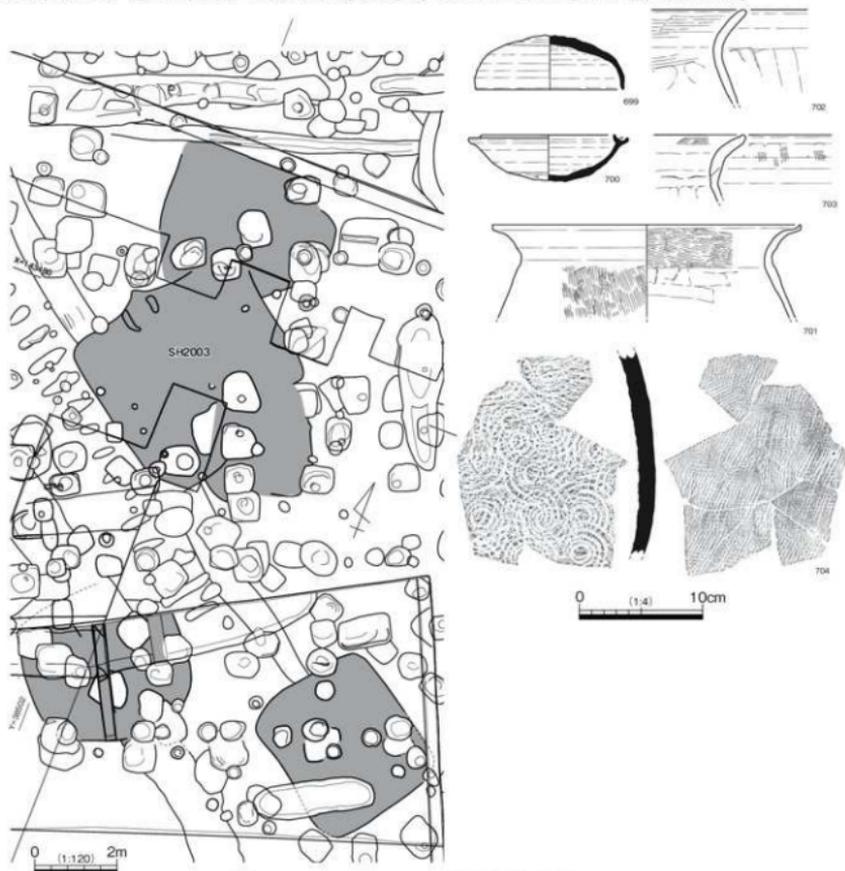


図 320 34-2Tr・SH2003 平面図及び出土遺物

道路状遺構 (SD2126・SD2125・SX2127・32-1Tr・SD1010、34-3Tr・SD3106、図 321)

調査区北西部から南側中央部にかけて検出した 2 条平行溝とその間にほぼ等間隔に並ぶ波板状遺構と考えられる不明遺構群で構成される。全遺構に先行する。34-3 トレンチ南西隅でも SD2125 の延長線上で溝を検出しており (34-3Tr・SD3106)、検出総延長は約 47 m に及ぶ。検出した限りは直線を呈する。主軸方位を北 53° 西にとり、正方位や条里地割に合致せず、後出する堅穴建物群の一部に呼応し (SH2003 ほか)、帰属時期を示唆する。1 箇所のトレンチ調査に留めた。東側側溝 (SD2125) は幅 0.8 m 前後、深度約 0.2 m を測り、断面形状は外側が緩やかに、内側は急に立ち上がり、上層埋土に連動して内側に浅く広がる。流水痕跡は認めないが、黄褐色系粘土ブロックを多く包含する。西側溝 (SD2126) は幅 1.1 m、深度約 0.45 m を測り、断面形状は外側が急に、内側は緩やかに立ち上がり、内側は 1 層埋土

に連動して内側に浅く広がる。埋土は最下層に黄灰色砂シルトを認める。4層は機能時埋積層の可能性があり、それを切り込むように、2・3層下端面があり、同じく流水痕跡の可能性のある3層を認め、以高は黄褐色粘土ブロックを含む埋土で短期間に埋め戻される。開削後、機能時の堆積①・流水痕跡（5層）→機能時の流入土（4層）→溝浚え後の機能時の堆積層①・流水痕跡（3層）→埋め戻し土（1・2層）という復元できる。溝の内側の道路部分には側溝に直交する方向で幅0.2m前後、長さ0.6～1.4mの長楕円形の土坑が等間隔に配置される。検出数は17基を数え、SX2127のみ半截調査を実施した。浅いU字形の断面形状を呈し、深度は極めて浅く、砂やシルトを基調とした埋土となる。道路部分の東半に偏在し、中央付近の11m程度の範囲でのみ検出した。いわゆる波板状遺構と呼称される遺構である。出土遺物が縄文晩期に属する土器のみの出土で、帰属時期は判然としない。重複関係から7世紀前葉から中葉に属するSH2003に先行するが、主軸方位が同等であることから、わずかに先行する時期への帰属を想定したい。

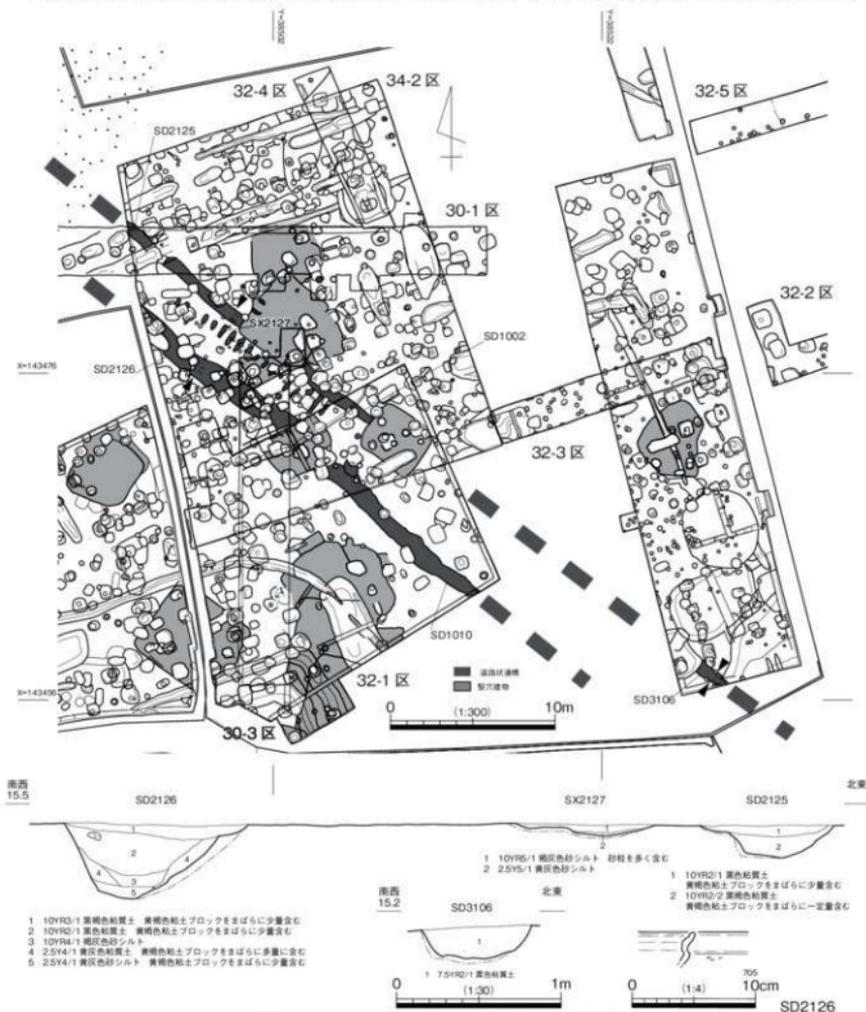


図 321 34-2Tr・SD2126 平面図及び出土遺物

SD2025 (図 322)

調査区北側で検出した溝状遺構である。主軸方位は周辺の条里地割に合致し、北71°東にとる。正方位主軸基調のSB2029に後出し、8世紀前葉から中葉のSK4002・9世紀中葉埋没のSD2132に先行する重複関係を有し、開法寺東方地区では条里方位を呈する最も古い遺構の一つとなる。検出長は12mを超える。幅0.3m前後、深度0.15mを測り、半球形の断面形状を呈する。埋土は黄褐色粘土ブロックを包含する黒褐色粘質土で、流水痕跡は認めない。一部の掘り下げに留めたが、溝底レベルは西に緩やかに傾斜する(掘り下げ東西両端の比高差は0.05m程度)。出土遺物は稀薄で、図化が可能な遺物は須恵器杯身(706)に限られる。口縁部に歪みを認め、修復元には問題を残すが、内底部に降灰があり、平底気味の底部から身として図化した。佐藤編年Ⅱ古、信里編年様相4の所産と考えられ、7世紀末から8世紀初頭に属する。SD2025は7世紀末から8世紀初頭頃に機能した溝と考えておきたい。

SD2132.SD4009.SA2002 (図 293.322 ~ 327)

調査区北側で検出した2条平行の溝とその間に位置する櫓である。両者がセットとなり、掘立柱枘構造の遮蔽施設と両側側溝と評価できる遺構である。30-1トレンチと32-4トレンチで確認しており、本調査区で面的な追確認を行った。遺構名はSD2132の東側については32-4Tr・SD4003CをSD2132①、一度途切れて30-1トレンチのSD1002に連続する西側をSD2132②とし、SD4009の東側は32-4トレンチの遺構名を踏襲し(SD4009①)、2回途切れるため、中央部分をSD4009②、30-1トレンチのSD1040に連続する西側の溝をSD4009③とした。正方位主軸基調のSB2029、SD2025、8世紀前葉から中葉に属するSK4002、SB2030に後出し、SB2033・SR2035、SD2021に先行する重複関係を有する。主軸方位は周辺の条里地割に合致し、北67°~68°東にとる。

南側(内側)側溝のSD2132は東に向かうに従って深度が浅くなり、一度途切れた後、調査区東端部付近で消失し、本調査区の東約13mにある32-6トレンチでは確認できない。溝幅もそれに連動して西側では最大幅約1.2mを測るが(30-1トレンチでは1.4mに達する)、中央から東側では0.6~0.4m幅まで減じ、深度も30-1トレンチでは0.8~1mを測るが、34-2トレンチ東端部のSD2132①では深度約0.1mと浅くなる。SD2132②の溝底には凹凸を認め、土坑ないし柱穴状の窪みやテラス面が交互に設けられ、全体としては西に傾斜する。テラス面間の東西両端の比高差は0.2m前を測る。SD2132①・②間の途切れは、遺構面が東にやや傾斜する点に加え、こうした深度の深浅が反映されたものと理解できる。断面形状は逆台形を呈し、SD2132①は焼土・炭化物を多く含む黒褐色粘質土の単層だが、SD2132②は30-1トレンチでは小塊土塊や基盤層ブロック(黄褐色シルト)の小ブロックを含む暗灰色シルトとなり、後者は短期間に一気に埋め戻される。遺物は均質に包含され、集中する状況は確認できず、本調査区では28ヶ所コンテナで4箱の遺物が出土した。

出土遺物は須恵器、土師器、黒色土器に加え、一定量の瓦を認める組成となり、供膳具が多いという特徴がある。707~712はSD2132①の出土遺物である。須恵器蓋(707)は扁平化した摘みを認め、須恵器杯(708,709)は高台が底部外縁部付近に位置する。710は須恵器杯の転用碗、711は円面碗である。裏面に墨書痕跡を認めるが、判読できない。713~733はSD2132②出土遺物である。須恵器蓋は扁平化した摘みを有し、天井高が低く、口縁部の矮小化が著しい。須恵器杯は古相を示すものもあるが(716)、高台が底口縁部境に位置するものも認める(718)。723は赤彩土師器蓋である。外面には入念なヘラミガキを施す。729は黒色土器(B類)杯である。口縁部は外反し、端部のみ小さく引き出し外方させる。内面には炭化物が固まりで付着する。730は黒色土器(B類)皿である。内外面とも丁寧なヘラミガキを施す。732・733は平瓦である。凸面調整は前者が全面に及ぶ格子叩き、後者が直線的な縄叩きとなる。731は焼土片である。出土遺物の年代観はおおむね8世紀後葉から9世紀前葉となり、端部が矮小化した須恵器蓋や底部外縁部に高台を設ける須恵器杯は9世紀中葉まで下る可能性が高く、埋没は9世紀中葉まで下ると考えておきたい。なお、本調査区のSD2132①・②の瓦の出土量は破片数15点(丸瓦2点(13%)、平瓦13点(87%))、総重量2,857g(丸瓦92g(3%)、平瓦2,765g(97%))を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では70%:30%だが、重量比では33%:67%となる。

北側(外側)側溝のSD4009は1条の溝として連続せず、途中で2回途切れる。SD4009②・③間は1m程度であるため、SD2132で認める底面の凹凸に起因する可能性が高いが、SD4009①・②間は4.3mもあり、当該箇所は櫓柱穴が未検

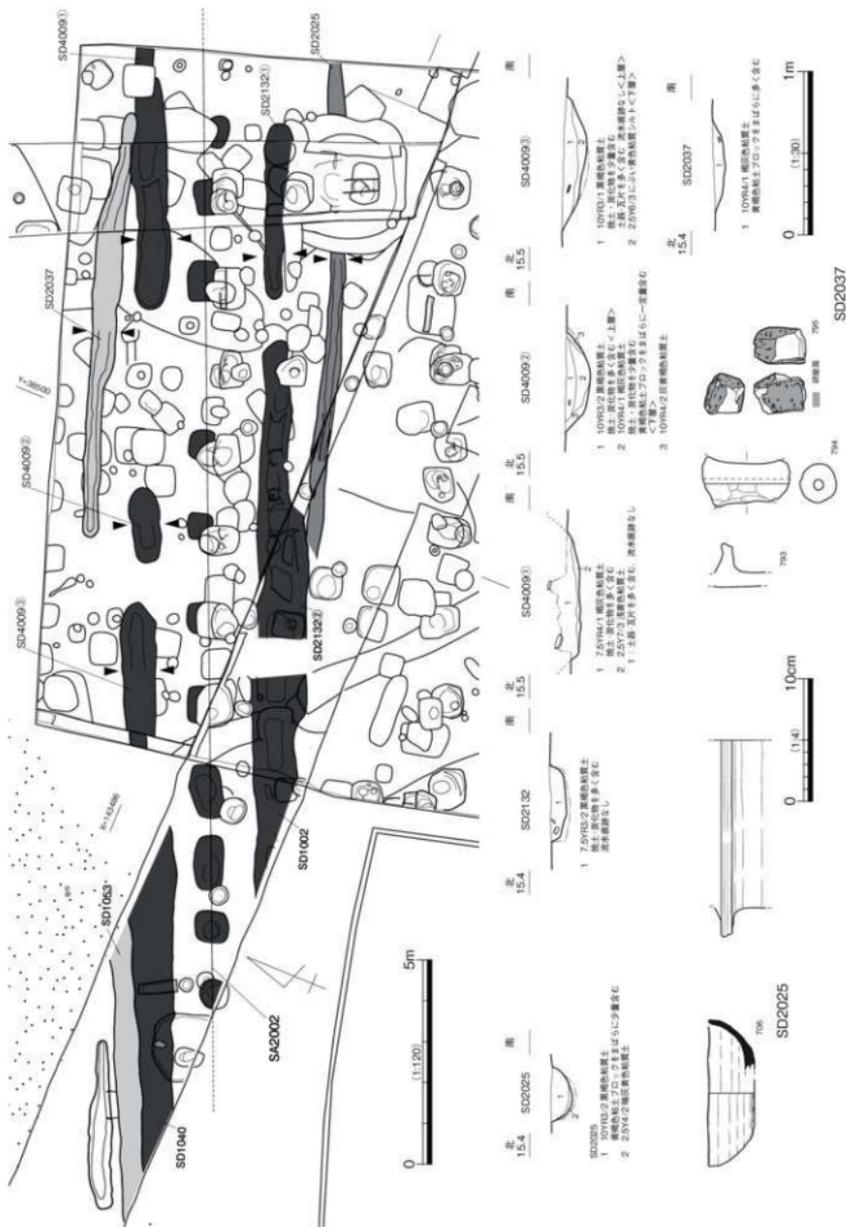


図 322 34-2Tr・SA2002.SD2025.2132 はか平断面図及び出土遺物

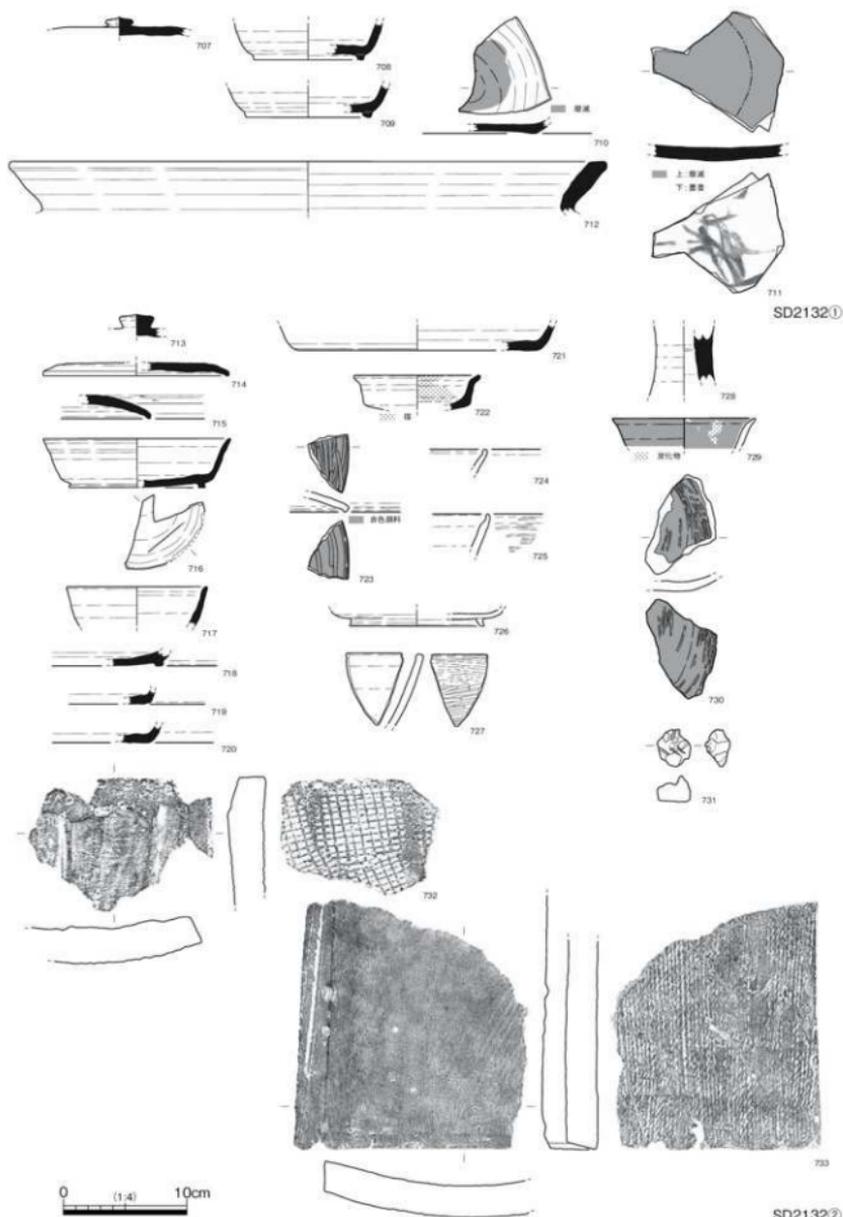


図 323 34-2Tr・SD2132 出土遺物

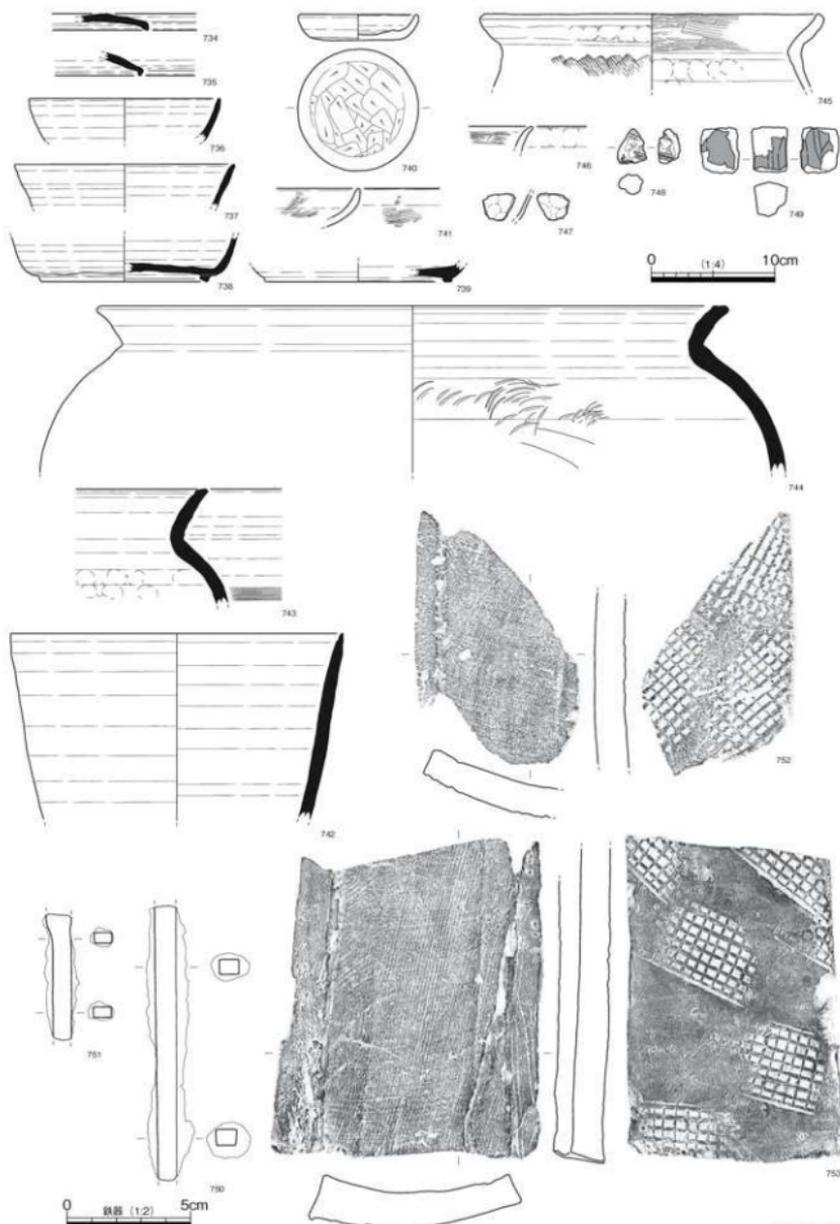


図 324 34-2Tr・SD4009 出土遺物 1

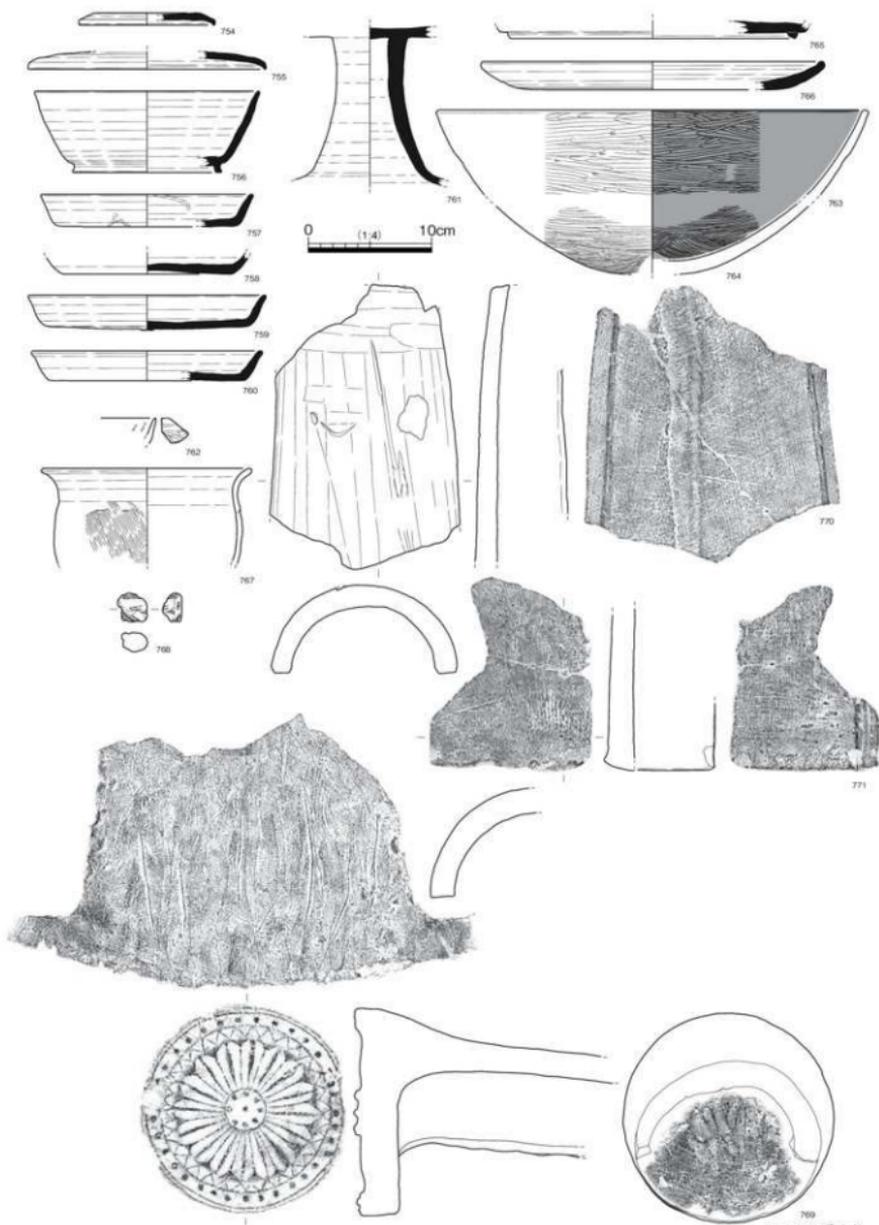
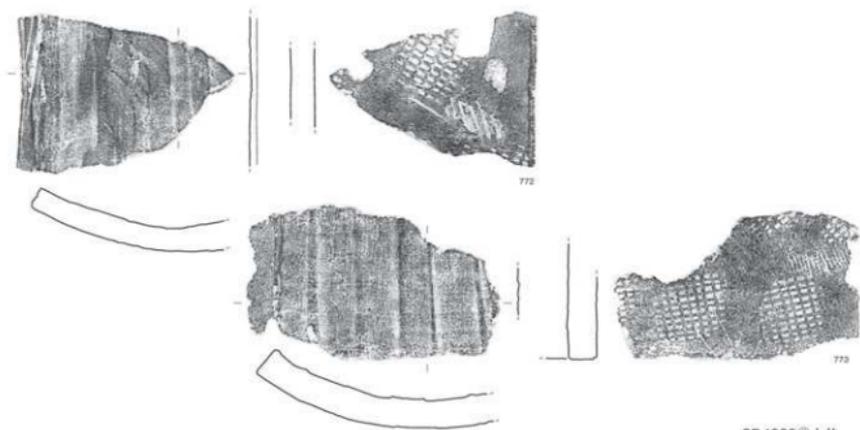
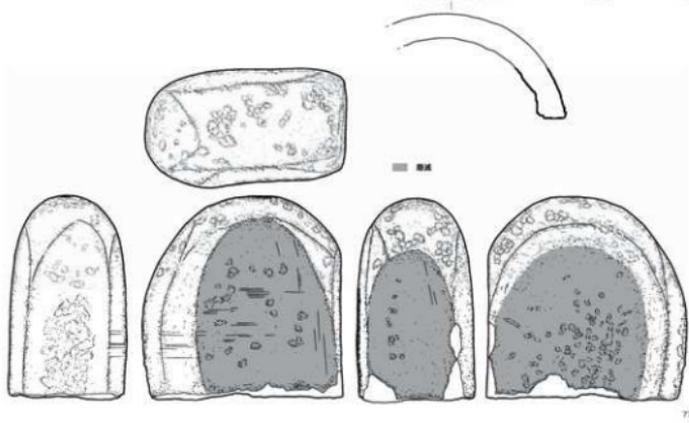
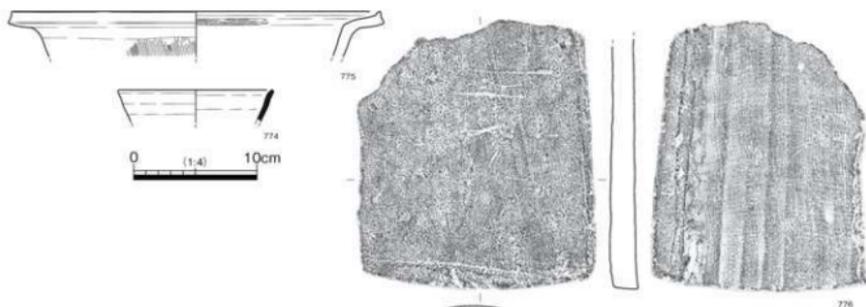


図 325 34-2Tr・SD4009 出土遺物 2

SD4009②上位

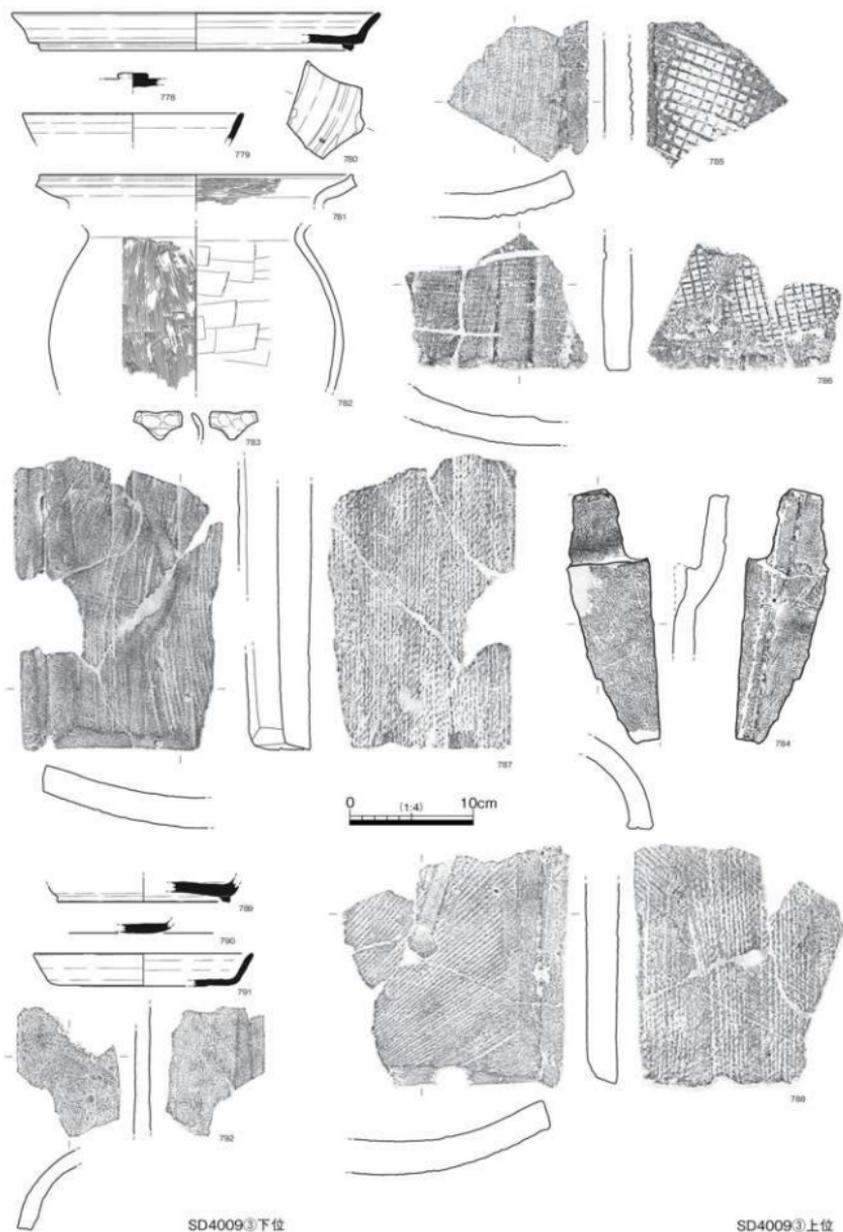


SD4009②上位



SD4009②下位

図 326 34-2Tr・SD4009 出土遺物 3



SD4009③下位

SD4009③上位

図 327 34-2Tr・SD4009 出土遺物 4

出である点も含め、先の想定とは異なる途切れ要因を考える必要がある。溝幅は①～③ともに0.6～0.8m前後を測るが、30-1トレンチでは1mを超える規模となり、遺構面が東に向けて傾斜する点(旧地形の傾斜のみならず、後世の削平も想定可)、本調査区における遺構検出の難航に起因した遺構面の掘り下げの影響を考慮すると、元来の溝幅1m前後であったと推測できる。SD4009①の溝底は西に向けて傾斜し(東西両端で0.15m程度の比高差)、SD4009②・③もわずかに西へ傾斜する。土は下位に機能時の堆積層である黄色系シルトないし粘質土、上位に焼土・炭化物や基盤層ブロックを含む黒褐色粘質土が堆積し、30-1トレンチでは大型焼土塊も含まれる。遺物は上位層に偏在し、28ℓコンテナ5箱に及ぶ(SD4009①:1箱、SD4009②:2箱、SD4009③:2箱)。

出土遺物は須恵器、土師器、黒色土器に加え、一定量の瓦を認める組成となり、焼土や白色凝灰岩、鉄釘も出土した。土器は貯蔵具も一定量認めるが、供膳具が多い傾向にある。734～753はSD4009①出土遺物である。須恵器環・蓋はやや古相の様相を示す。740は土師器小皿とした。厚手。底部外面は丁寧な手持ちヘラケズリが施される。胎土は砂粒を多く含み、粗い。744は須恵器甕である。口縁部は1/4程度遺存し、SD4009①の西端部に口縁部を下に向けて水平に設置したような出土状況を示す。752は平瓦、753は戩斗瓦である。いずれも桶巻き作りで、凸面に格子叩きを認めるが、後者が散漫な叩き調整であるのに対し、前者は密に施される。749は砥石である。方柱状を呈し、各面に研磨痕を認める。750・751は鉄釘である。

754～777はSD4009②出土遺物である。出土レベルにより上位・下位に分けて取り上げたが、層位に埋没段階差はみられず、一括して報告する。須恵器蓋の端部は形骸化が著しい(754.755)。須恵器皿(757～760)は量目がまとまる。高台付皿(765)は高台径が23cmの大型品である。766は口縁部の立ち上がり弱い盥状の皿である。763・764は黒色土器(A類)鉢である。尖底気味の底部から口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く取め、内外面ともに入念なヘラミガキを施す。器壁は厚く、胎土も粗い。当地域では極めて異質な存在である。768は焼土である。769は十六葉細素弁蓮華文軒丸瓦である。讃岐国分尼寺SKB101の同范瓦で、2種ある范のうち(高松市教育委員会2017)、范傷aによる。胎土は精良で、焼成は堅緻で褐灰色の色調を呈する。丸瓦部は玉縁式と思われるが、遺存しない。瓦当面との接合部分は上下に粘土を充填し、内面には接合時のナデ調整を認める。回面には布目痕、凸面には縦方向の丁寧なナデ調整を施す。同文瓦が山下庵寺や始覚寺、下り松庵寺でみられる(高松市歴史資料館1996)。従前、讃岐国分二寺と同范瓦は出土するが、本型式はこれまで知られていない。瓦当部は完存し、遺存状況も良好であり、本施設の屋根瓦として用いられたと考えられるが、出土数は限られ、異なる要因を想定する必要がある。丸瓦は行基式を認めるが(770)、771は玉縁式の可能性が高い。凸面調整は丁寧なナデ調整が施されるが、771には網目痕がわずかに残る。平瓦はいずれも桶巻き作りで、凸面に散漫な格子叩きとそれに先行する平行叩きを認める。772は赤褐色の色調を呈し、凸面の一部が発砲したように剥落するが、焼成時のものか、火災等によるものかは判断できない。777は台石とした。ほぼ全面に散漫ながらあばた状の敲打痕があり、上下面と側縁に顕著な磨滅面や線状痕を認める。

778～792はSD4009③の出土遺物である。出土位置により、上位と下位で取り上げたが、層位による出土差異を反映するものではなく、一括して報告する。778はボタン状に形骸化した摘みを有する須恵器蓋である。須恵器皿は無高台・高台があり、780は口径30cmの大型品である。極めて精良な胎土の優品で、焼成も堅緻である。783は製壘土器である。口縁部が強く内湾し、内外面ともに顕著な指オサエを認める。備讃VIII式。784は玉縁式丸瓦で、凸面にナデ調整に先行する細叩き痕跡を認める。平瓦は格子叩きと直線的な調叩きがあり、後者の内外面には糸切り痕跡が遺存する。

以上、SD4009①～③は遺物組成に差異は認めず、前述したSD2132とも酷似しており、同時期に機能した溝と判断できる。出土遺物の年代観はおおむね8世紀後葉から9世紀前葉となり、端部がボタン化した須恵器蓋(778)、端部の矮小化した須恵器蓋(755)は9世紀中葉まで下る可能性が高く、埋没は9世紀中葉まで下ると考えておきたい。本調査区のSD4009①～③の瓦の出土量は破片数46点(丸瓦13点(33%)、平瓦31点(67%))、総重量15,218g(丸瓦2,650g(27%)、平瓦7,273g(73%))を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと調叩きの比率は破片数では64%:36%、重量比では73%:27%となる。

SA2002はSD2132・SD4009間のほぼ中央線の榎である。後出する柱穴により、掘方の大部分は失われ、掘方北辺部を中心に検出した。掘方は主軸に沿った隅丸方形を呈し、東西幅0.6～1mとばらつきを認める。本調査区では検出

に留めたため柱底位置は不明だが、掘方中央間の距離はおおむね2 m前後の間隔となるが、1箇所のみ4 m幅と広くなる。複数回に及ぶ慎重な検出を試みたが確認できず、元来存在しなかったと結論付けた。対応するように、SD4009 ①・②間にも大きな途切れもあり、簡易な出入り口が設けられた可能性を想定しておきたい。30-1 トレンチでは直径約28 cmの柱痕が確認されている。本調査区の出土遺物はないが、30-1 トレンチの出土遺物(8-210～225)も両側溝とほぼ同じ様相を示す。

SD2132とSD4009は平行し、その内側中央線に沿って柵が並ぶことから、本遺構群は掘立柱塼構造の遮蔽施設と両側側溝と評価できる。柱は約28 cmと太く、両溝から一定量の瓦が出土することから、本施設は瓦葺屋根であったと考えられる。開削時期は8世紀前葉から中葉の帰属を想定したSB2030やSD2025に先行する重複関係から、8世紀後葉頃に開削され、9世紀中葉に埋没したと考えられる。帰属時期から、図293に黒色で示した建物群(SB2031・SB2032)と同時に機能した施設と考えられる。地形的には北西側の低地帯と微高地の境に設けられ、東側は旧地形や後世の削平により消失するが、南側に展開する建物群の北側を画する施設と評価できる。開法寺地区との境に南北方向の同構造の施設があり(33-2Tr・SA2006とSD2115・SD2107)、少なくとも北辺と西辺を掘立柱塼構造の遮蔽施設で画した状況が推測できる。また、側溝埋土は短期間に一気に埋め戻された埋土で、焼土粒や炭化物を包含し、一部の遺物には被熱痕跡の可能性があることから、魔絶の要因に火災等が想定できるかもしれないが、同時期に属するSB2031・SB2032には火災の痕跡を認めない。

SK4002 (図328)

調査区北西部で検出した大型土坑である。第32次調査32-4Tr・SK4002として調査しており、詳細は第32次調査報告に委ね、ここでは本調査で確認した追加所見と壁面が崩落した際に出土した遺物の報告に留める。過年度調査では径1.7 m前後の不正円形の掘方と捉えられていたが、基盤層に酷似した埋土が掘方の周縁に0.3 m前後の幅で認め、掘方規模が広がることが判明した(径2.3 m前後)。平面形は略円形となる。下位調査は行っていないが、外縁で検出した埋土は井戸の埋め戻し土の可能性が高く、本遺構は魔絶した井戸を転用したものと考えられる。798～800は調査中にトレンチ壁面が崩落した際に出土した遺物である。798は須臾器蓋を転用した甎である。内面には顕著な磨滅を認める。800は桶形鍛冶滓である。底面は緩やかな曲面で、土や砂粒が薄く付着・硬化する(炬床土)。厚みは1.5 cmほどであるが、内底部には鉄塊を包含する硬化・錆化した土が厚く付着する。科学的分析では(第6章第4節)、鉄酸化物と粘土溶融物からなり、砂鉄起源の脈石成分は低値であることから、鉄素材を熟間加工した際に生じた鍛錬鍛冶滓と判断される。滓中の鉄塊は小形ながらもまとまった金属鉄部で、熟間加工の痕跡はなく、ごく初期段階で滓中に取り残された可能性が高いとされる。

出土遺物の年代観は第32次調査時と同様であり、遺構の帰属時期は8世紀前葉から中葉となる。

SB2036の周辺に所在する大型魔絶土坑群 (図300)

10世紀前葉の建立、10世紀中葉の建て替え(礎石化)が想定できるSB2036の東側周縁に展開する土坑群である。SK2001のみSB2036の直前に属するSB2034の柱穴に後出する重複関係を示すが、それ以外は建物との重複関係はない。埋土には焼土・炭化物を多く包含し(大型焼土塊も含む)、多量の土器や瓦を含み、層位は細分できるが、流入土的な埋積土はみられず、短期間に一気に埋め戻した可能性が高い。重複関係やSB2036との位置関係、SB2035・SB2036の礎石建物への建て替え時の埋土に焼土・炭化物を多く含むことから、10世紀中葉頃の火災によりSB2035・SB2036の掘立柱建物が焼失し、その片付けに伴い周縁に開削された魔絶土坑と考えられる。同様の遺構は、32・33-1Tr・SB2012の東脇に開削された32-1Tr・SK1003や33-2Tr・SB2024の北東に開削された33-2Tr・SK2001や33-2Tr・SK2002があり、出土遺物の年代観や建物の礎石化に伴う埋土に焼土・炭化物を多く包含する等酷似した状況を示すことから、これらの土坑も本調査区で確認した10世紀中葉の火災に伴う大型の魔絶土坑と考えられる。火災の範囲は少なくとも80 m四方に達し、開法寺東方地区の微高地のほぼ全面に及ぶ大規模なものであったと推測できる。さらに、大規模な火災を被りながらも、早期に前代と同一地点に同規模・同規格の建物を早期に再建しており、施設の重要性が看取できる(註12)。

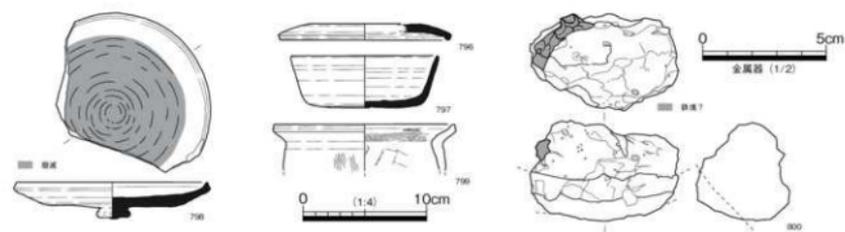
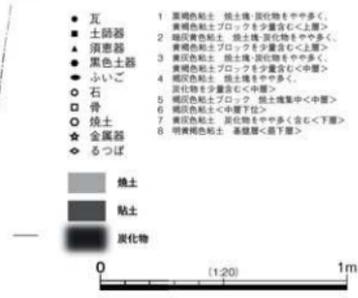
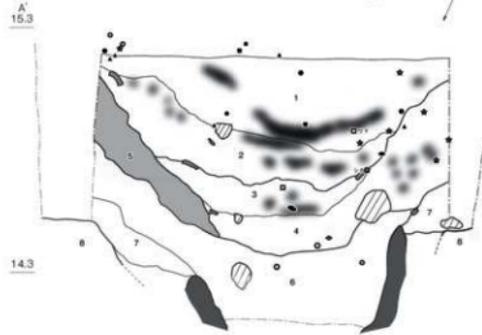
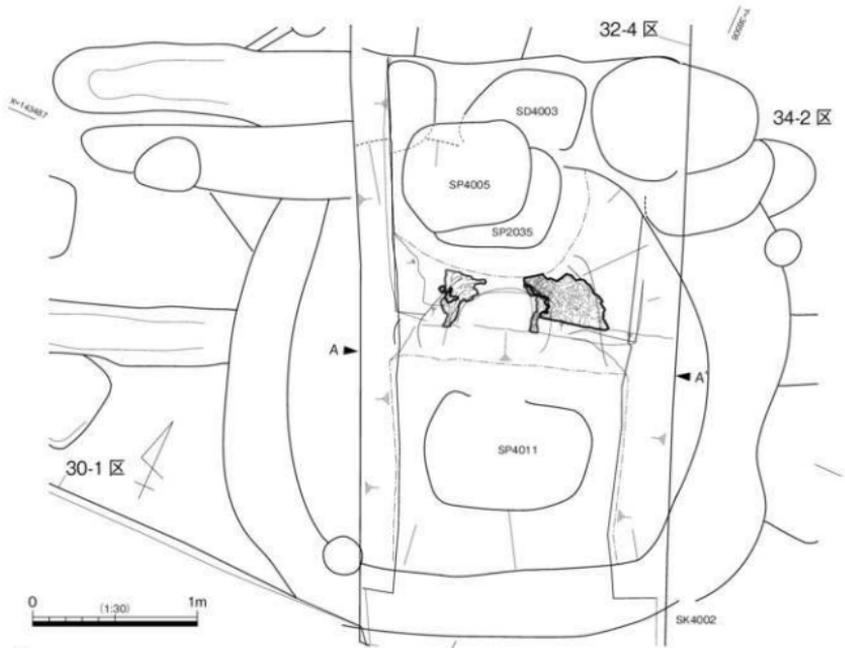
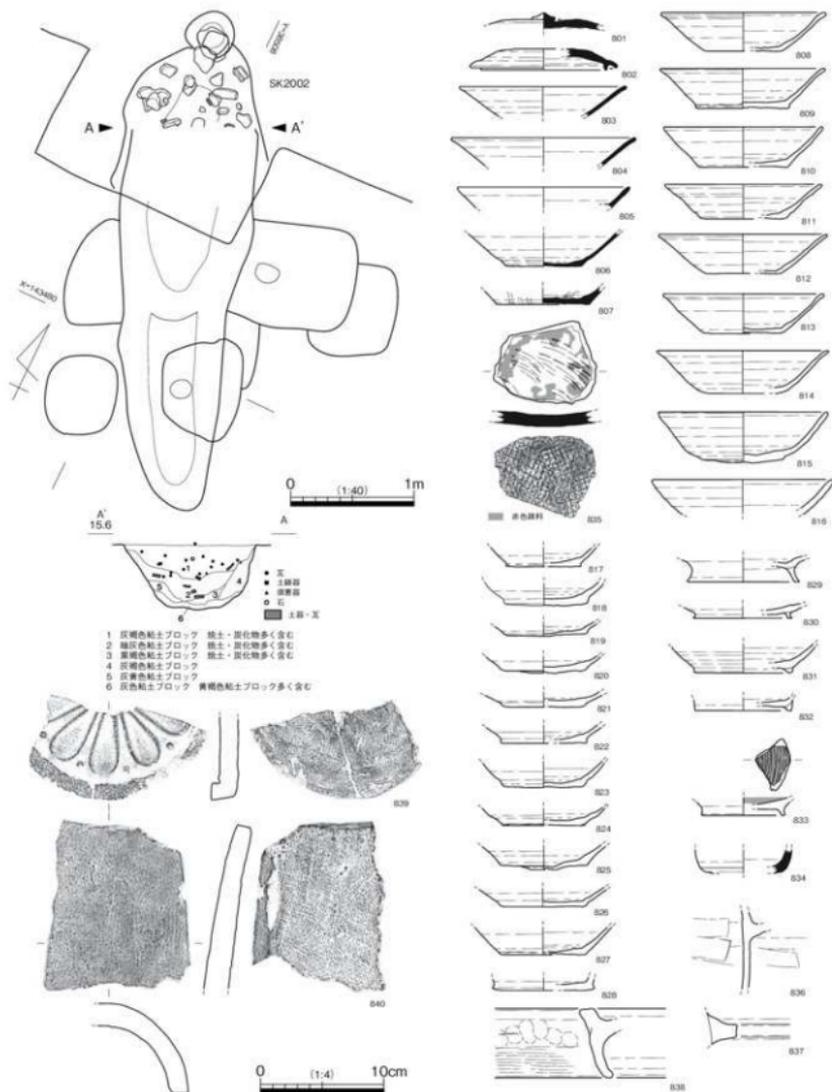


図 328 34-2Tr・SK4002 平面断面図及び出土遺物

SK2002 (図 300.329 ~ 330)

調査区中央部東寄りで見出した大型土坑である。第30次調査30-1トレンチで北端部を検出し(30-1Tr・SD1042)、本次調査で全体像を把握した。主軸方位は周辺地割に合致した南北主軸となり、SB2035・SB2036の間隙に位置し、30-1トレンチで見出した同性格のSD1001に主軸方位を揃える。長楕円形の平面形を呈し、長軸長約3.8m、最大幅約1.1



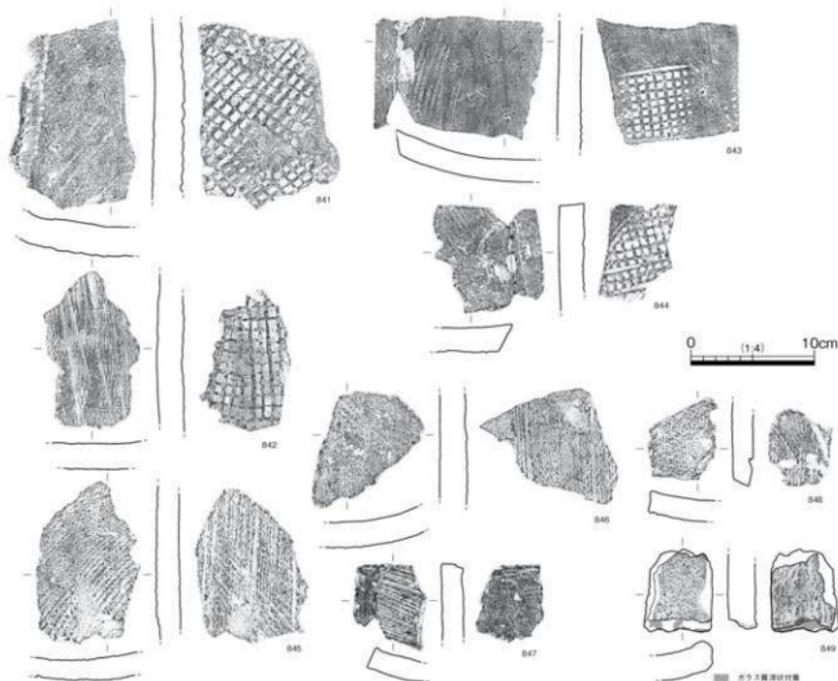


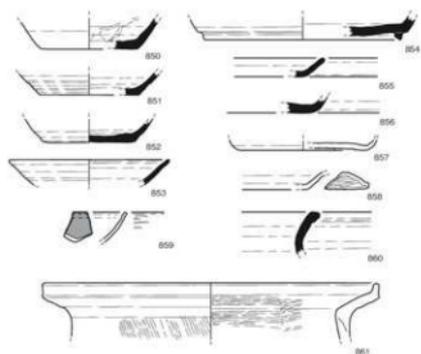
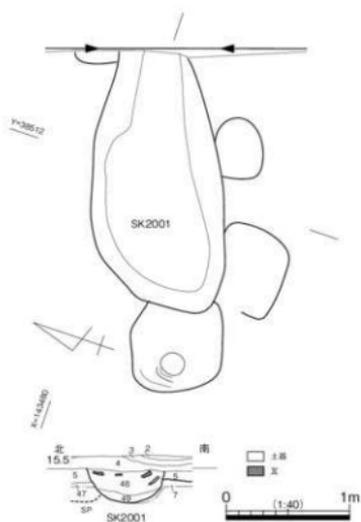
図 330 34-2Tr・SK2002 出土遺物 2

m、深度0.5 mを測る。断面形状は逆台形を呈する。複数の層位に細分できるが、多くの層位に焼土・炭化物を多く含み、遺物の出土位置の偏在も認められず、開削直後の埋め戻しが想定できる。

出土遺物は28ℓコンテナで2箱出土した。801～849は本次調査のSK2002出土遺物、8-343～349は30-1Tr・SD1042出土遺物となる。遺物組成は、多量の瓦のほか、須恵器、土師器、黒色土器等があり、供膳具が多いという特徴がある。須恵器片(803～807)を大幅に上回る量の土師器片(808～828)が出土し、同形態の片が数多く認め、遺構の性格を反映する。台付環状の環(829)や高台径が大きい土師器椀(830～832)、黒色土器(A類)椀(833)も少量加わる。煮沸具として土師器羽釜を認め(836)、移動式カマド(838)も共存する。839は軒丸瓦である。開法寺跡出土の最古の軒丸瓦とされるKH101型式である。第32次調査32-3Tr・SK3001出土の10-271と接合関係を有する。同遺構は本調査区SX2182と同一遺構と考えられる同性格の土坑となる(直線距離で約11m)。本次調査で出土した瓦の出土量は破片数88点(丸瓦18点(20%)、平瓦70点(80%))、総重量7,270g(丸瓦1362g(19%)、平瓦5,908g(81%))を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では34%:66%、重量比では50%:50%となる。849は破断面にガラス質滓が付着しており、鍛冶関連遺物になる可能性を残す。以上SK2002の出土遺物の年代観は10世紀中葉(佐藤編年IV期中相～新相)に位置付けられる。

SK2001 (図 300.331.332)

調査区中央部東寄りで検出した大型土坑である。主軸方位は周辺地割に合致した南北主軸となり、SB2036の北西隅に位置する。北側にはSD1001、南側にはSK2065が重複関係なく展開する。長楕円形の平面形を呈し、検出最大長約2.1



- 2 <床土>
 3 田積作土 2.5V7/1 灰白色粘質土 砂粒多い 中世前期
 4 <包含層 2層> 10V94/1 黄褐色粘質土
 5 <包含層 3層> 10V93/1 黄褐色粘質土 土層化した田積作土 古代の遺構はこの上層から開始
 7 10V97/6 中世前期粘質土 <織文包含層>
 47 10V93/2 黄褐色粘質土 黄褐色粘土ブロックまばらに多く含む<SPF>
 48 7.5V93/1 黄褐色粘質土 熟土 灰化物を一定量含む<SK2001>
 49 2.5V4/1 黄灰色粘質シルト 黄褐色粘土ブロックまばらに多量に含む<SK2001>

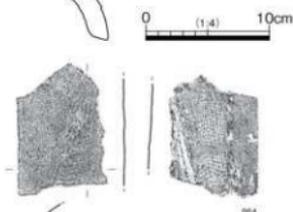
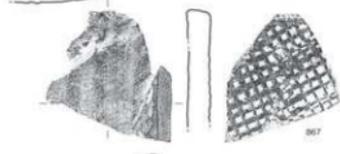
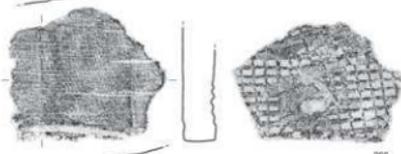
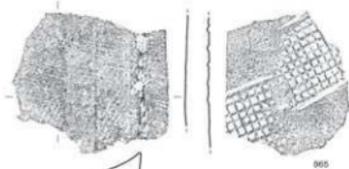
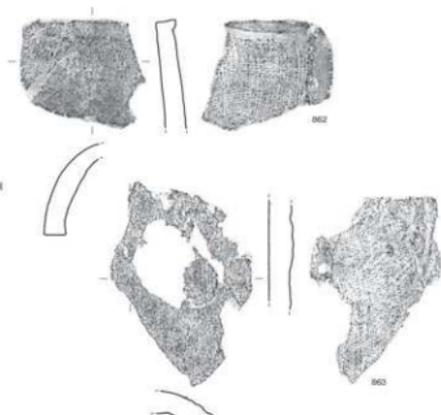


図 331 34-2Tr・SK2001 平面図及び出土遺物 1

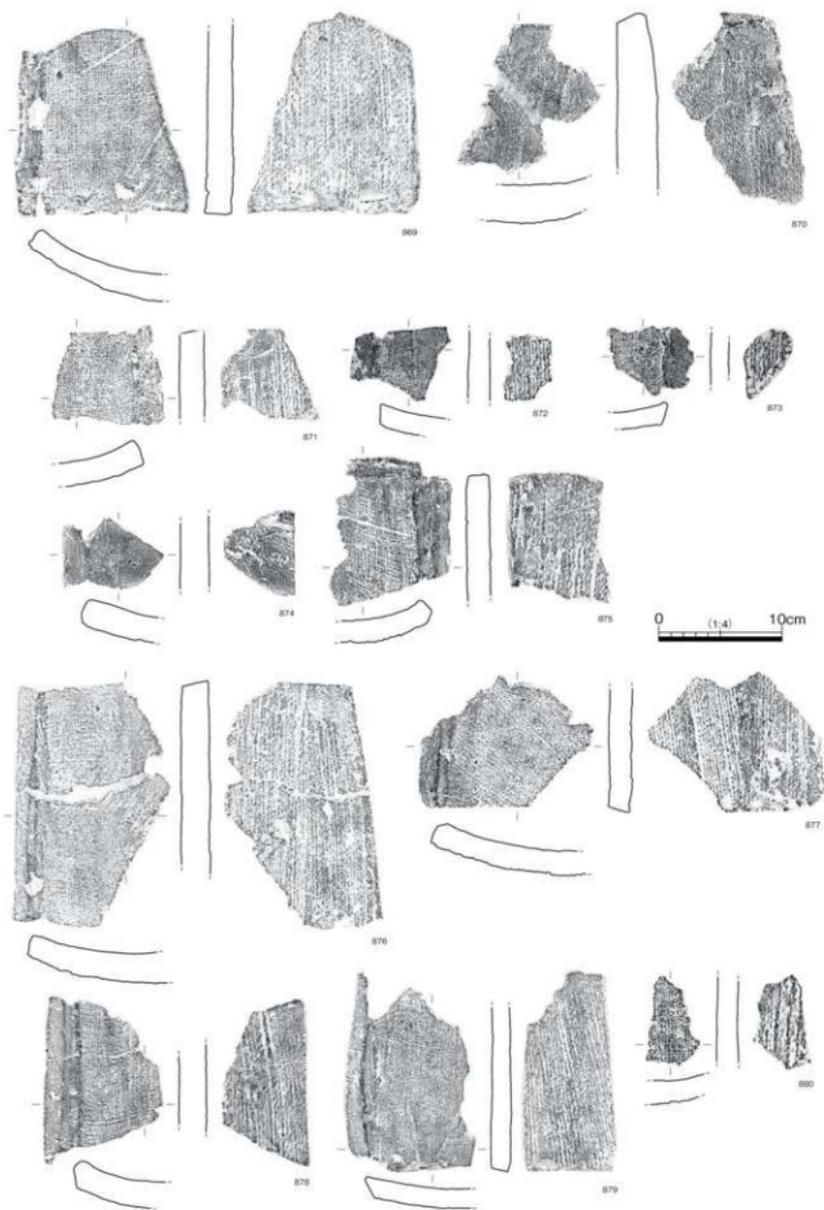


図 332 34-2Tr・SK2001 出土遺物 2

m、最大幅約1m、深度0.2mを測る。断面形状は半球形を呈する。黒褐色粘質土埋土には焼土・炭化物を少量包含する。遺物は埋土上位にやや偏るが、顕著なものではなく、他の土坑と同じく開削直後の埋め戻しが想定できる。

出土遺物は28㊦コンテナで2箱出土した。850～880はSK2001出土遺物である。遺物組成は、多量の瓦のほか、須恵器、土師器、黒色土器等があり、供膳具が多く、わずかに煮沸具を認める。前述したSK2002やSK2128に比してやや須恵器供膳具の比率が高い傾向にある。瓦の出土量は多く、破片数107点(丸瓦28点(26%)、平瓦79点(73%))、総重量12,777g(丸瓦2,641g(21%)、平瓦10,136g(79%))を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では14%：86%、重量比では23%：77%となる。縄叩きは直線的な縄叩き目が主体を占めるが、間隙が多い斜位の叩き目を少量認める。縄叩きは1枚作りと考えられるが、側縁調整がなされていない875の側縁には布目痕を認める。以上SK2001の出土遺物の年代観は10世紀中葉(佐藤編年IV期中相～新相)に位置付けられる。

SK2065 (図 300.333～335)

調査区南東隅で検出した大型土坑である。西半の検出に留まり、東半は調査区外に延びる。東西長1.5m、南北長1.9mを測るが、東に2mほど伸びた東西主軸の平面形と推測できる。SK2001の南、SB2036に近接した箇所に位置するが重複関係は認められない。断面形状は逆台形を呈し、深度0.5mを測る。焼土・炭化物を多く含む黒褐色粘質土を基調とし、遺物の出土位置に偏在はみられない。

出土遺物は28㊦コンテナ3箱出土した。881～926はSK2065出土遺物である。遺物組成は、多量の瓦のほか、須恵器、土師器、黒色土器のほか、焼土塊も認める。土器はほぼ供膳具で構成され、土師器：須恵器＝3：2の比率程度で出土する。須恵器は坏が主体を占め、わずかに皿を認める。土師器は坏・椀・皿があり、同形態を複数個体認め、

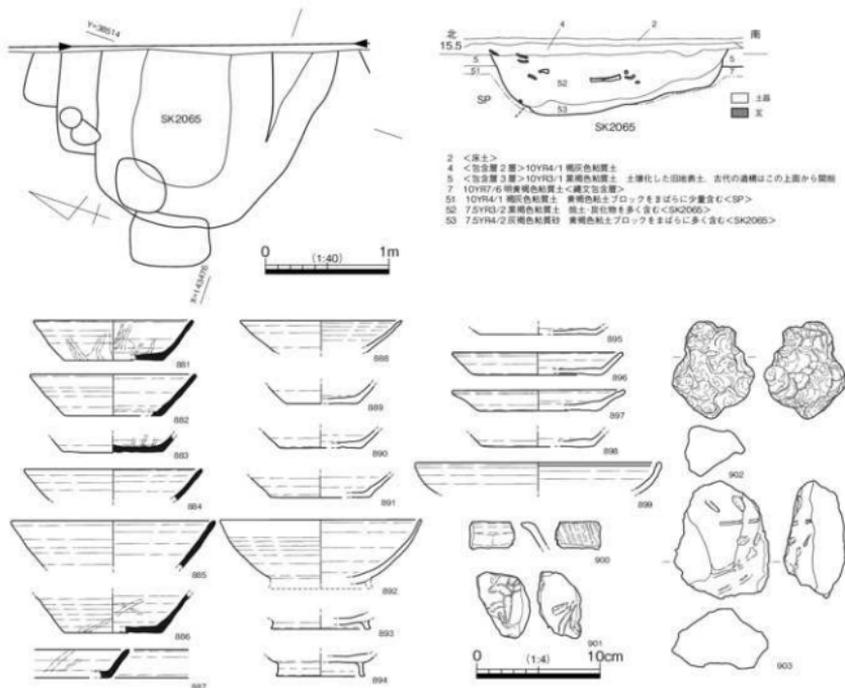


図 333 34-2Tr・SK2065 断面図及び出土遺物 1

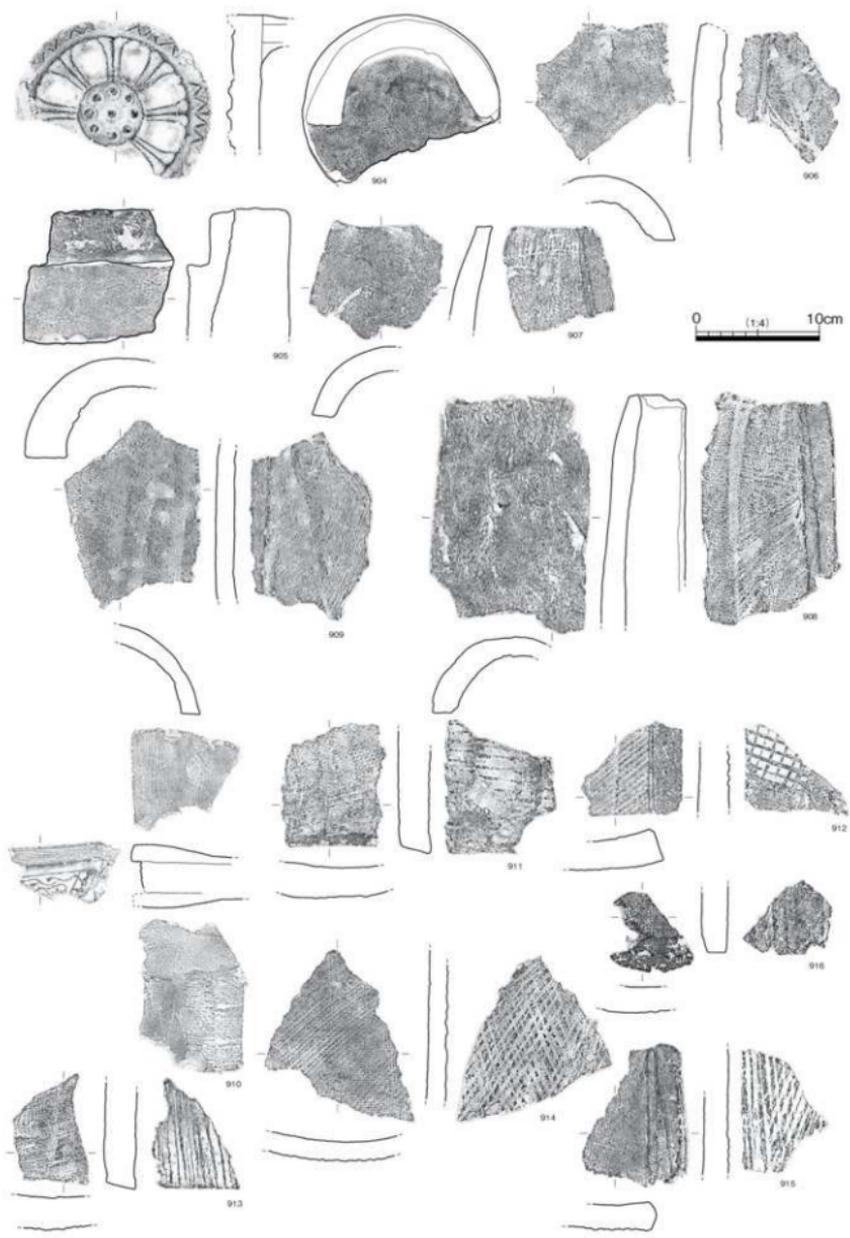


图 334 34-2Tr · SK2065 出土遺物 2

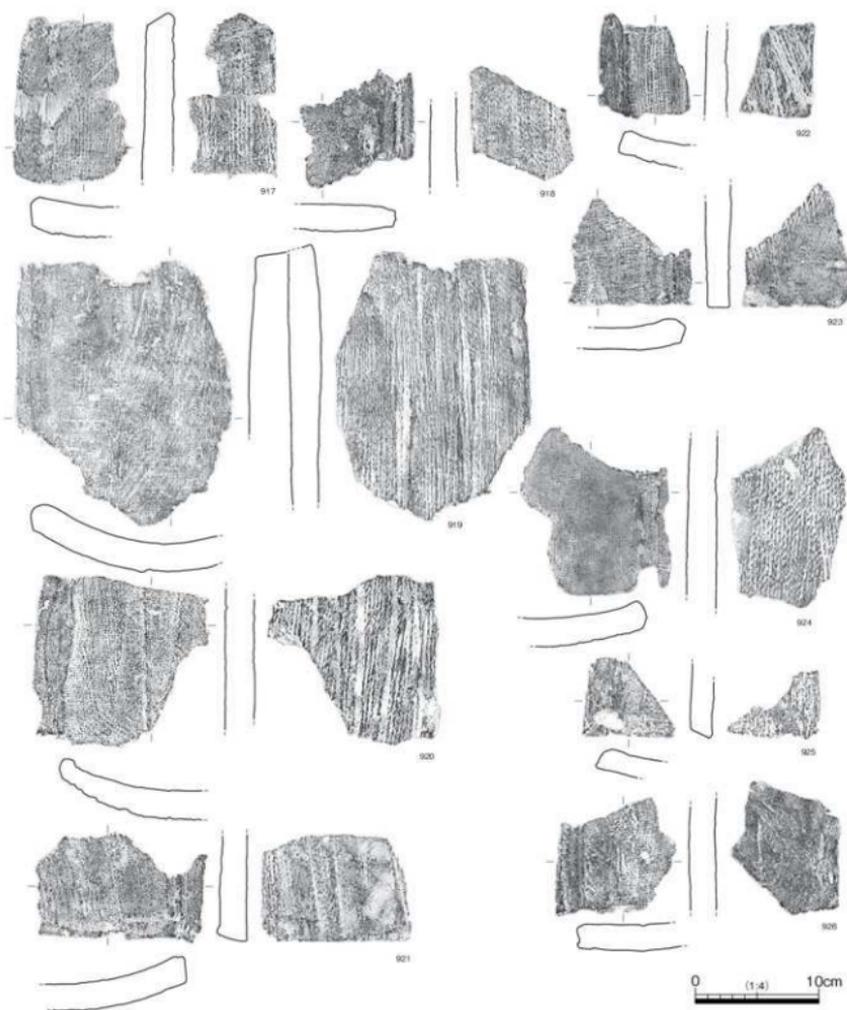


図 335 34-2Tr・SK2065 出土遺物 3

遺構の性格を暗示する。土師器碗 (892～894) は高台径が大きく、高台もシャープで高い。901～903 は焼土塊で、903 は拳大程度の大きさとなる。スサ痕を多く認め、火災で焼失した建物 (近接する SB2036) の壁土の可能性が想定できる。瓦の出土量は多く、丸・平瓦のほか、軒瓦も認める。904 は軒丸瓦である。開法寺跡出土の KH106 型式であるが、第 7 章第 2 節で検討するように、KH106 型式は 2 種の范があり、本資料は KH106A 型式となる。丸瓦は行基式 3 点、玉縁式 1 点を図化した。910 は軒平瓦である。開法寺跡の KH205 型式である。高く突出した周縁の内側に変形唐草文を配し、平瓦部凸面には直線的な縄目きを認める。平瓦は叩き目にバリエーションを認め、わずかに格子叩き

は1点を図化したに留まり、矢羽状ないし斜位の平行叩き目(913～916)、縄目叩き(917～925)が主体を占める。平行叩きは平滑な凹面から一枚作りの可能性が高い。913は平行叩きの一部の凹面に細線がみられ、格子風になるが、すべての凹面に認めるものではない。縄叩き調整の平瓦はすべて一枚作りと考えられ、側縁調整がなされていない925・926の側縁には布目痕を認める。縄叩きは直線的な縄叩き目が多いが、間隙が多い斜位の叩き目も一定量みられる。瓦の出土量は破片数142点(丸瓦45点(32%)、平瓦97点(68%))、総重量20,865g(丸瓦6,500g(31%)、平瓦14,365g(69%))を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では13%:87%、重量比では23%:77%となる。以上、SK2065の出土遺物の年代観は10世紀中葉(佐藤編年IV期中相～新相)に位置付けられる。

SX2128(図300.336)

調査区南東隅で検出した大型土坑である。当該調査区で西半、32-3トレンチで東半を検出した(32-3Tr・SK3001)。SB2936の南東隅に近接した箇所位置する。本次調査では東西長約2.4m、南北幅2.0mを測り、32-3Tr・SK3001を含めると、主軸方位である東西長は4.4mに達する。断面形状は逆台形を呈し、深度約0.4mを測る。焼土・炭化物を多く含む黒褐色粘質土を基調とし、遺物の出土状況に偏在はみられない。

本次調査の出土遺物は28@コンテナで2箱を数える。927～953はSX2128出土遺物である。遺物組成は、瓦のほか、須恵器、土師器、黒色土器、鉄製品を認める。土器では供膳具が高い比率を占める。土師器碗は同形態が多いが、931は佐藤編年IV期新相からみられる坏CⅠ、936は坏AⅡと考えられる。土師器碗(938～941)は高く、シャープな高台形状を呈し、高台径も小さく、土師質土器小皿(930)とともに、埋没後に開削された柱穴を見落とした可能性が高い(混入遺物)。黒色土器(A類)碗(942～944)は胎土がやや粗く、在地系の黒色土器と考えられる(第7章第2節参照)。945は広口壺の底底部片で、左上がりの平行叩きをかすかに認める。煮沸具では土師器羽釜(946)と移動式カマド(947)をセットで認める。948は在地の八栗産白色凝灰岩を用いた石造物破片である。平安時代前期に属する層塔の可能性が高い(第7章第2節参照)。950・951は軒丸瓦である。いずれも開法寺跡の同范瓦で、前者はKH105型式、後者はKH106B型式となる。平瓦は2点を図化した。いずれも側縁に布目痕を認め、凸面は叩き目間に隙間を認める斜位の縄叩きとなる。瓦の出土量は破片数209点(丸瓦51点(24%)、平瓦158点(76%))、総重量15,431g(丸瓦4,256g(28%)、平瓦11,175g(72%))を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では24%:76%、重量比では29%:71%となる。

以上、SX2128の出土遺物の年代観は10世紀中葉(佐藤編年IV期中相～新相)に位置付けられる。

④小結

本調査区では広く調査区を設定したことにより、建物全体像が把握でき、周辺の過年度調査で断片的に捉えられた時期変遷が明確化した点は大きな成果といえる。7世紀前葉から中葉の竪穴建物群と先行する直線的な道路遺構、7世紀末から8世紀初頭の正方位建物群の展開とそれに先行する正方位主軸基調建物、8世紀前葉から中葉の周辺の条里地割に合致した建物群、8世紀後葉から9世紀中葉の掘立柱塼構造の遮蔽施設の内における建物群、9世紀後葉から10世紀初頭の計画的に配置された大型建物群、10世紀前葉から11世紀前葉における前代建物群の建て替え、11世紀中葉から13世紀頃の小規模柱穴群という変遷を捉えることができた。その変遷観は第32次調査で検出した大型建物群の変遷に合致し、開法寺東方地区における遺構(建物)変遷が運動することを示唆する。なかでも、8世紀後葉から11世紀中葉の長期に渡って、ほぼ同一地点で、同主軸方位の建物群が継続的に展開し、途中で大規模な火災を受けるものの早期に復旧する等、本エリアに所在する施設の重要性が窺える。

その一方、大型建物群の北辺にある遮蔽施設は一時期の設置に留まり、大型建物群は継ぎ的に建てられるが、遮蔽施設は継続しないことになる。大型建物群の西辺(30-1トレンチ・33-2トレンチ)に同構造の遮蔽施設があるが、東辺では確認できず(削平や旧地形により消失)、南辺の状況を把握した上、遮蔽施設による圍繞の有無や継続性について検討していく必要がある。

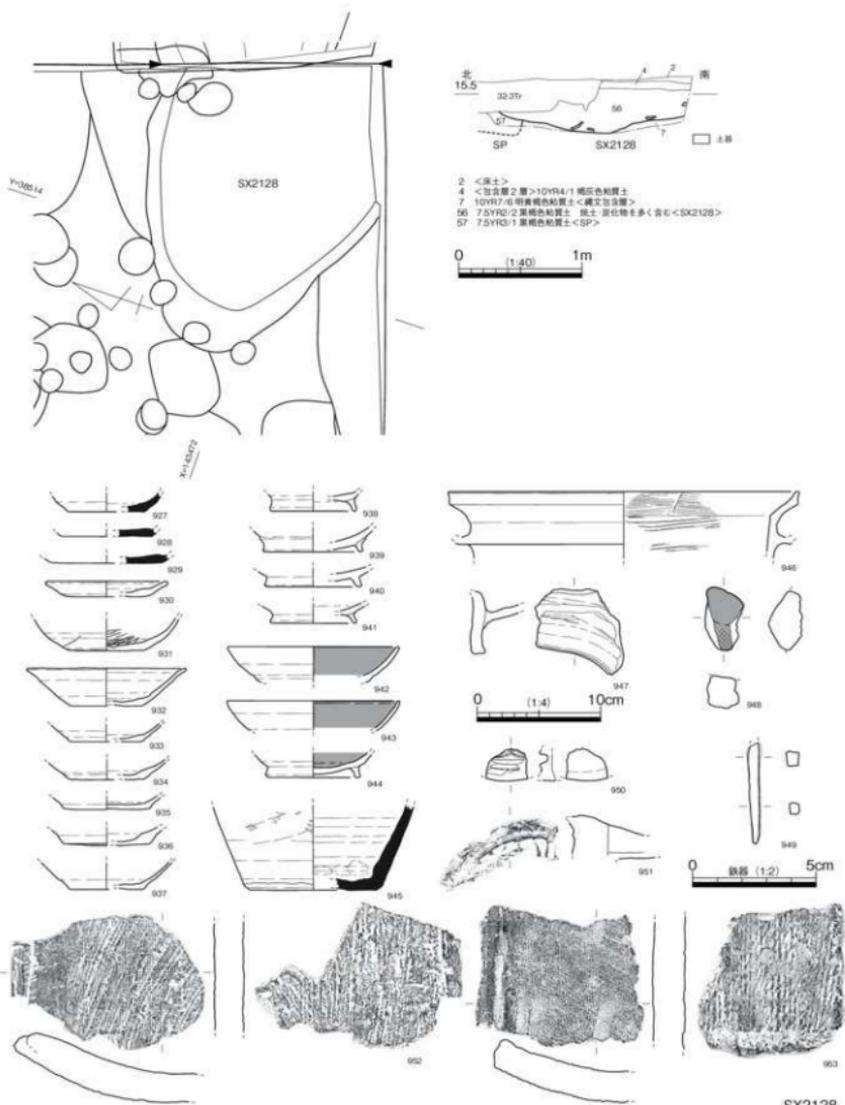


図 336 34-2Tr・SX2128 平面図及び出土遺物

(2) 34-3 トレンチ

①概要

34-3 トレンチは過年度調査(32-2・3 トレンチ)で検出した大型柱穴で構成される建物の全体把握と隣接する34-2 トレンチの建物群との関係把握を目的とし、5093番地に調査区を設定した。大規模に設定した34-2 トレンチの東側8mの箇所に、過年度調査区を含む東西約7.5m、南北約24.3mの調査区を設定し、建物の個別把握に加え、比較的広い範囲における建物配置状況の把握に努めた。遺構検出段階において、大型建物群ないし柵が北側に広がる可能性が生じたため、讃岐国府跡調査指導専門委員会の各位委員と協議の上、北に8.7m拡張した。調査の結果、過年度調査で一部の確認に留まった南北主軸の建物の西半を検出するとともに、ほぼ同一地点に次期の建物を検出し(南北主軸)、50mを超える南北主軸の大型建物が継的に建てられた状況を把握した。さらに、34-2 トレンチで検出した大型建物群との配置の関係性も明らかになった点も大きな成果であった。出土遺物では国内でも出土例の乏しい金銅製龍頭や銅鋸などが出土し、開法寺東方地区の大型建物群の性格を考える上では重要な発見となった。調査着手以前の地筆の状態は水田である。

②層序

図24・25(基本層序図)の遺構面標高図が示すように、34-3 トレンチは微高地の中央から東、中央から南に緩やかに傾斜する箇所に位置する。図338の北壁面図が示すように、基盤層(明黄褐色粘質土)は微高地中央から34-3 トレンチ中央付近まで同標高で広がり、トレンチ中央から東にやや急激に傾斜する。東端部の基盤層上面標高は東隣の水田現標高よりわずかに高く、東に所在する筆は後世の水田化に伴って大規模に削平された状況が復元できる。南北方向では調査区中央から北側は微高地中央部と同標高の基盤層が広がるが、南には緩やかに傾斜し、調査区内では中央付近と南端部の比高差は0.2mを測る。基盤層直上には図338・339で11層とした黒褐色粘質土があり、古代の土器・瓦を多く包含する。整地層の可能性もあるが、本層位を開削する古代の遺構を認め、古代段階の地表面構成土と考える。3層上位として図化した994～1000が11層出土遺物である。出土遺物には遺構帰属遺物も含まれるため、点数を絞って図化した。

調査区東壁では11層上面に7層を認め、第32次調査32-2 トレンチで12世紀代の整地層と想定した層に対応する。7層は調査区南東隅に位置するSX3001埋土上位に堆積し、SX3001は12世紀前後の土器を含むことから、当該期の造成により傾斜地の平坦化が図られた可能性が高い。調査区西壁は中世後半以降の水田層により、7層に対応する12世紀頃の整地層は確認できない。

また、本調査区では遺構検出が難航し、繰り返し遺構面の掘り下げや精査を行った結果、遺構に含まれる遺物も多く取り上げた(2mグリッド)。重要な遺物も含まれ、主要遺物を遺構面掘り下げ(962～993)、遺構面精査(956～961)として図化した。954・969は三彩陶器杯である。高台がある杯B形態。高台径は約11.5cm、口縁部径は16cm前後に復元できる。34-2 トレンチで出土した三彩陶器蓋(514)が径22cmであることから、両者はセット関係にはない。淡黄白色の精良な胎土で、外面には3種の軸葉が掛け分けられ、内面は淡緑色一色となる。三彩陶器の器種として、杯Bと蓋は小壺などに比して圧倒的に事例が少なく、施設の性格を考える上では注視すべき遺物となる。形態の特徴から8世紀後半から9世紀初頭の所産と考えられる。957は京都産緑釉陶器碗である。10世紀。962は平高台の緑釉陶器皿である。洛北産。9世紀中葉。963・964は猿投窯産の灰釉陶器碗である。前者は9世紀末、後者は9世紀後半に属する。965・966は灰釉陶器碗である。猿投窯産ないし美濃産で、9世紀中葉から後半に属する。968は洛北産の緑釉陶器唾壺である。9世紀中頃。960・961・971・972は製埴土器である。971は円錐形に復元でき、器壁が極めて薄い。TK217型式期～9世紀前葉に属する。その他はやや器壁が厚く、備置Ⅷ式となる。973はミニチュアカマド(形代)である。上端部、鈎部、窓が写実的に模される。975は甕を転用した甕である。

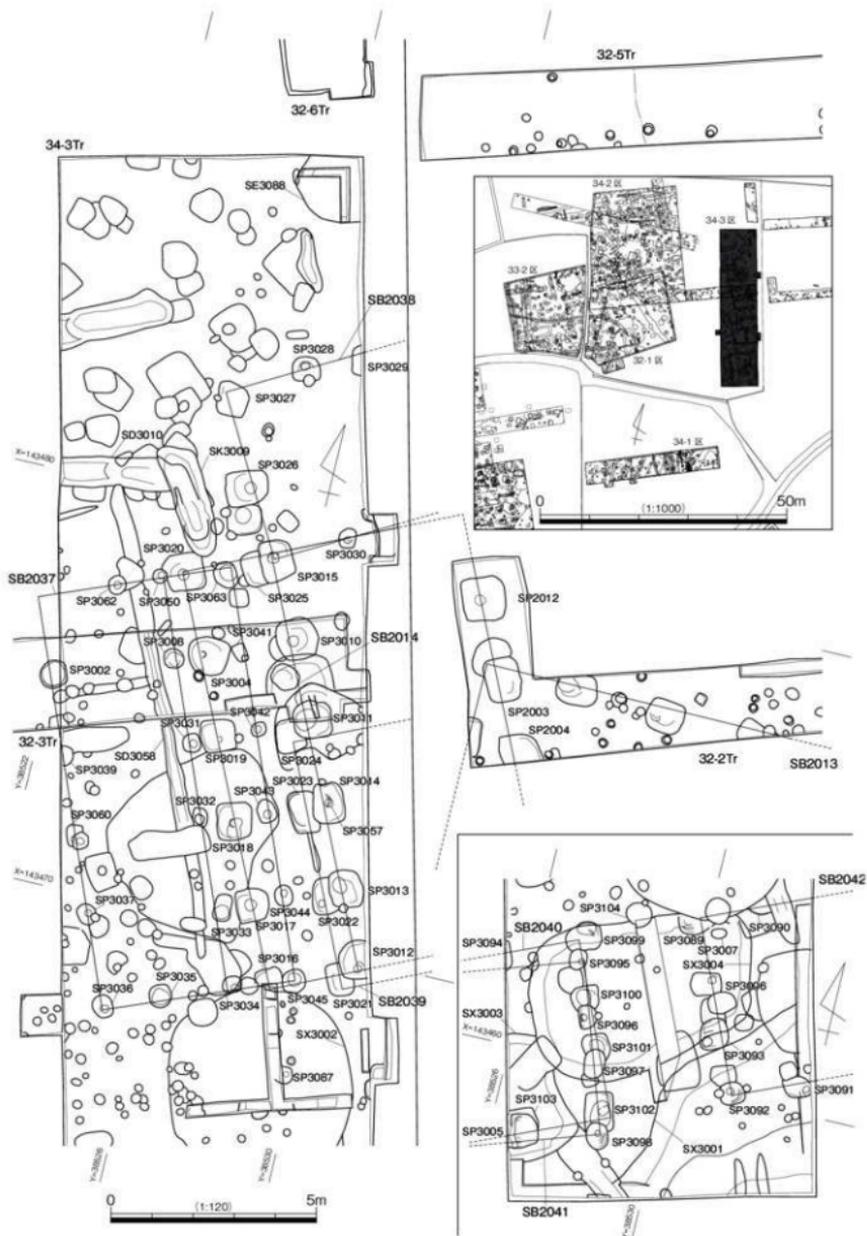
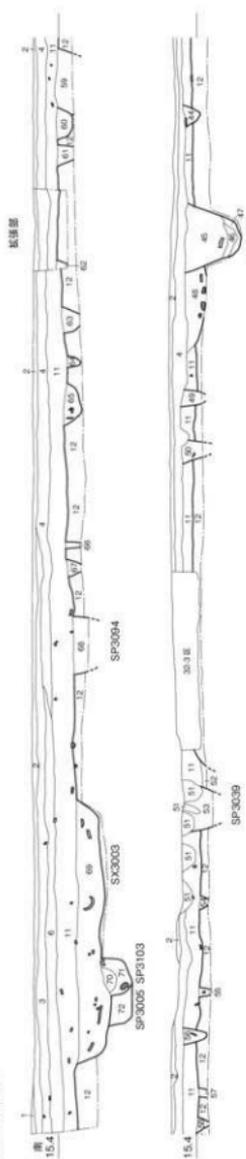
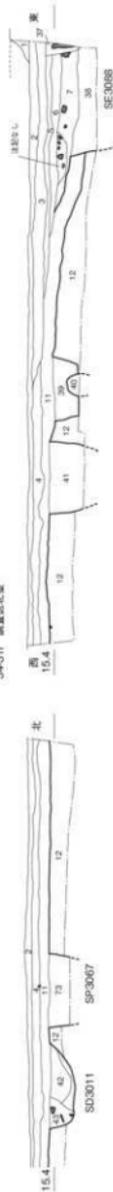


図 337 34-3Tr 遺構平面図

34-3Tr 調査区西壁



34-3Tr 調査区北壁



34-3Tr 調査区西壁

- 1 <耕作土>
- 2 <土表土> 黒色粘質土<耕作土>
- 4 10196Aにみられる赤褐色土<耕作土>
- 11 10195Jの黒色粘質土<黒褐色>
- 12 10197の赤褐色粘質土<黒褐色>
- 51 10196Aにみられる赤褐色土<耕作土>
- 52 2,593-1 黒色粘質土<SP>
- 54 10193-2 黒色粘質土<SP>

34-3Tr 調査区北壁

- 1 <耕作土>
- 2 <土表土> 赤褐色粘質土<耕作土>
- 4 10196Aにみられる赤褐色土<耕作土>
- 6 2,577-2 赤褐色粘質土<耕作土>
- 7 10195Jの黒色粘質土<黒褐色>
- 11 10193-1 黒色粘質土<SP>
- 12 10197の赤褐色粘質土<黒褐色>
- 39 10195-1 黒色粘質土<SP>
- 41 10195-2 黒色粘質土<SP>
- 47 黒土<新成物多量土><SP3006>

34-3Tr 調査区西壁

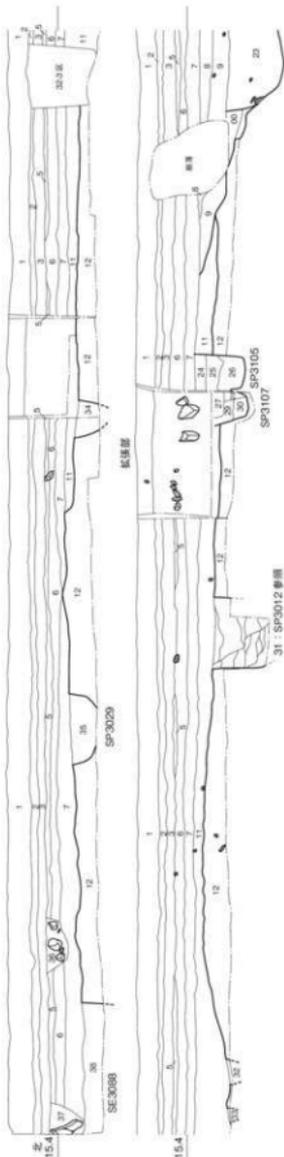
- 55 10195-1 黒色粘質土<SP>
- 56 10193-1 黒色粘質土<SP>
- 57 10193-1 黒色粘質土<SP>
- 58 10192-1 黒色粘質土<SP>
- 59 10192-1 黒色粘質土<SP>
- 60 10193-2 黒色粘質土<SP>
- 61 10193-1 黒色粘質土<SP>
- 62 10193-1 黒色粘質土<SP>
- 63 10193-1 黒色粘質土<SP>
- 64 10192-2 黒色粘質土<SP>
- 65 10192-1 黒色粘質土<SP>
- 66 10192-1 黒色粘質土<SP>
- 67 10194-1 黒色粘質土<SP>
- 68 10194-1 黒色粘質土<SP>
- 69 10193-2 黒色粘質土<SP>
- 70 2,593-2 黒色粘質土<SP>
- 71 10193-1 黒色粘質土<SP>
- 72 2,593-2 黒色粘質土<SP>
- 73 2,592-1 黒色粘質土<SP3007>

34-3Tr 調査区北壁

- 1 <耕作土>
- 2 <土表土> 赤褐色粘質土<耕作土>
- 4 10196Aにみられる赤褐色土<耕作土>
- 6 2,577-2 赤褐色粘質土<耕作土>
- 7 10195Jの黒色粘質土<黒褐色>
- 11 10193-1 黒色粘質土<SP>
- 12 10197の赤褐色粘質土<黒褐色>
- 35 10193-1 黒色粘質土<SP>
- 39 10195-1 黒色粘質土<SP>
- 41 10195-2 黒色粘質土<SP>
- 47 黒土<新成物多量土><SP3006>

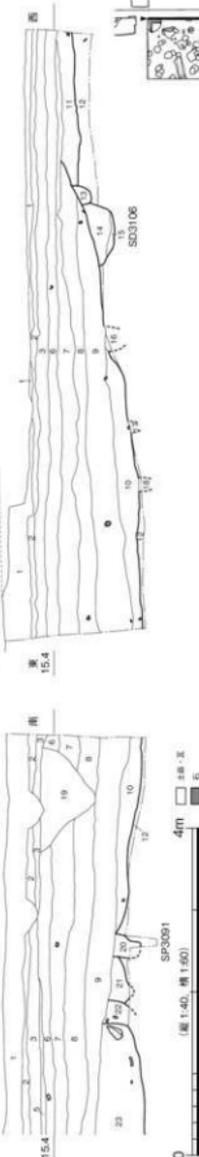
図 338 34-3Tr 西壁・北壁断面図

34-3Tr 調査区東壁



31: SP3012 参照

34-3Tr 調査区南壁



34-3Tr 調査区東壁

- 1 <埋土>
- 2 2.5V6.2 厚層砂質土 <埋土>
- 3 2.5V6.2 厚層砂質土 <埋土>
- 4 2.5V7.2 厚層砂質土 <埋土>
- 5 2.5V7.2 厚層砂質土 <埋土>
- 6 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 7 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 8 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 9 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 10 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 11 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 12 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 13 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 14 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 15 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 16 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 17 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 18 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 19 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 20 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 21 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 22 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 23 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 24 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>

34-3Tr 調査区南壁

- 1 <埋土>
- 2 2.5V6.2 厚層砂質土 <埋土>
- 3 2.5V6.2 厚層砂質土 <埋土>
- 4 2.5V7.2 厚層砂質土 <埋土>
- 5 2.5V7.2 厚層砂質土 <埋土>
- 6 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 7 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 8 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 9 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 10 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 11 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 12 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 13 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 14 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 15 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 16 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 17 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 18 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 19 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 20 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 21 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 22 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 23 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>
- 24 10V92.0 厚層砂質土 <埋土>

図 339 34-3Tr 東壁・南壁断面図

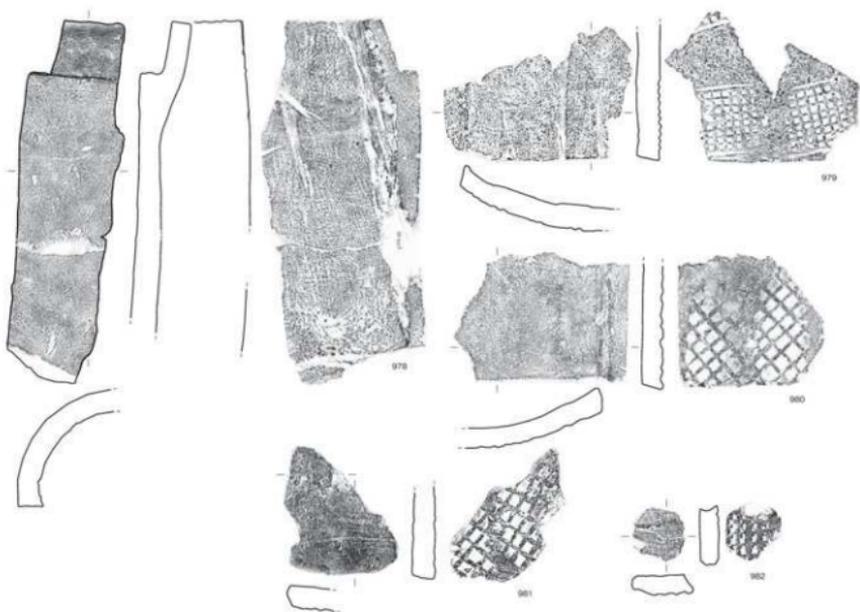
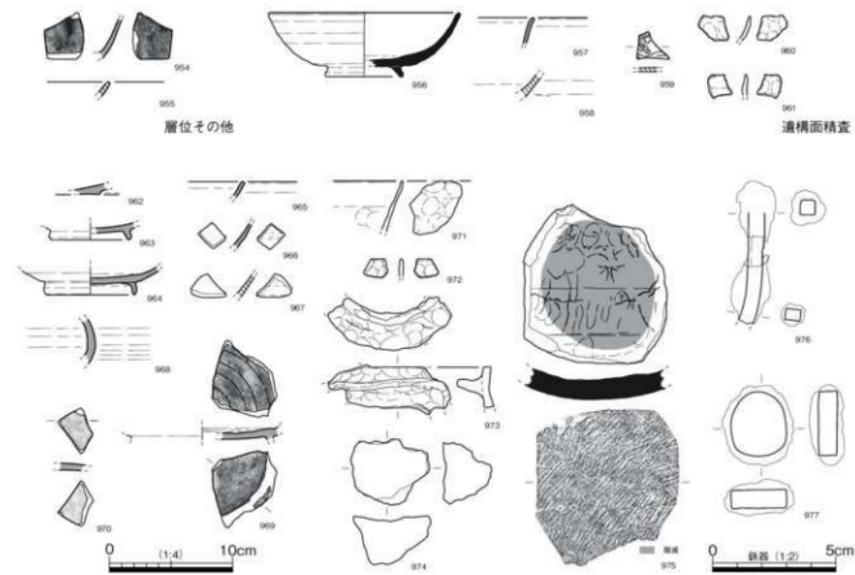
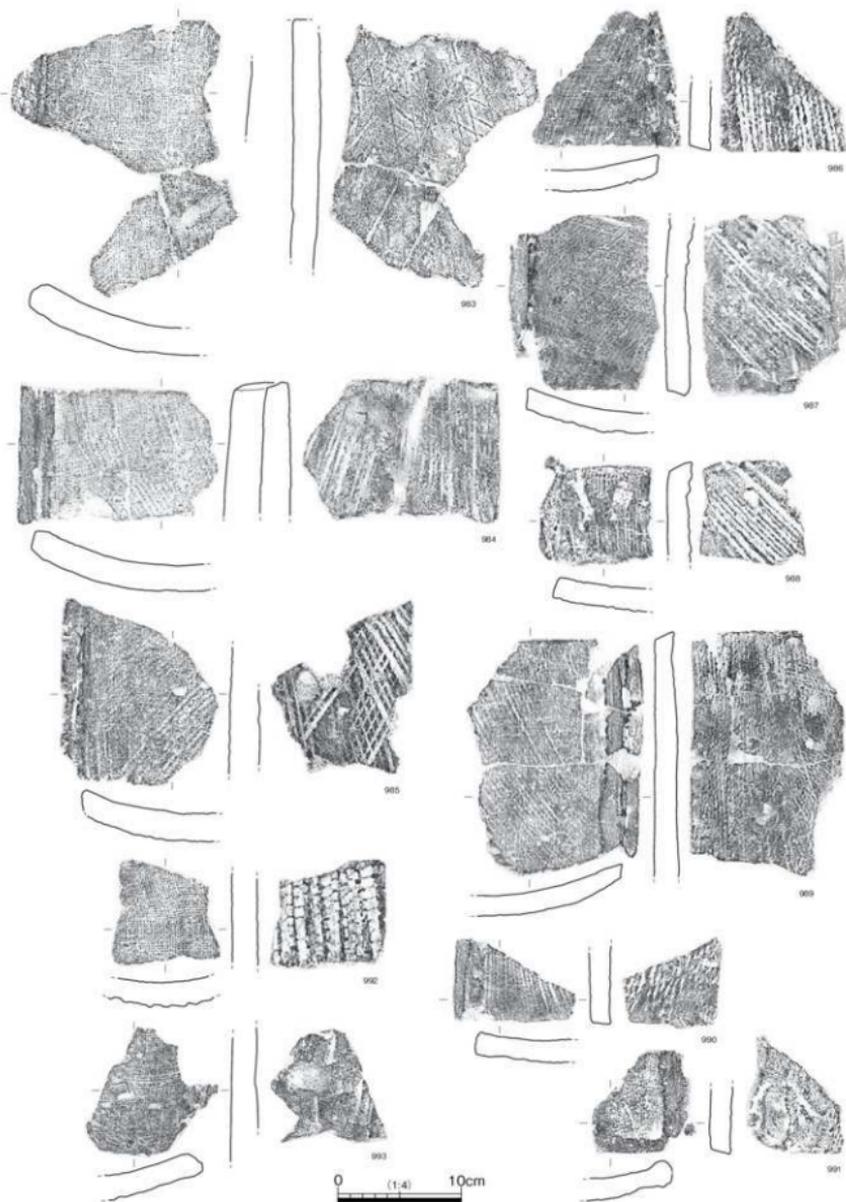


図 340 34-3Tr・包含層出土遺物 1



遺構面掘り下げ②

図 341 34-3Tr・包含層出土遺物 2

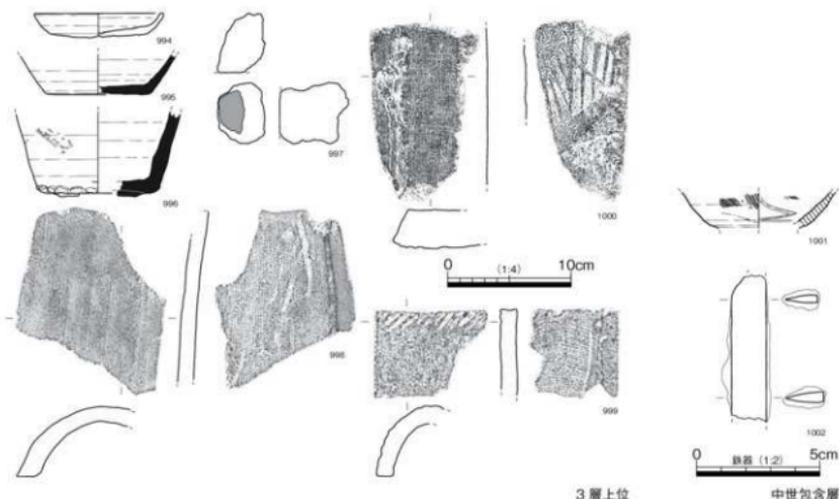


図 342 34-3Tr・包含層出土遺物 3

③検出遺構・出土遺物

SB2038 (図 343.344)

調査区北東部で検出した掘立柱建物で、東半部は調査区外へ延びる。SB2014に先行する重複関係を有する。平面プランは梁間2間(約4.2m)、桁行2間以上(約3.5m)、検出面積12.6㎡の東西主軸建物に復元できる。桁行の柱間は不揃いだが、桁行は1.8mと推測できる。主軸方位は周辺の条里地割に合致した方位を呈する(北60°東)。掘方平面形はやや歪だが、SP3026・SP3025は建物主軸やそれに直交する方向に辺を描いた隅丸方形を呈する。深度は0.2~0.5mとばらつきがあるが、西梁間が深く、掘立柱方は浅い傾向にある。SP3028・SP3026・SP3030で径20cm程度の柱痕下位のみを確認したが、抜き取り埋土はみられず、裏込めと理解した埋土は建て替え時の掘方再掘削後の裏込め埋土かもしれない。埋土は褐色・黄灰色・明黄褐色粘質土ないしシルトの互層で、基盤層ブロックである黄褐色粘土を多く含む。層厚が薄く、丁寧な裏込めが施される。出土遺物は稀薄であるが、8世紀前半に属する遺物で占められ、当該期に機能時期を求めておきたい。

SB2039 (図 344.345)

調査区中央部東寄り検出した掘立柱建物ないし柵である。SB2014に先行する重複関係を認める。調査区際で検出したため、直交する方位の柱穴は未検出である。主軸ラインの延長上にSB2038の西梁間があり、当初は組み合わせ可能性、後述するSB2014の当初の掘方等を想定し、調査区を8.7m北に拡張した。南北延長線上の等間には柱穴はみられず、SP3024・SP3025間の柱穴も埋土が異なり、深度も極めて浅く、SB2014とも筋筋に食い違い等を認めることから、別遺構と捉えた。東側の32-3トレンチ西端部に組み合わせる柱穴がなく、2×3間の南北主軸の建物を想定したい。梁間は柱間1.5mであれば3m、1.8mであれば3.6mとなる。西桁行の主軸方位は周辺の条里地割に合致した方位を呈する(北25°西)。掘方は建物主軸に辺を描いた隅丸方形を呈する。掘方規模は0.8m前後を測り、SP3023は1mに達する。深度は0.25m前後と浅い。SP3022で柱痕を捉えたが、抜き取り埋土はみられず、SP3023は抜き取り埋土を認めるが柱痕は確認できない。裏込め埋土は褐色・黄灰色・明黄褐色粘質土ないしシルトの互層で、基盤層ブロックである黄褐色粘土を多く含む。層厚はやや厚い。出土遺物は稀薄だが、8世紀前半に属する遺物で占められ、当該期に機能時期を求めておきたい。帰属時期がSB2038と同時期であり、建物東辺を描いた可能性があり、当該期の建物群の配置や性格は判然としなが、建物配置に計画性を認める点は看過できない。

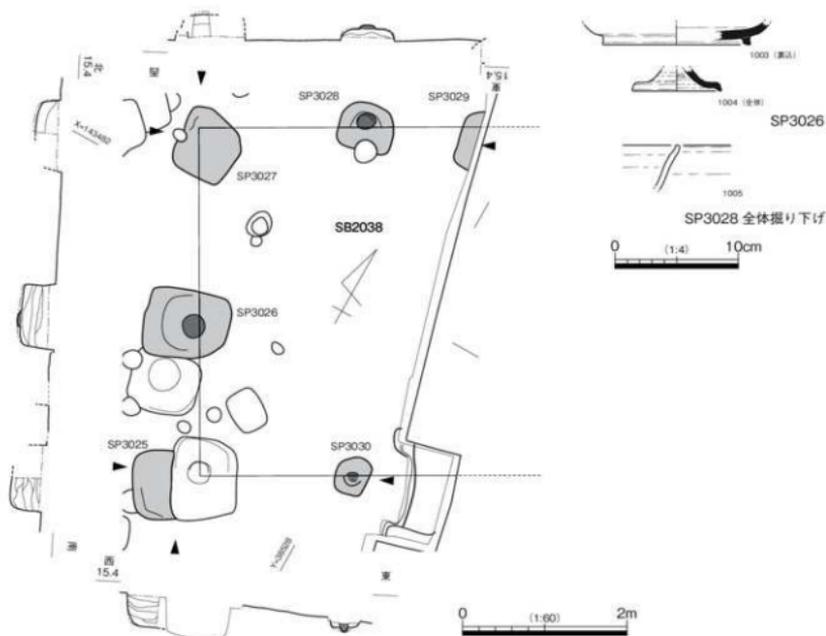


図 343 34-3Tr・SB2038 平面図及び出土遺物

SB2040 (図 346.347)

調査区南西部で検出した掘立柱建物で、西西部は調査区外へ延びる。10世紀中葉埋没のSX3003・12世紀代理没のSX3004・SB2041に先行する重複関係を有する。東西主軸建物と想定すると、平面プランは梁間3間(約4.5m)、桁行2間以上(約2.5m)、検出面積11.3㎡を測る。桁行の柱間は1.8mないし2.1m、梁間は1.5m前後に復元できる。主軸方位は周辺の条里地割に合致した方位を呈する(北67°東)。掘方は建物主軸とそれに直交する方向に辺をほぼ揃えた隅丸方形を呈する。深度は後出遺構により上部は消失するが、0.5m前後に復元でき、SP3012で柱痕及び底面の柱部分の変色(柱痕スタンプ)を確認した。裏込め埋土は黒褐色・黄褐色・暗灰黄色粘質土の互層で、基盤層の黄褐色粘質土ブロックを多く含む。

出土遺物はSP3099裏込めから出土した土師器鉢と鉄釘に限られる。外面には横方向のミガキ調整を認め、7世紀末から8世紀前半代の所産と考えられる。出土遺物の年代観と条里地割に合致した建物主軸方位から8世紀前葉から中葉頃の帰属時期を想定したい。なお、調査時には東に並置されたSB2042を当該期まで下げて2棟が並置された状況を想定したが、SB2042の帰属時期は9世紀後葉まで下り、建物の共時性は認められない。

SB2041 (図 346.347)

調査区南西部で検出した掘立柱建物で、西西部は調査区外へ延びる。SB2040に後出し、10世紀前葉から中葉埋没のSX3003、12世紀代理没のSX3004に先行する重複関係を有する。東西主軸建物と想定すると、平面プランは梁間3間(約4.2m)、桁行2間以上(約2.2m)、検出面積9.2㎡を測る。桁行の柱間は1.8m、梁間は中央部が1.1m前後、両脇が1.5m前後に復元できる。主軸方位は周辺の条里地割に合致した方位を呈する(北72°東)。掘方平面形はやや歪な形状を呈し、規模も不揃いである。深度は後出遺構により上部は消失するが、0.3m前後を測る。SP3097には

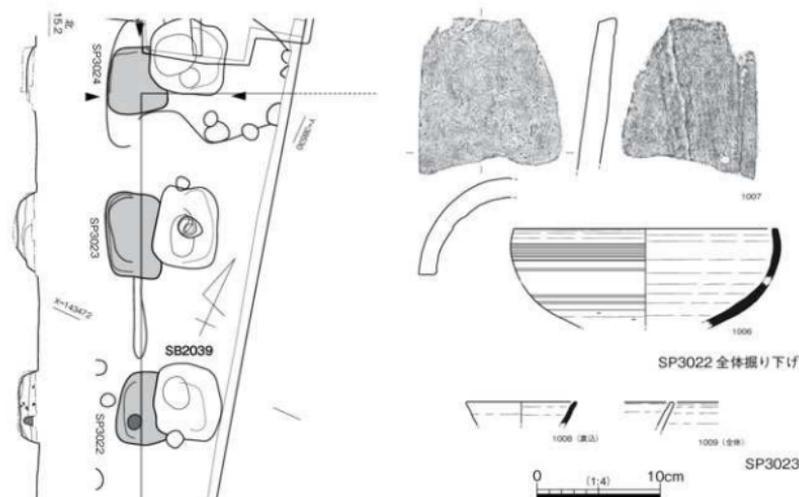
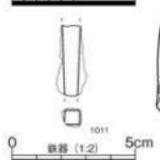
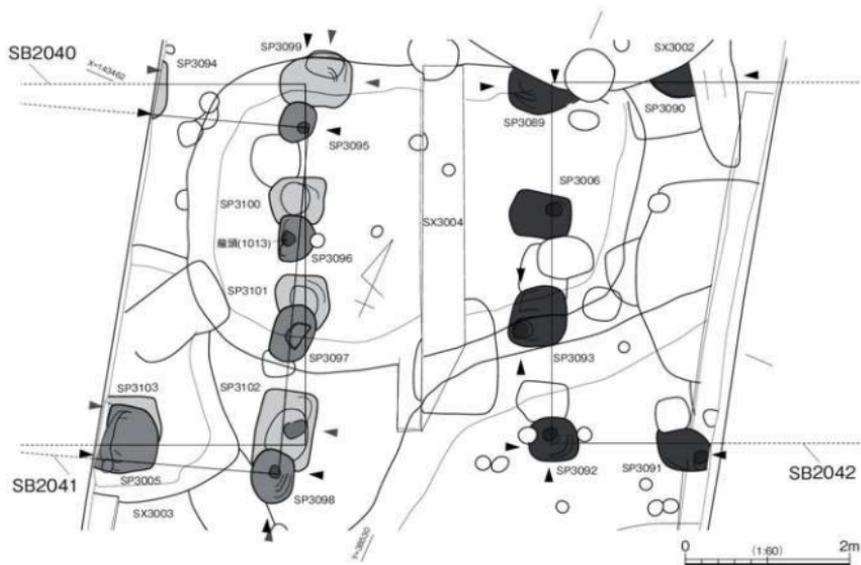


図 345 34-3Tr・SB2039 平面図及び出土遺物

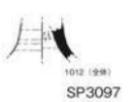
0.4 m 程度の礎板石状の根石を認め、それ以外の東梁間を構成する柱穴には径 0.15 m 程度の柱枿を認める。裏込め埋土は褐色・にぶい黄色粘質土の互層で、黄褐色粘土ブロックを多く包含する。

出土遺物は SP3097 から古相の須恵器高坏脚部片 (1012)、SP3096 柱痕から出土した金銅製龍頭に限られる。金銅製龍頭 (1013) は全長約 5.2 cm、高さ約 2.2 cm、厚み約 1.4 cm の小型品である。等倍の実測図と X 線 CT 画像を掲載した。鍍金前の研磨等によりバリ痕跡等は見られないが、X 線 CT 画像 (註 13) の断面では龍頭部分と基部のソケット部分に食い違いを認め、型成形が想定できる。内部は中空で、底面喉元のみ 1.2 × 0.5 cm 程度範囲が吹き抜け状となる。切れ長の目は輪郭を追刻し、立体感を創出する。口は上下に開き、おそらく珠玉を銜えた状態を表出し、先端部に 2 mm 程度の穿孔を認める。鼻や耳は立体感があり、耳には線状の浅いくぼみを入れる。頭頂部には径 3 mm、深さ 5 mm 程度の未貫通の孔を認める。口元には側板状の板を配する。基部はソケット状を呈し、木柄等の差し込みが可能だが、目釘穴は認められない。X 線 CT 画像では耳や口の稜線部分が細い白線状に見え、エッジのシャープな状況が想定でき、口元には凸線で表現されたヒゲも認める。表面はほぼ全面に鍍金を施す。なお、鉛銅対比分析結果では朝鮮半島との関係が深い原料が用いられたことが判明している (第 6 章第 3 節)。性格は判然としませんが、類例を見ると、龍頭は旗や幟、天蓋などの吊り具で使用される例が多く (註 14)、木資料も基部に曲がった棒状のものを差し込み、銜えた珠玉の穿孔ないし喉元の吹き抜けに別装置を装着して何かを吊り下げための吊り具と考えられる。

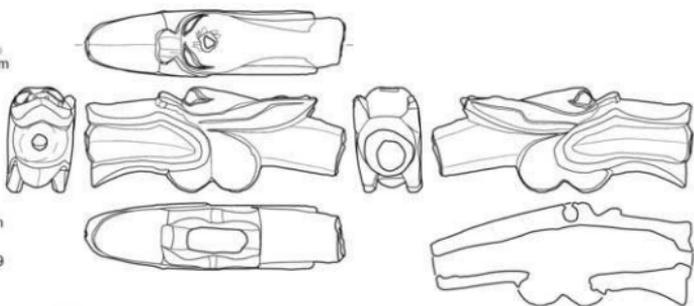
出土遺物から建物の帰属時期の特定は困難だが、遺構の重複関係から 8 世紀中葉頃を想定しておきたい。



SP3099
SB2040



SP3097
SB2041



SP3096

SB2041

1013

図 346 34-3Tr・SB2040～2042 平面図及び出土遺物

SB2042 (図 346.348)

調査区南東部で検出した掘立柱建物で、東半部は調査区外へ延びる。11世紀中葉から末埋没のSX3002・12世紀代埋没のSX3004に先行する重複関係を有する。東西主軸建物と想定すると、平面プランは梁間3間(約4.5m)、桁行2間以上(約2.8m)、検出面積は10.8㎡を測る。柱間は柱痕の通りが悪いが、梁間は1.5m前後に復元できる。主軸方位は周辺の条里地割に合致した方位にとる(北67°東)。掘方平面形はやや歪な形状を呈し、深度は後出遺構により上面は消失するが、0.4m前後に復元できる。SP3090を除く柱穴で径0.15~0.2mの柱痕を認め、裏込め埋土は黄褐色粘土ブロックを多量に包含する黒褐色・黄灰色・褐灰色粘土ブロックの細かな互層で構成され、やや層厚が厚いが、底面付近は入念な裏込めとなる。SP3093には抜き取り痕を認める。

出土遺物は稀薄であり、SP3006全体掘り下げ時出土の土師器杯(1014)と黒色土器碗(1015)、SP3090全体掘り下げ時出土の須恵器蓋(1016)に限られるSB2040と並置関係にある配置状況であり、8世紀前葉から中葉の帰属を想定したいが、SP3006出土遺物は9世紀後葉頃の所産となる。上面出土遺物であり、混入の可能性も否定できないが、ここでは9世紀後葉前後の帰属時期を想定しておきたい。

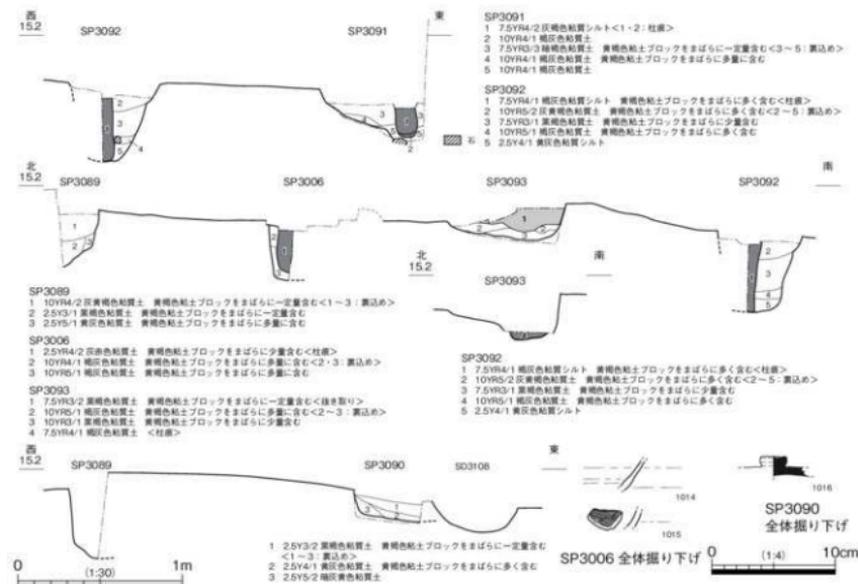


図 348 34-3Tr・SB2042 断面図及び出土遺物

SB2014 (図 349 ~ 351)

調査区中央東寄りで検出した掘立柱建物である。第32次調査32-2・3トレンチで一部確認していた建物を広く調査区を設定して再検出した。平面プランは梁間2間(約4.8m)、桁行5間(約10.4m)、西側に廂を設ける南北主軸の建物である。身舎面積は49.9㎡、廂を含めた建物面積は72.8㎡を測る大型建物となる。調査区を拡張して梁間中央の柱穴確認に努めたが、後世のコンクリート畦畔の設置等の影響もあり確認できないが、西側身舎の桁行の南延長上には柱穴は認めず、本平面プランと判断した。柱間は桁行が2.1mを測り、身舎の梁間は2.4mに復元でき、廂の柱間は2.1mとなり、規格性の高さが窺える。主軸方位は周辺の条里地割に合致した方位を呈する南北主軸にとり(北25°西)、建物北辺は15m(50尺)西に離れた34-2Tr・SB2034の南辺と直線で揃え、建物配置に高い規格性が窺える。

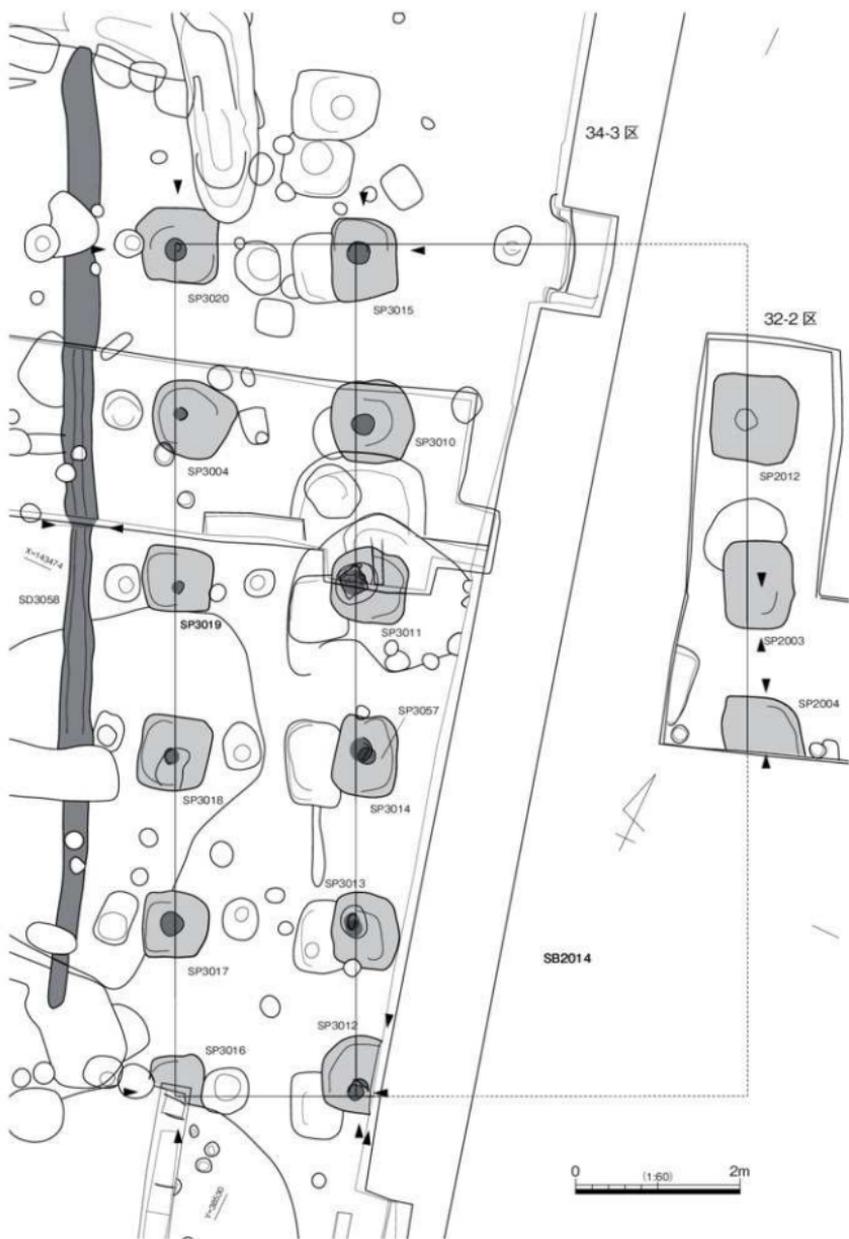


図 349 34-3Tr・SB2014 平面図

柱穴掘方は建物主軸やそれに直交する方向に辺をほぼ揃えた隅丸方形を呈する。深度は34-3 トレンチの身舎桁行は0.5 m前後を測るが、32-2 トレンチでは0.2 m前後と浅いが、最深部の標高は14.7 m前後と等しく、後世の削平の影響が想定できる。少なくとも、32-2 トレンチでは0.4 mの削平が想定できる。身舎柱に限り、2基の柱痕を認める柱穴があり、建て替えが想定できる。SP3012 では礎板石に置かれた柱痕に加え、礎板石下に柱痕スタンプを検出した。SP3014 も初期の柱痕を抜き取り、その上部別柱痕を認める。SP3013 では抜き取り埋土上面に礫を検出しており、構造は異なるが、建て替えの可能性を示唆する。SP3014 の埋土では径約30 cmの柱痕を認め、裏込めは黄褐色粘土ブロックを多量に含む黄灰色ないし褐灰色の互層で、底面では層厚の薄い丁寧な裏込めがなされる。初期の柱痕の抜き取り後に径25 cm程の柱痕を認め、黒褐色・暗灰黄色・黄灰色の互層で裏込めがなされる。柱痕径はSP3012 でも初期、建て替え後の柱穴ともにSP3014 に等しく、本建物にはかなり太い柱が用いられたことは確実である。一方、廂には柱痕は1基のみであり、建て替え痕跡は確認できない。柱痕径は最大15 cm程度であり、身舎に比して細い柱が用いられる。なお、廂の西側約1 mの地点で主軸方位を揃えた溝を検出しており (SD3058)、本建物の南北の両端とSD3058の途切れる位置がややずれるため、相伴の可否は判然としない。幅0.3～0.4 m前後、深度は0.18 mを測り、U字形に近い断面形状を呈する。埋土は灰黄褐色粘質土の単層となる。出土遺物は図化し得ていないが、凸面格子叩きの平瓦1点、土師器細々片が数点に留まる。雨落ち溝的な性格を付与したいが、断面形状や遺物の出土量はそれを否定する。

34-3 トレンチでは本建物の構成柱穴をすべて半載ないし1/4の掘り下げを行ったが、遺物の出土量は少なく、掘り下げ時に建て替えを認識できなかったため、裏込め出土として取上げた遺物が初期の裏込めか、建て替え時の裏込めかは峻別できない。出土遺物は7世紀末から8世紀前葉 (1019, 1022)、8世紀中葉から後葉 (1018, 1023, 1024, 1026)の遺物が主体を占め、土師器環 (1027) がそれより下の時期の所産と考えられ、建て替え時期を示唆する。細片であるため、正確な時期比定は困難だが、身舎の造営は8世紀後葉前後とし、廃絶時期を示す層位はないが、後述するSB2037の建立時期から10世紀初頭に求めたい。その間に建て替えが行われるが、1027から9世紀後葉前後を想定しておきたい。一方、廂柱穴出土遺物は8世紀中葉から後葉に属する遺物を多く認め、8世紀後葉の建立初期から完備されていた可能性が高く、建て替え痕跡を認めないため、身舎の建て替え時に撤去された可能性が高い。

SB2037 (図 352.353)

調査区中央部で検出した掘立柱建物である。時間的制約もあり、上面検出後の3 cmほどの全体下げで留めた。SB2014に後出し、12～13世紀代の小型柱穴群に先行する重複関係を認める。南北主軸の建物で、梁間2間 (約3.1 m)、桁行5間 (約10.2 m)、東面廂構造の平面プランを想定した。両面廂構造を考慮し、南側梁間延長部を拡張したが等間に柱穴はなく、3間×5間建物という捉え方もできる。身舎面積は31.6 m²、廂を含めた総面積は49 m²を測る。桁行の柱間は1.8 mと2.1 m前後が混在し、梁間の柱間は不揃いである。建物北辺は前代のSB2014の北辺ラインに合致するとともに、34-2 トレンチのSB2036の南辺ラインと同一線上に位置する。全体掘り下げでは多くの柱穴で径0.2 m弱の柱痕を検出したが、抜き取りと考えられるやや規模の大きな掘方も確認できる。

1039～1055は全体掘り下げ時の出土遺物である。出土層位は不明瞭だが、土師器碗を一定量認め、帰属時期を反映する (10世紀中葉以降)。平瓦 (1051) の凸面には平行叩き状の凹部に細線で格子を作り出した格子叩き風の平行叩きを認める。また、SP3035出土の土師器環 (1043) は11世紀初頭から11世紀前葉に属し、同柱穴で抜き取り痕跡を検出しており、廃絶時期を示唆するかもしれない。帰属時期に問題を残すが、出土遺物の年代観を最大限評価し、10世紀中葉頃の造営、11世紀初頭から前葉の廃絶時期を想定しておきたい。

小規模柱穴群 (図 354)

調査区中央部を中心にほぼ全面に展開する柱穴群である。柱穴数は150基を上回る。径0.3 m以下の小柱穴で黒色系の埋土を基調とする。西接する34-2 トレンチでは本調査区より柱穴数・密度がやや低く、本調査区が分布の中心となり、周縁に向けて遺構密度がやや低下する。直線的に柱穴が並ぶ箇所を数箇所認めるが、建物復元には至っていない。複数の建物の度重なる建て替えによる柱穴数の多さと理解できる。掘り下げ調査は実施していないが、周辺に

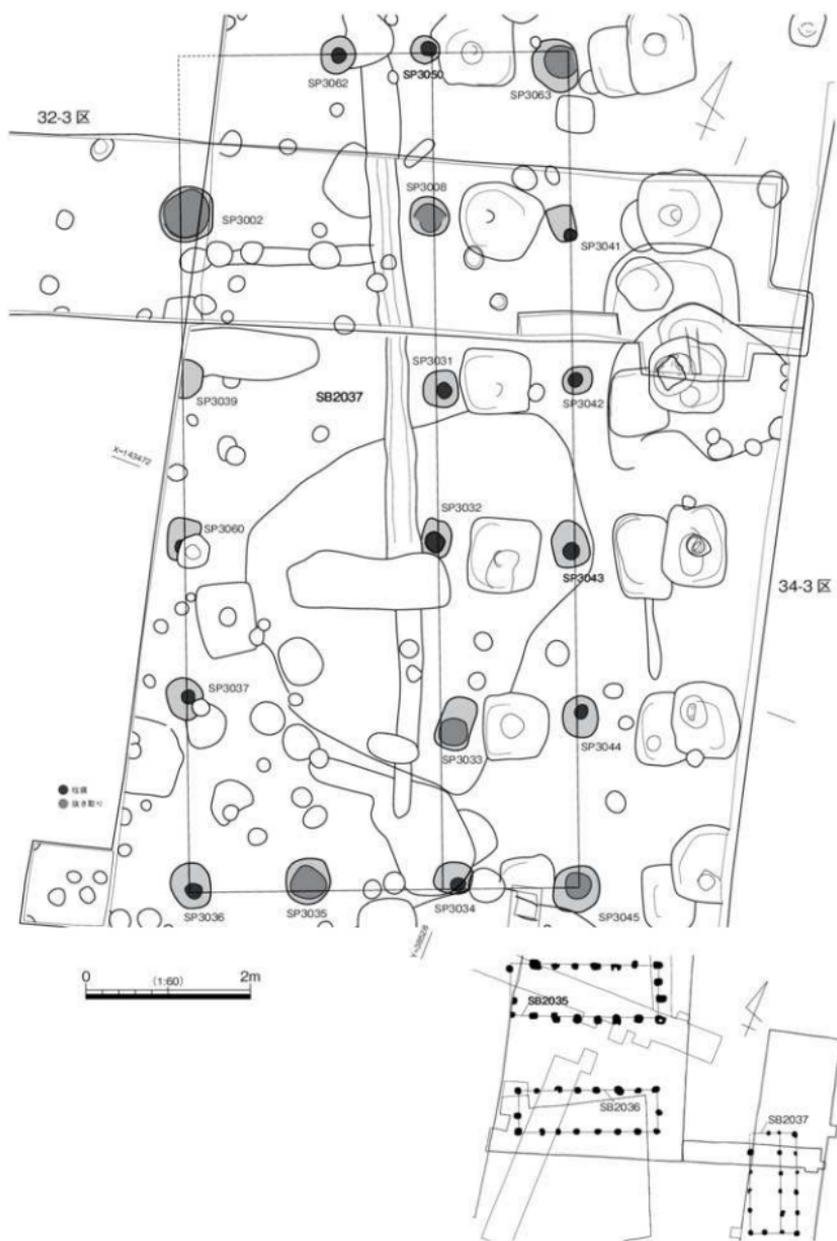


図 352 34-3Tr・SB2037 平面図

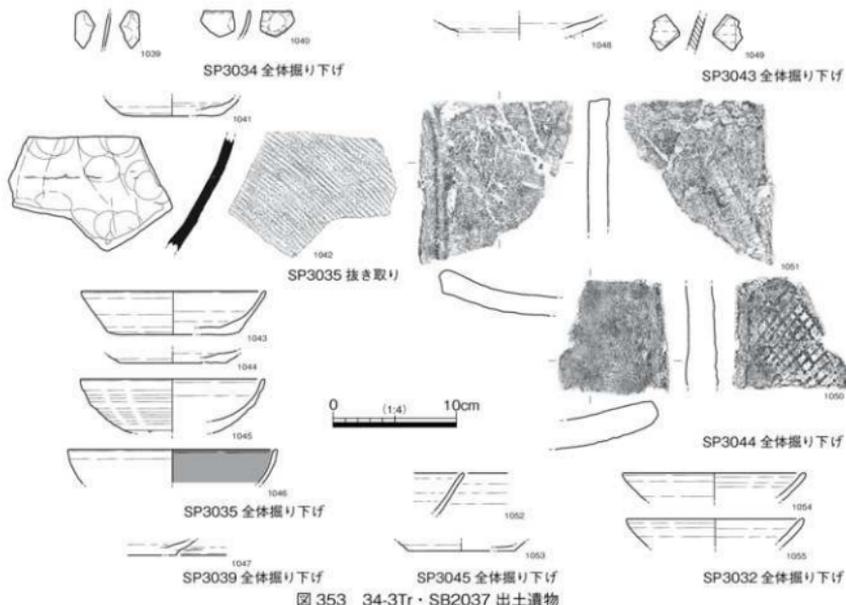


図 353 34-3Tr・SB2037 出土遺物

おける調査例や上面の出土遺物から、11 世紀中葉から 13 世紀の帰属時期が想定できる。

これら小規模ピット群の広がりや、すでに指摘されているように（香川県教育委員会 2016）、溝や堀による遮蔽施設は不明確であるが、井戸も併設されており（SX3002、SE3088）、井戸を完備する屋敷地的なまとまりの一角であることを示す。さらに、32-2・5 トレンチ東端部の低地は古代から整地がなされるが、12 世紀前後にも大規模な造成が行われており、屋敷地造営に伴う整備と理解でき、34-3 トレンチを中心とした屋敷地的なまとまりの東限となる。北限は本調査区北側では柱穴密度が低くなり、その北に位置する 32-6 トレンチでは柱穴数が激減するため、その付近に想定できる。南限については判然としませんが、34-3 トレンチ南端部にある筆境付近に想定でき、西限は 32-1Tr・SD1010 付近に求めたい。よって、屋敷地的なまとまりの規模は南北約 40 m、東西約 44 m を測り、後述するが、内部に少なくとも 2 基の井戸の所在が想定できる。1056～1060 は小規模柱穴から出土した遺物である。土師質土器小壺（1060）の内面には漆の可能性のある付着物を認める。1058 は脚である。おおむね 12～13 世紀前半代に属する。

SD3010 (図 355)

調査区北側で検出した溝状遺構である。主軸方位は周辺の条里地割に合致する（北 78° 東）。9 世紀後葉に埋没する SK3009 に先行する重複関係を有する。SK3009 の下位で SD3010 掘方と埋土を確認しており、東端部は屈曲し、短く延びた後、途切れる。西側は調査区外に延び、西 13 m に所在する 34-2 トレンチで延長部は確認できず、比較的短く収まる遺構と考えられる。断面形状は逆台形を呈し、下位に機能時の堆積層と考えられる埋土が堆積し、大部分を占める上位には焼土・炭化物や基盤層ブロックを多く含む黒褐色粘質土を認める。上位は比較的短期間に埋没した可能性が高い。底面に凹凸を認め、東端部付近は一段深く、西側はテラス状を呈し、両者の比高差は 0.15 m を測る。出土遺物は 28 ℓ コンテナで 1 箱出土した。1061～1069 は SD3010 出土遺物である。1064 は黒色土器（A 類）碗である。口縁部は鈍く立ち上がり、内面には入念なヘラミガキを認める。胎土は精良で、焼成は堅緻である。1065 は銀投窯産灰釉陶器蓋である。口縁部外面には溶着痕を認める。9 世紀前半。1066 は外面に顕著な指オサエを認め、器壁が厚

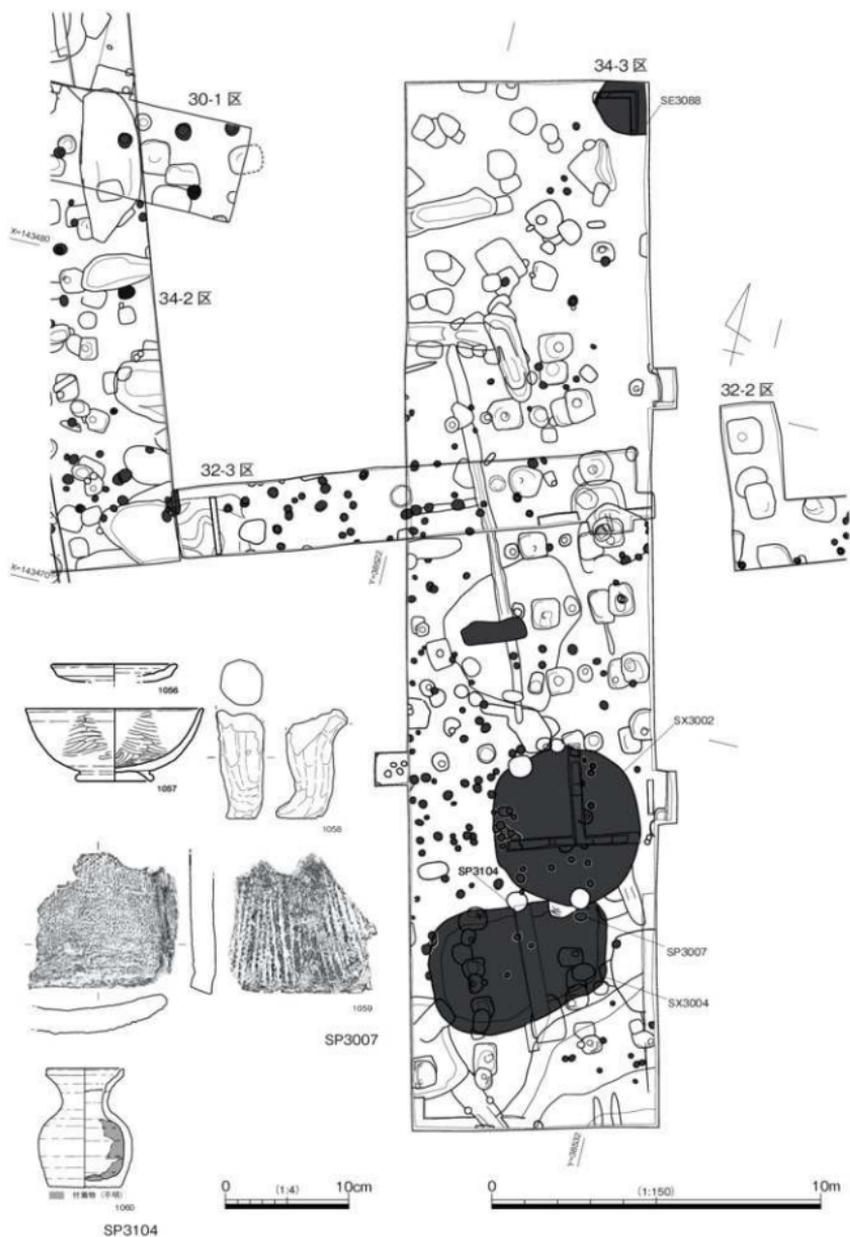


図 354 34-3Tr 柱穴平面図及び出土遺物

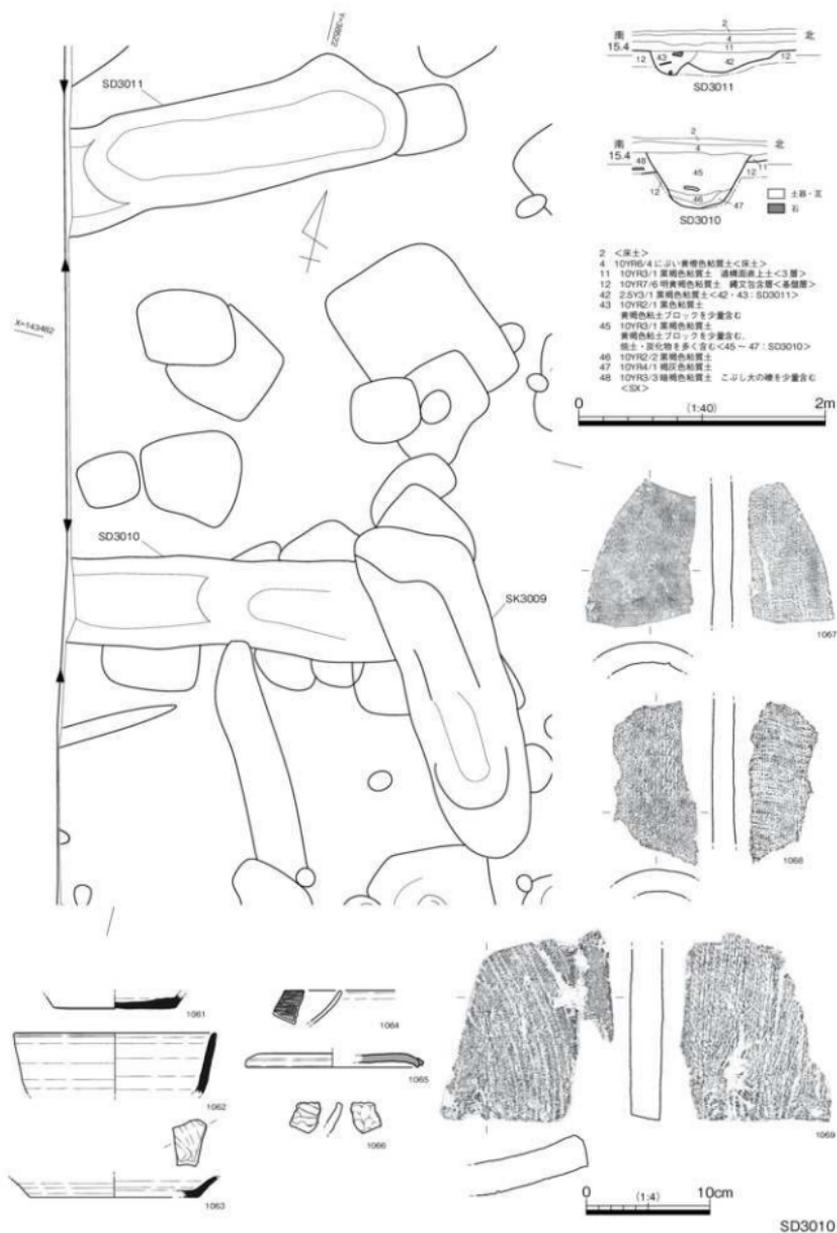


図 355 34-3Tr・SD3010.3011 平断面図及び出土遺物

SD3010

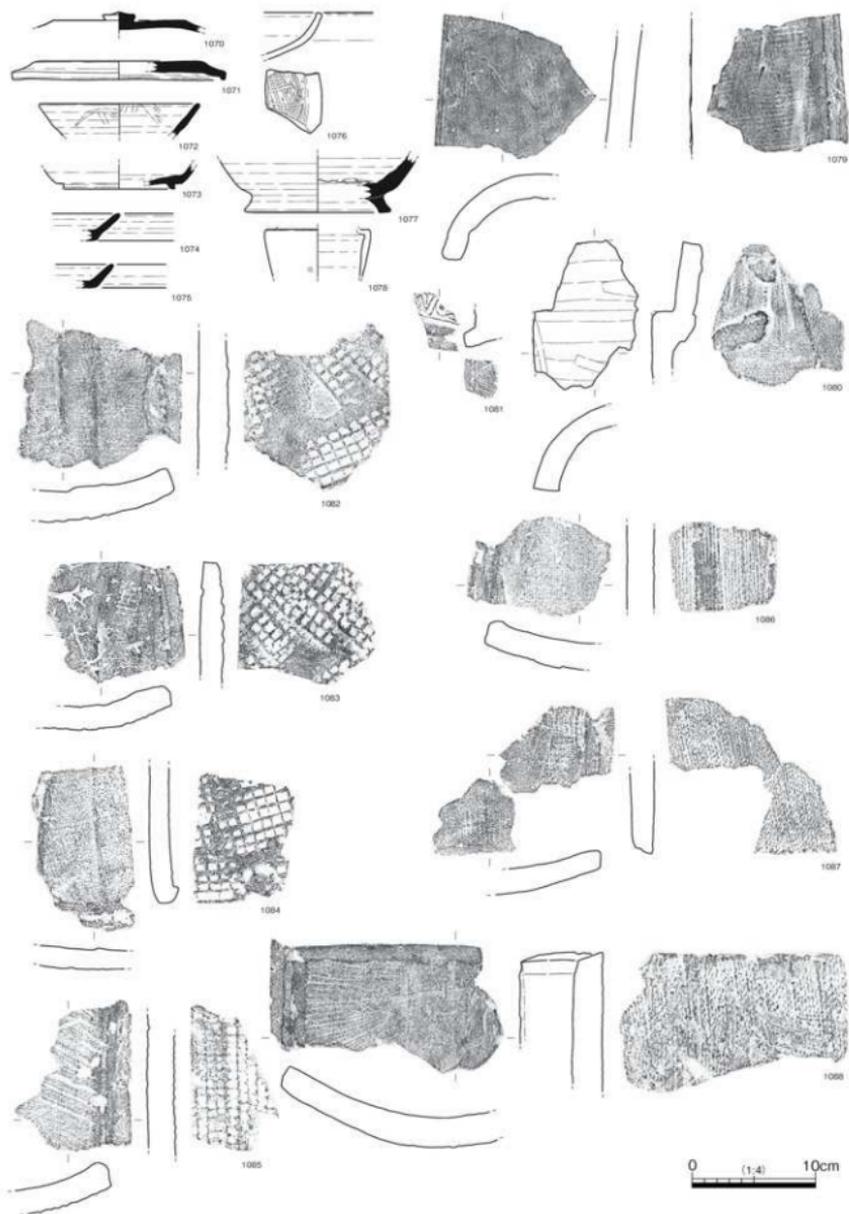


図 356 34-3Tr・SD3011 出土遺物

いため、焼土器と考えられる。出土遺物の帰属時期は1064が下る可能性も残すが、9世紀前葉から中葉前後に属し、遺構の廃絶時期を示す。屈曲した溝が途切れる箇所にSB2014が所在するが(8世紀後葉建立、9世紀後葉頃建て替え)、両者の関係は明らかでない。

SD3011 (図 355.356)

調査区北側で検出した溝状遺構である。主軸方位は周辺の条里地割とはやや異なる(北63°東)。東端部は途切れ、西は調査区外に延びるが、西13mに所在する34-2トレンチでは延長部は確認できず、比較的短く収まる遺構と考えられる。断面形状は浅いU字形を呈し、埋土は黒褐色粘質土の単層である。底面に凹凸を認め、東側は深い、西端部付近は浅くなり(テラス状)、両者の比高差は0.15mを測る。出土遺物は28㊦コンテナで1箱出土した。1070～1088はSD3011出土遺物である。1078は土師器壺Eである。1081は軒平瓦である(KH205型式)。本型式は複数の范が想定でき、KH205 B'型式に分類した(第7章第2節)。凸面には斜位の縄目き目を認める。瓦の出土量は破片数61点(丸瓦12点(20%)、平瓦49点(80%))、総重量7,164g(丸瓦1,781g(25%)、平瓦5,383g(75%))を数える。平瓦の凸面調整の格子目ききと縄目ききの比率は破片数では30%:70%、重量比では40%:60%となる。出土遺物の年代観は9世紀前葉から中葉前後となり、埋没時期を示す。

本遺構はSD3010にほぼ平行した溝で、溝間は中央で3.5～4.0mを測り、底面構造や東端部が途切れる箇所を揃え、埋没時期も類似することから、一連の遺構の可能性を残す。同様の遺構は33-1トレンチでも確認でき(33-1Tr・SD1014・SK1009)、2条の平行する溝が9m間隔で配置される。本施設より幅は広いが、帰属時期はほぼ同時期である(9世紀前葉)。

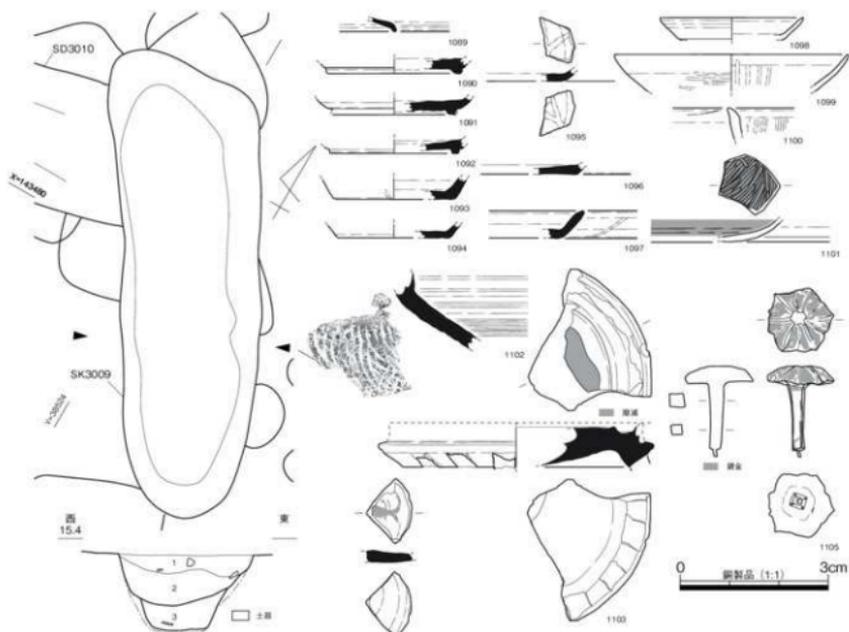
SK3009 (図 357.358)

調査区中央北寄りで検出した土坑である。SB2014の甕柱穴・9世紀前葉から中葉埋没のSD3010に後出し、小規模柱穴群に先行する重複関係を有する。長さ約2.9m、幅約0.8m前後を測り、逆台形状ないしU字形の断面形状を呈する。主軸方位を北30°西にとり、おおむね周辺の条里地割に合致した方位となる。埋土は下層に灰黄褐色粘質土、上層に黒褐色粘質土を認め、上層には焼土・炭化物が一定量包含する。

出土遺物は28㊦コンテナで3箱出土した。当初、下位に所在するSD3010の屈曲部が認識できず、同遺構に帰属する遺物が混在する可能性を残すが、1089～1119はSK3009出土遺物である。1098は土師器皿である。1099は土師器碗とした。内外面にミガキを認め、黒色土器の可能性も残す。1101は黒色土器(A類)皿である。内面には入念なヘラミガキを認め、胎土は精良で比較的堅緻な焼成となる。1103は円面硯である。径20cmを超える大型品である。縁を欠くが、折よりわずかに高い程度に復元できる。海はほぼ水平で、顕著に磨滅する。極めて堅緻に焼成された優品である。透かし部分すべて脱落しており、破損後に意図的に脚部を打ち欠いた可能性が高い。1104は坏ないし皿を転用した転用硯である。内面には赤色顔料が付着しており、朱墨が使用されたと考えられる。分析は行っていないが、分析した硯に付着する赤色顔料はすべてベンガラであった(10-440、11-56)。1105は銅鉾である。六弁の花形鉾で、軸部は方形を呈し、先端部が針状に小さく突出する。軸部を含めて全面に鍍金が施される優品である。全長1.9cm、鉾最大幅1.3cmを測る。1106～1108は丸瓦である。狭端部が確認できる個体はすべて行基式である。平瓦の凸面には矢羽状に配置される平行目きき、格子目きき、縄目ききを認め、縄目ききには斜位で目きき板間の隙間を認めるものもある(1118)。縄目ききが多数を占める。瓦の出土量は破片数133点(丸瓦35点(26%)、平瓦98点(74%))、総重量11,876g(丸瓦3,155g(27%)、平瓦8,721g(73%))を数える。平瓦の凸面調整の格子目ききと縄目ききの比率は破片数では12%:88%、重量比では8%:92%となる。以上、SK3009出土遺物は9世紀後葉頃の所産と考えられ、遺構の帰属時期を示す。隣接するSB2014が9世紀後葉前後に建て替えられるが、それに伴う廃棄土坑の可能性も残す。

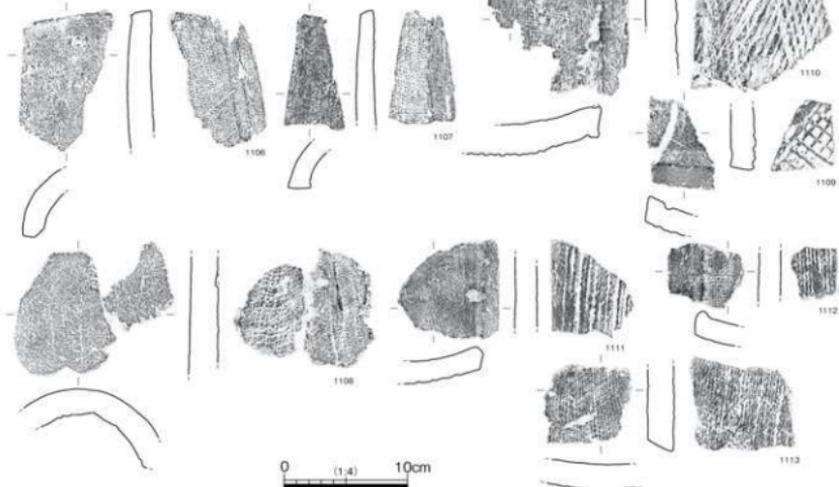
SX3004 (図 359～361)

調査区南寄りで検出した不明遺構である。多くの遺構に後出する重複関係にあり、本遺構埋没後に開削される小規模柱穴も認める。平面形は隅丸方形形状を呈し、約5.5×3.9mの規模となる。浅い皿状の断面形状を呈し、深度は



- 1 7.5VR3/1 黄褐色粘質土 粘土・炭化物を一定量含む
 黄色粘土ブロックをまばらに少量含む
 2 10rR4/2 同黄褐色粘質土 炭化物を少量含む
 3 2.5V4/1 黄灰色粘質シルト<SD3010>

0 (1:30) 1m



0 (1:4) 10cm

図 357 34-3Tr・SK3009 平面図及び出土遺物

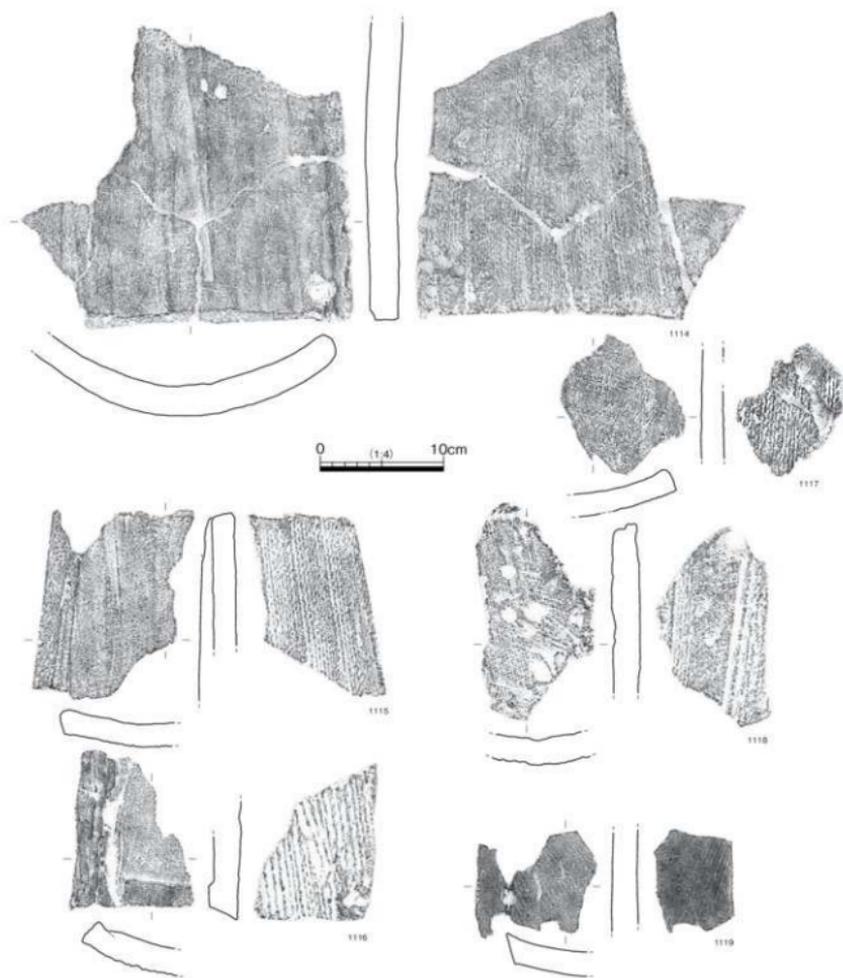
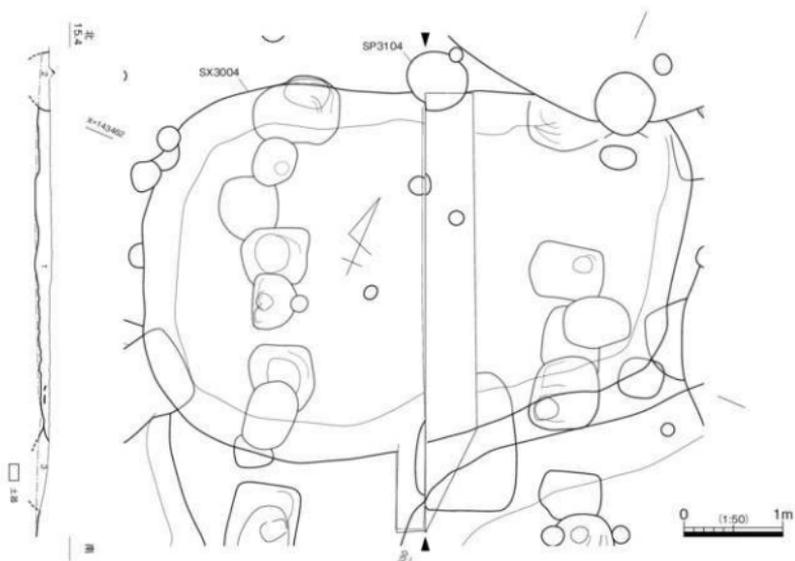


図 358 34-3Tr・SK3009 出土遺物

最深部で約 0.2 m を測る。埋土は基礎層ブロックを多く含む黒褐色粘質土の単層である。出土遺物は 28 @ コンテナで 9 箱出土した。1120 ~ 1162 は SK3004 出土遺物である。1131 ~ 1133 は土師質土器碗である。高台径が小さく、矮小化傾向が強く、古代の碗とは形状が異なる。1135 ~ 1139 は黒色土器 (A 類) 碗である。1136 は 9 世紀後葉から 10 世紀代に属する可能性が高い。1140 は近江産緑釉陶器碗である。10 世紀後半。1141 は狼投窯産灰軸碗である。9 世紀後半。1142 は三彩陶器蓋である。1143 は円面碗の可能性が高く、内面中央部付近が磨滅する。両長側縁が直線状を呈しており、円面碗を転用して何かを作り出したようである。1147・1148 は八栗産白色凝灰岩製の石造物である。1147 はノミ痕を認める底面から鈍角に屈曲し、面のある側縁に繋がり、上面には断面ホームベース形の立方体を隔



- 1 10YR3/2 黄褐色粘質土 黄褐色粘土ブロックをまばらに多く含む 粘土-炭化物をまばらに多く含む<SX3004>
- 2 10YR2/1 黄褐色粘質土 黄褐色粘土ブロックをまばらに一定量含む<SP3014>
- 3 10YR3/3 暗褐色粘質土 黄褐色粘土ブロックをまばらに多く含む<別遺構>

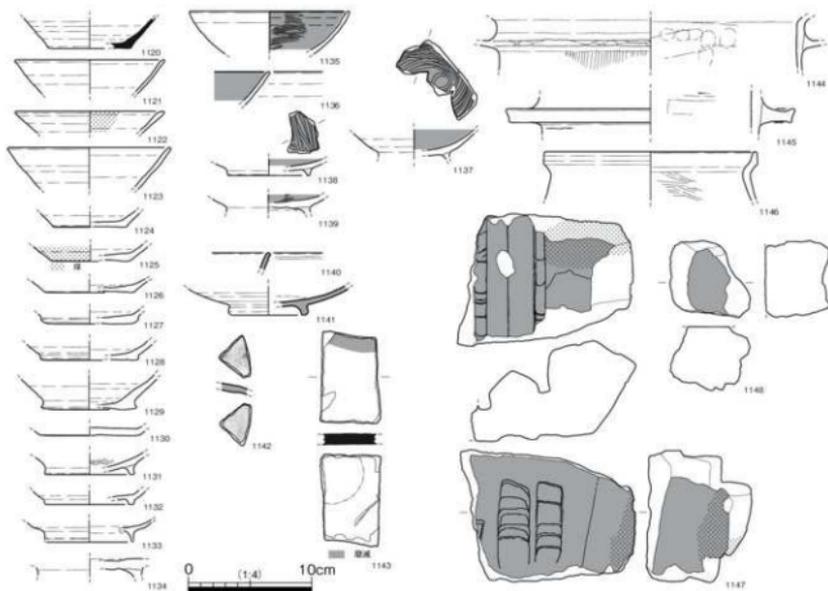


図 359 34-3Tr・SX3004 断面図及び出土遺物 1

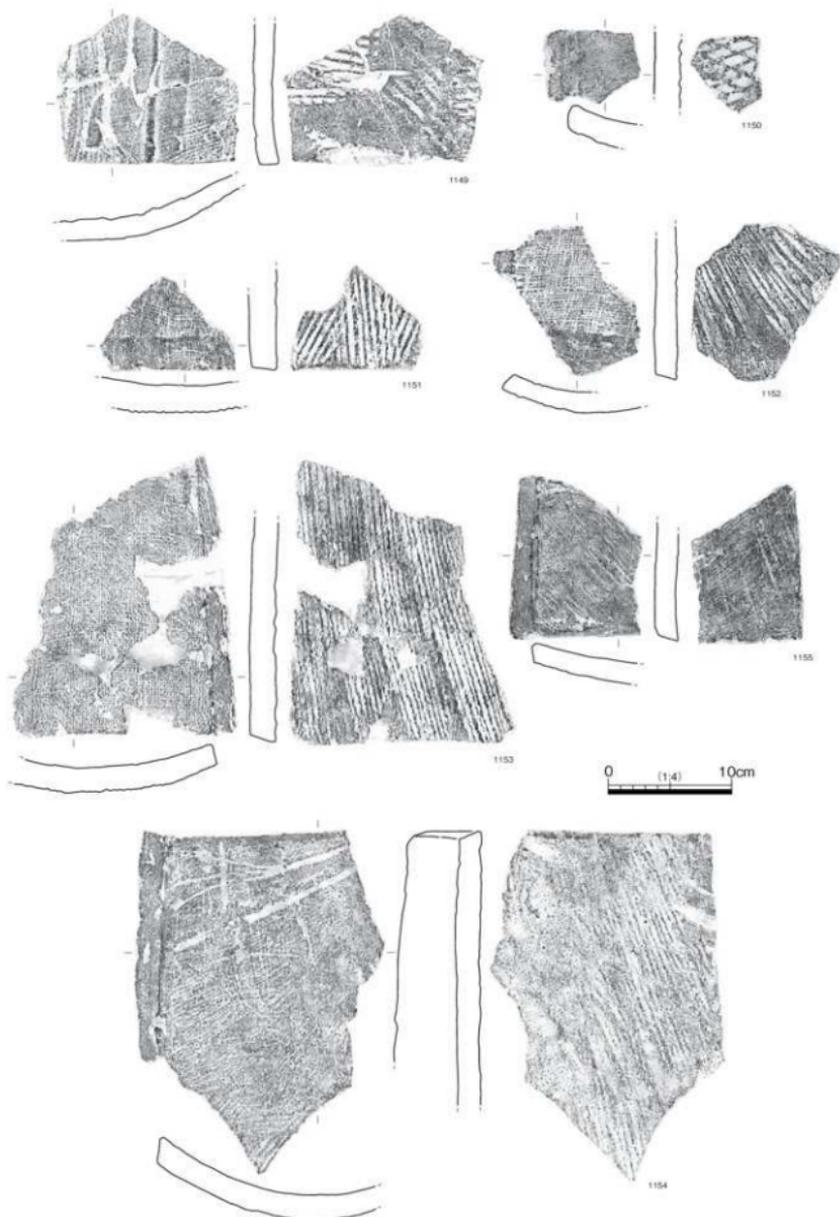


圖 360 34-3Tr・SX3004 出土遺物 2

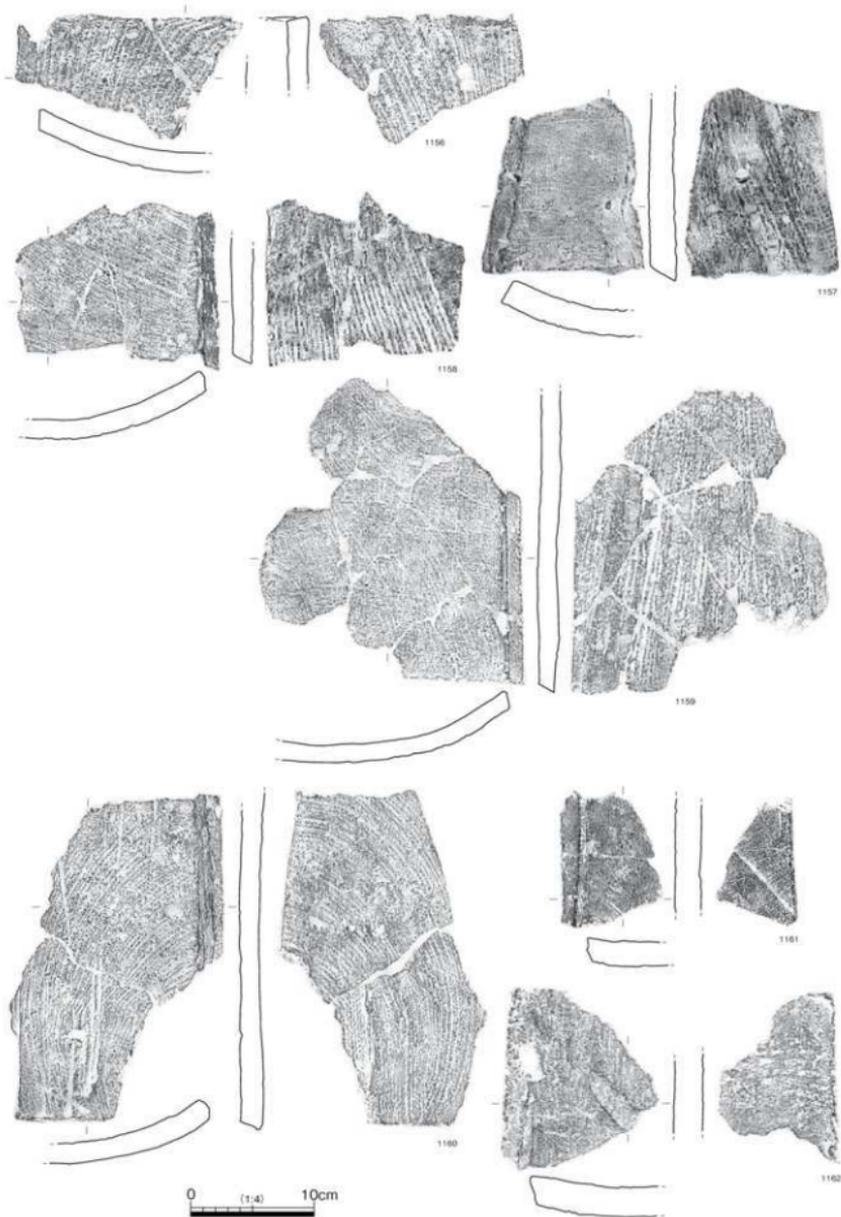


図 361 34-3Tr・SX3004 出土遺物 3

刻する。破片であり、全体形状は不明だが、立方体は屋根部の丸瓦ないし軒部の垂木を抽象表現した可能性が高く、本資料はやや写実的な表現を持つ層塔の笠部と考えられる。1149～1162は平瓦である。凸面は平行叩き→格子叩き(1149)、斜格子叩き(1150)、斜位ないし矢羽状の平行叩き(1151～1152、1155)、斜位の縄叩き(1153～1159)、糸切り未調整(1160)、格子叩き→ナデ(1162)と多様である。1161は側縁に布目を認め(一枚作り)、斜位に2mm程の段差を認める。瓦の出土量は破片数611点(丸瓦199点(33%)、平瓦412点(67%))、総重量58,094g(丸瓦16,940g(29%)、平瓦41,154g(71%))を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では14%:86%、重量比では14%:86%となる。以上、SX3004出土遺物は、古相を示す遺物を多く認めるが、黒色土器(1137)の年代観から12世紀代の廃棄が想定できる。埋土に炭化物を多く含み、34-1Tr・SX1002、SX1003、SX1005と酷似した大型廃棄土坑と考えられる。

SE3088 (図362)

調査区北東隅で検出した全体の1/4程度を検出した大型土坑である。下位の掘り下げは行っていないが、井戸と考えられる。掘方は径3m弱の円形に復元でき、埋土は外縁部に基盤層ブロックを多く含む褐灰色粘質土を認め、内側に掘方と異なる土質で構成された土を認める。内側埋土には焼土・炭化物を多く含み、下位の状況は不明ながら、外縁部は井戸構築時の埋め土、内側掘方内埋土は廃棄に伴って井戸枠の抜き取り後の埋め戻し土と考えられる。

出土遺物はコンテナで1箱出土した。1163～1174は抜き取り上位(1.2層)、1175～1178は抜き取り中位(3.4層)、1179～1181は埋め土(5層)から出土した遺物である。瓦器椀外面にミガキ調整を認めないことから、廃絶時期は13世紀前葉頃、構築時期は11世紀末頃に想定してきた。

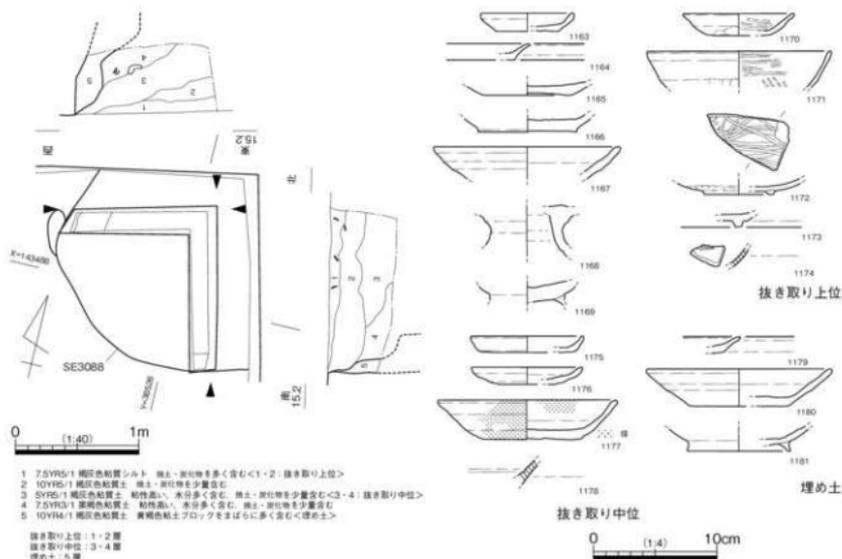


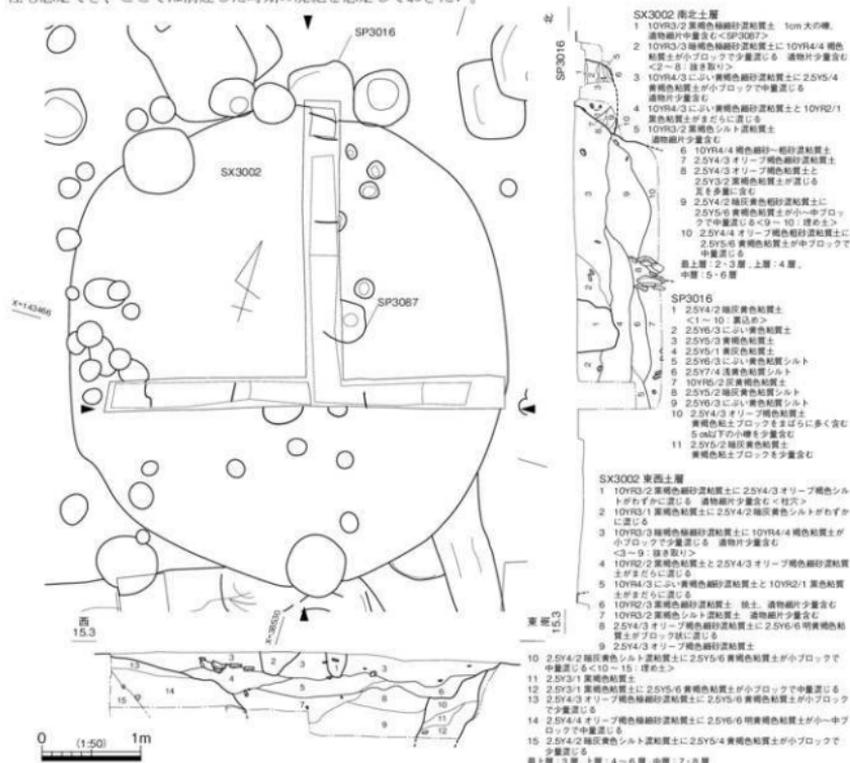
図362 34-3Tr・SE3088 平面図及び出土遺物

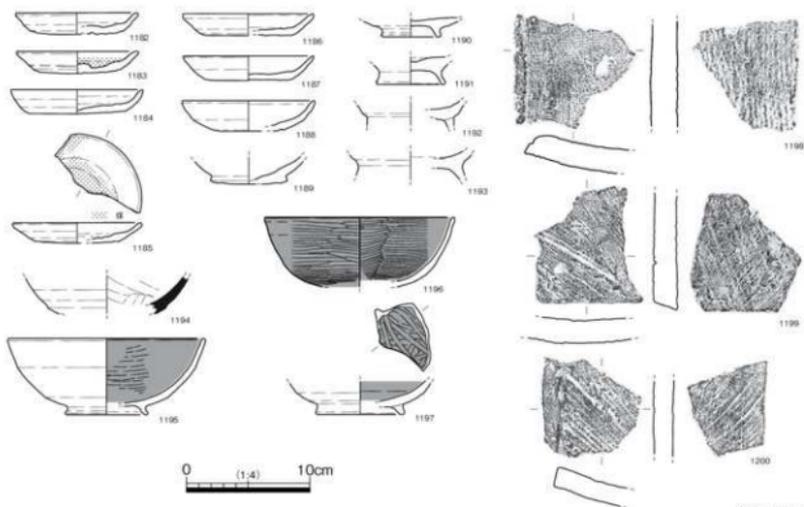
SX3002 (図 363 ~ 366)

調査区中央南よりで検出した大型土坑である。平面形は径 4.5 m 前後の長楕円形を呈する。SR2037 に後出し、小規模柱穴群の一部に先行する重複関係を有する。SX3004 に後出する重複関係を示すが、埋土が類似しており、逆転する可能性も残す。調査は部分的なトレンチ調査に留めた。東西セクションによると、内側埋土に外縁部の埋土に大別でき、後者は変色を認めるもの基盤層ブロックを含む安定した土で、内側埋土は遺物を多く含む黒褐色系粘質土埋土となる。それぞれ埋め土、抜き取り埋土と捉えられ、本遺構は井戸と考えられる。北側の埋め土と抜き取り埋土の境には礫が集中しており、井戸の上部は石組みであった可能性が高い。

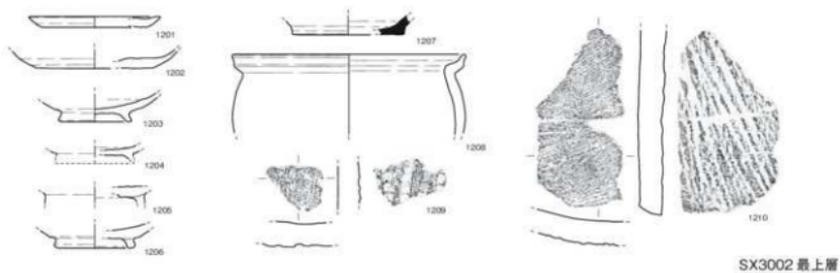
出土遺物はすべて抜き取り埋土から出土した。28 ℓ コンテナで 6 箱を数える。層別別に配置したが、ここでは一括して報告する。土器は 9 ~ 10 世紀に属する遺物を少量認めるが、大多数は 11 世紀中葉から末頃に属する。土師質土器小皿 (1201) は口縁部の立ち上がりがなく、コースター状を呈し、やや下る時期の所産かもしれない。平瓦の凸面調整は多様だが、斜位ないし円弧状の縄叩きの多くは破片が大きく (遺存状況が良好)、古相を示す格子叩きは小破片となる。瓦の出土量は破片数 560 点 (丸瓦 165 点 (30%)、平瓦 395 点 (70%))、総重量 45,616 g (丸瓦 9,541 g (21%)、平瓦 36,075 g (79%)) を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では 22% : 77%、重量比では 29% : 71% となる。1220 は土師質土器羽釜の脚部と考えられ、帰属時期に問題を残す。

以上、SX3002 は出土遺物の年代観から 11 世紀中葉から末頃に廃絶した井戸と考えたい。SX3004 との重複関係や 1201・1220 の年代観と合わないが、1201 は出土層位から混入の可能性が想定でき、1220 は羽釜脚部ではない可能性も想定でき、ここでは前述した時期の廃絶を想定しておきたい。

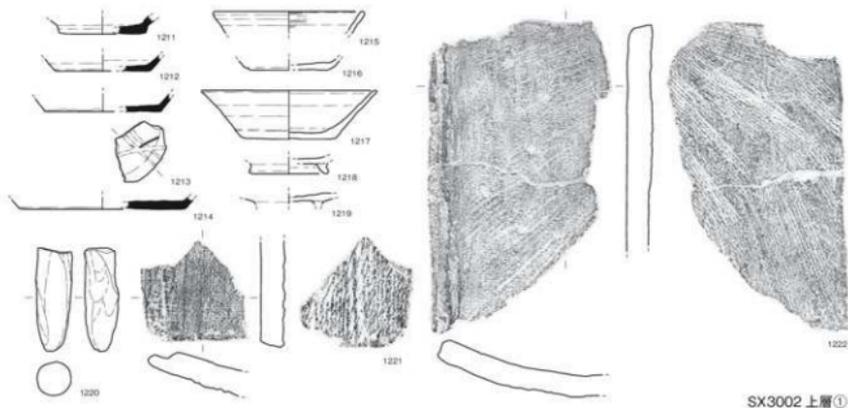




SX3002 上面



SX3002 最上層



SX3002 上層①

図 364 34-3Tr・SX3002 出土遺物 1

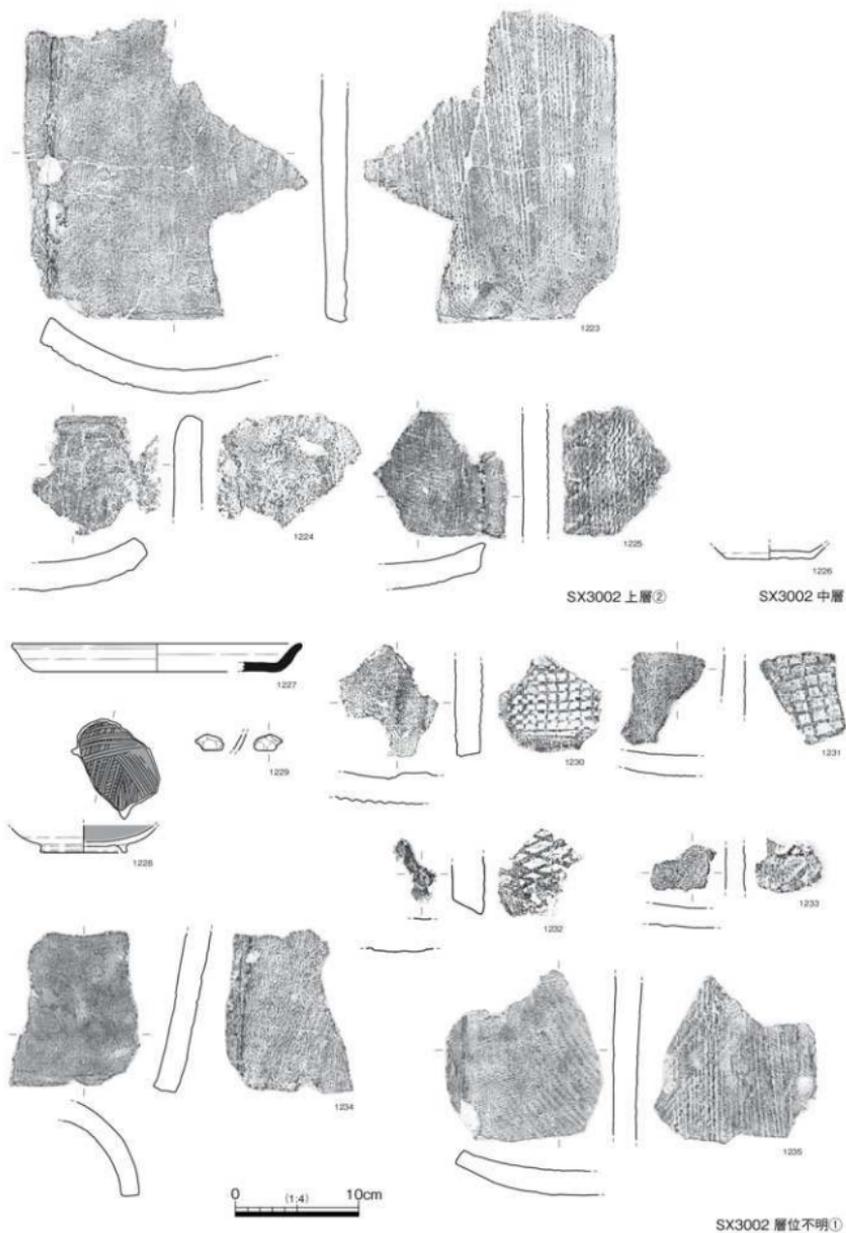


圖 365 34-3Tr・SX3002 出土遺物 2

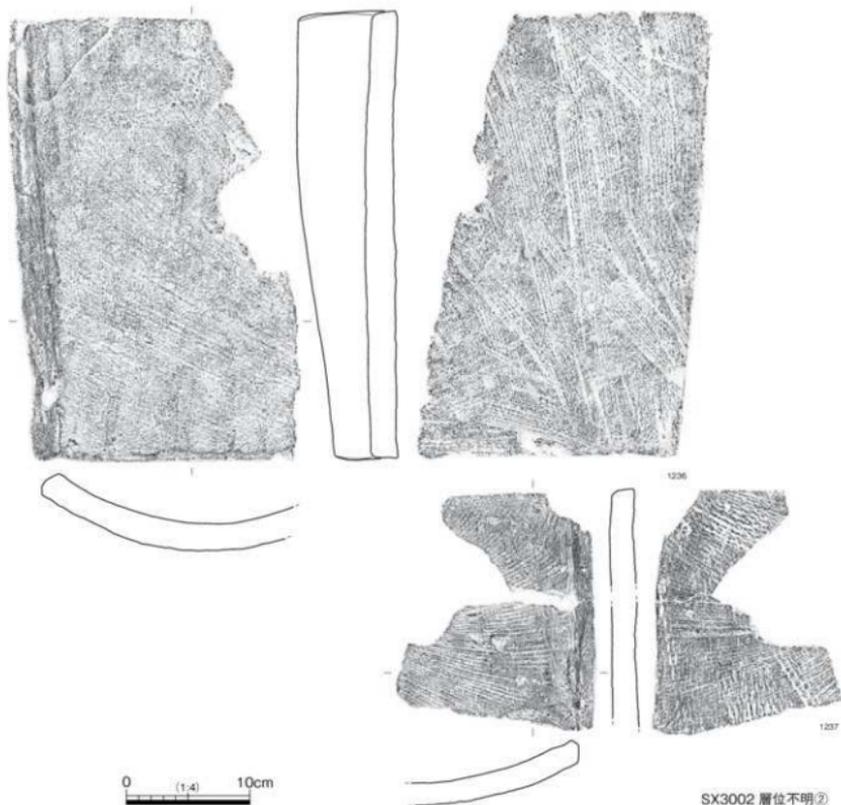


図 366 34-3Tr・SX3002 出土遺物 3

SX3003 (図 367)

調査区北西隅で検出した不明遺構である。西半は調査区外に延び全容は不明だが、不整形の平面形を呈し、南北検出長 3.1 m、東西最大幅 1.7 m を測る。34-2 トレンチから連続する道路状遺構の東側溝である SD3016 に後出し、SB2040、SB2041 に後出する重複関係を有する。南北の断面形状は皿状を呈し、埋土は焼土・炭化物を多く含む黒褐色粘質土の単層埋土である。

出土遺物は 28 0 コンテナで 2 箱出土した。遺物組成は、須恵器、土師器、黒色土器等があり、供膳具が多いという特徴がある。須恵器碗 (1241) は平碗状の形態を呈し、高台は内面を浅く割り込み、中央部に糸切り痕がかすかに残る。内底部には重ね積みによる溶着痕を認める。精良な胎土で、焼成も極めて堅緻である。籐産か。表面があばた状に発砲しており、被熱を受けたと考えられる。1251 は京都産黒色土器 (A 類) 碗である。高台は断面三角形形状を呈し、矮小化が著しい。1252 は三彩陶器蓋である。瓦も一定量出土するが図示し得ていない。平瓦の凸面調整は縄叩きが格子叩きを圧倒する量を占め、破片形状も大きい。以上、SX3003 の出土遺物の年代観は 10 世紀前葉から中葉 (佐藤編年 IV 期中相～新相) に位置付けられる。遺構内容や出土遺物の様相、帰属時期は 34-2 トレンチで確認した建物周縁の廃棄土坑に酷似した内容を示し、同性格の廃棄土坑の可能性が高いとともに、本遺構の西には 10 世紀前葉前後の建物が所在する可能性を示唆する。

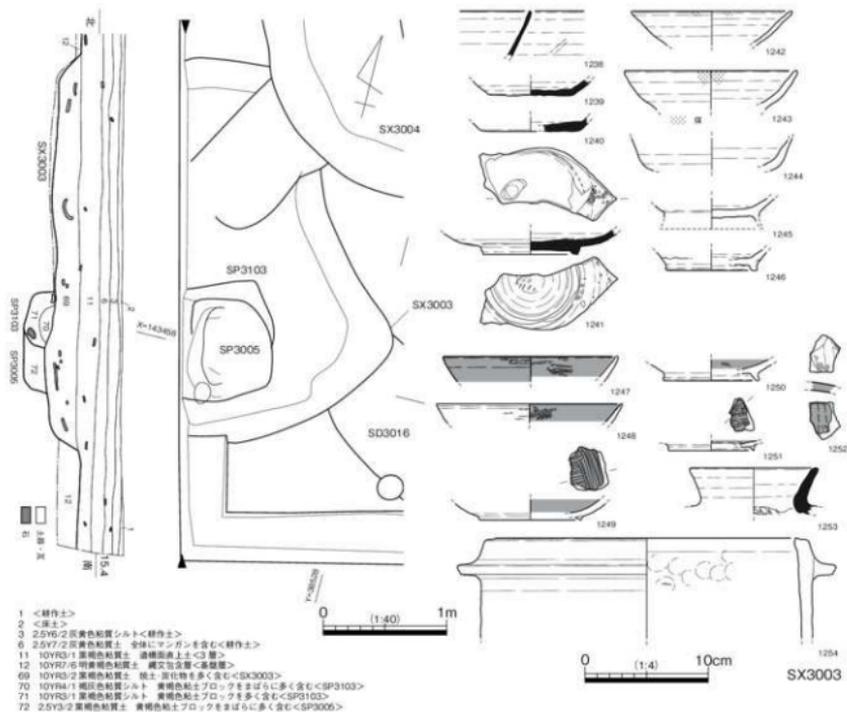


図 367 34-3Tr・SX3003 断面図及び出土遺物

SX3001 (図 368.369)

調査区南端部の落ち込みである。基盤層（12層）やその上位に堆積する古代の地表面（11層）を開削しており、本調査区の隅角を削り込むような平面形を呈し、南東方向に傾斜する。8～10層がSX3001の埋土となる。1255～1275に出土遺物を図示したが、1255～1263が9層、1264～1275が10層出土となる。下層・中層出土遺物はいずれも12世紀後半前後に属するものが主体を占め、当該期に大規模な造成がなされたようだが、それ以前にも大型建物群が展開するエリアの一角に比較的大きな傾斜変換が存在するとは想定できない。それを示すように基盤層直上の11層下面は南ないし東にわずかに傾斜しながらも、ほぼ水平であり、11世紀後葉から12世紀後半にSX3001と認識したエリアの面的な掘り下げを行った可能性を想定しておきたい。

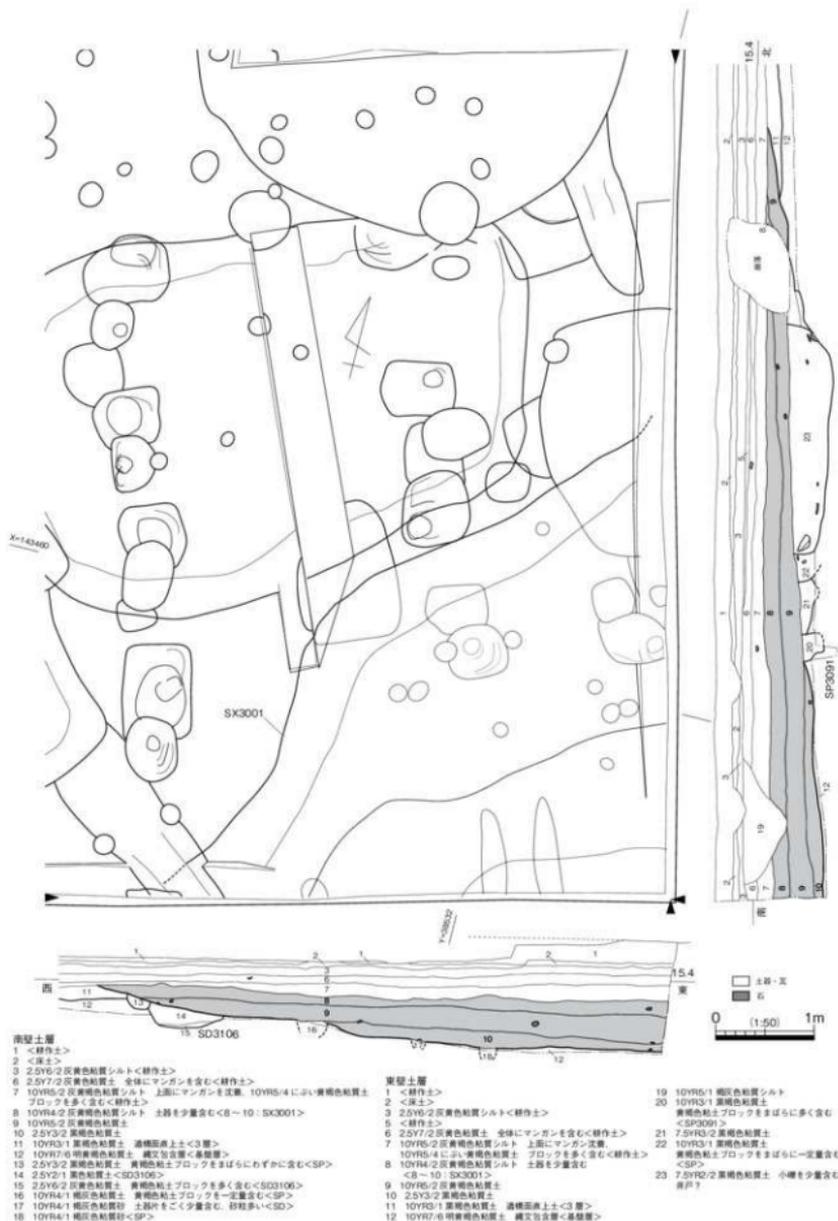


図 368 34-3Tr・SX3001 平面図

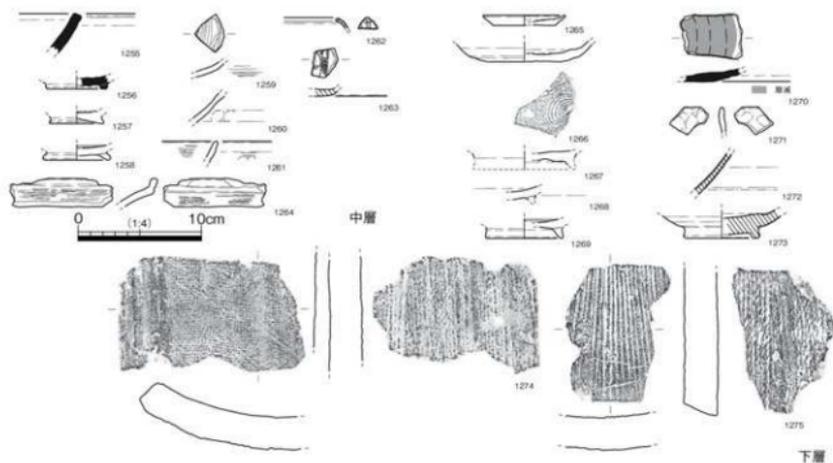


図 369 34-3Tr・SX3001 出土遺物

④小結

本調査区は広く調査区を設定した 34-2 トレンチの東に比較的大きな調査区を設けたことにより、従前断片的に捉えられていた建物の全体像を把握するとともに、34-2 トレンチの大型建物群の変遷に連動した建物変遷が明らかになった点は大きな成果である。8 世紀前葉から中葉の周辺の条里地割に合致した建物群（一部は柱筋を描えた配置）、8 世紀後葉から 9 世紀中葉の掘立柱塼構造の遮蔽施設の内における建物（西面廂、南北主軸の大型建物）、9 世紀後葉から 10 世紀初頭の南北主軸建物の建て替え、10 世紀前葉から 11 世紀前葉における南北主軸建物の新造、11 世紀中葉から 13 世紀頃の小規模柱穴群と井戸という変遷を捉えることができた。その変遷観は第 32 次調査で検出した大型建物群の変遷や 34-2 トレンチの大型建物群の変遷に連動したものであり、建物の一部は建物端を描えるなど、規格性の高い建物配置も確認した。東西主軸の主屋的な施設が 34-2 トレンチに展開するのに対し、本調査区では南北主軸の副屋的な建物が継起的に建てられており、一体的な関係が看取できる。また、金銅製龍頭や銅鉾など通常の集落では確認できない遺物も出土し、施設の性格を検討する重要な材料を得ることができた。